

# 天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VII

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群（第8次調査）  
総括～天花寺丘陵発掘調査～

2005（平成17）年3月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

三重県の中央部を流れる雲出川の流域は、かつての伊勢国一志郡とされていた地域であります。この地は、伊勢でも特徴的な文化を担った地域で、重要な遺跡が数多く所在するところです。弥生時代の稻作文化がまず受け入れられたのがこの地域と考えられますし、古墳時代前期において前方後方墳が集中する地域でもあります。また、古代律令期における中央的な文化が伊勢に受け入れられる状況を考えるうえでも、この地域の動向は非常に重要です。

今回発掘調査を行いました天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群は、雲出川の支流中村川が雲出川へと合流する付近にあたる遺跡です。ここは、発掘調査時には一志郡嬉野町天花寺地内で、今年1月の市町村合併により、今の行政区は松阪市嬉野天花寺町となっています。中村川流域にあたる旧嬉野町地内は、三重県内でも屈指の遺跡密集地域であります。この付近はとくにそれが顕著です。全国的にも著名な筒野1号墳、天花寺山丘陵内の数多くの古墳をはじめ、律令期の一志郡家がこの付近に想定され、また天花寺廃寺・一志廃寺・中谷廃寺などの古代寺院が密集する地域であります。

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群の発掘調査は、旧嬉野町教育委員会による発掘調査も含め、8次にわたって実施されてきました。今回報告する第8次調査は、県道改良工事に伴う発掘調査の最終次にあたります。ここでも、弥生時代集落や古墳などの良好な資料が確認されました。

また当報告書では、これまでに実施してまいりました一連の発掘調査をまとめる目的で「総括編」を組み込みました。当埋蔵文化財センターでも、発掘調査成果は断片的に提示しているものが多く、資料活用の際に困難をきたすことがままありました。その解決方法の一端として、こういった手法を考えてみました。当埋蔵文化財センターは言うまでもなく行政機関ですが、極めて学術的な色彩が濃い仕事であることをご理解頂ければと思います。

発掘調査にあたっては、地元である旧嬉野町および近隣在住の方々をはじめ、旧嬉野町教育委員会、県の関係諸機関から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末となりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

2005年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

## 例　　言

- 1 本書は、三重県松阪市嬉野天花寺町（2004年12月までは一志郡嬉野町天花寺）字小谷・赤坂ほかに所在する天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群の第8次発掘調査にかかる報告書である。また、天花寺丘陵の発掘調査全体の総括も併せて収録した。
- 2 第8次調査は、主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備事業に伴い、平成14年度に緊急発掘調査を実施したものである。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。

（平成14年度（発掘調査））

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター（調査研究グループ）

主事 奥野 実 柴山 圭子

調査記録委託 株安西工業

（平成15～16年度（報告書作成））

三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅰ・Ⅱグループ）

主幹 泉 雄二、 主査 森川 幸雄、 田中 久生

技師 伊藤 裕偉、 主事 大村 伸一

技術補助員 豊田 祥三
- 4 調査にかかる諸費用は、執行委任を受けて三重県土整備部が全額負担している。
- 5 発掘調査にあたっては、嬉野町（当時）在住の皆様、嬉野町教育委員会（当時）、および県土整備部道路整備課、津地方県民局久居建設部から多大な協力を得たことを明記する。
- 6 報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示等を頂いた。記して感謝いたしたい（所属は当時）。

  - 赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）、笠井賢治（上野市史編纂室）、木野本和之（亀山市教育委員会）、清水政宏（四日市市教育委員会）、村田修三（大阪大学）、和氣清章（嬉野町教育委員会）、渡辺博人（各務原市教育委員会）

- 7 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、調査研究Ⅱグループが行った。報告文の執筆は伊藤・柴山・豊田が、遺物の写真撮影は柴山・田中が行った。本書の編集は伊藤が行った。

## 凡　　例

### (地図類)

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、嬉野町都市計画図、天花寺丘陵東部測量図（三重県埋蔵文化財センター　天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告　1996年所収）である。
2. これら地図類は、国土地理院発行地形図を除き、国土調査法の日本測地系による座標第VI系（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成14年4月から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
3. 挿図の方針は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏 $6^{\circ}40'$ 、真北方位は西偏 $0^{\circ}17'34''$ （平成10年）である。

### (遺構類)

4. 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
5. 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著　新版標準土色帖（日本色研事業株式会社　1967年初版、2003年第23版）を用いた。
6. 当報告書での遺構番号は、それぞれの遺跡単位で通番としている。
7. 遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。
8. 遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは立面図となっている。
9. 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。  
S B ... 継立柱建物　S D ... 溝、堀、古墳周溝　S H ... 穫穴住居　S K ... 土坑・風倒木  
S X ... 墓、墓壙　S Z ... 土壘・落ち込みなど　pit ... ピット、柱穴
10. 遺構は、調査時に付加した遺構番号を基本的に踏襲しているが、今回の報告にあたって変更したものもある。その異同は遺構一覧表に示した。なお、出土遺物の注記については、遺構一覧表の「調査時遺構名」で基本的に実施している。

### (遺物類)

11. 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。
12. 遺物実測図は、南地区・北地区を通して通番としている。
13. 当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。
14. 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号... 挿図掲載番号である。

実測番号... 実測段階の登録番号である。

様... 質... 「弥生土器」「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など... 遺物の器種を示す。

グリッド... 調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構... 層名... 遺物の出土した遺構や層名を記した。「土器」、「石」などは、それぞれの取り上げ時の区分である。

法量(cm)... 遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(高台)は高台部径、(脚柱)は脚部上端径、(脚幅)は脚台幅部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整... 技法の特徴... 主な特徴を外面(外;)・内面(内;)で示した。「A → B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土... 小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調... その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲　新版標準土色帖　に掲げる。

残存度... その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。  
特記事項... 遺物の特徴となる事項を記した。

### (写真図版)

15. 写真図版は、南地区・北地区を通じてまとめた。
16. 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
17. 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

# 本文目次

〈調査報告編〉

I	調査にかかる諸経過	伊藤 (1)
1	調査の契機	
2	調査の経過と法的措置	
3	発掘調査記録の委託	
4	調査と記録の方法	
5	整理作業の方法	
II	天花寺丘陵界隈の歴史的諸環境	伊藤 (5)
1	地形的環境	
2	歴史的環境	
III	南地区（上部平坦面）の層位と遺構	柴山 (8)
1	調査区の基本層位	
2	検出した遺構	
IV	南地区（上部平坦面）の出土遺物	伊藤 (35)
1	石器類	
2	縄文時代晩期の土器	
3	弥生時代前期の土器	
4	弥生時代後期の土器	
5	奈良・平安時代以降の土器類	
6	瓦類	
V	北地区（丘陵斜面）の層位と遺構	豊田 (53)
1	調査区の基本層位	
2	検出した遺構	
VI	北地区（丘陵斜面）の出土遺物	豊田 (58)
1	古墳に伴う遺物	
2	その他の出土遺物	
VII	自然化学分析	伊藤、株/バリノ・サーヴェイ (64)
VIII	第8次調査のまとめ	伊藤、豊田 (66)
1	縄文時代晩期から弥生時代前期の状況	
2	弥生時代後期の状況	
3	古墳時代の状況	
4	奈良時代の状況	
5	中世（天花寺城跡）の状況	
（総括編）総括～天花寺丘陵発掘調査～		
I	発掘調査報告書における総括の位置づけ	伊藤 (103)
II	天花寺丘陵における遺跡の変遷	伊藤 (105)
III	天花寺丘陵の後期弥生土器	伊藤 (114)
IV	天花寺丘陵の後期弥生集落と住居	伊藤 (119)
V	古墳時代から古代への転換	伊藤 (124)
VI	天花寺城跡と中世の天花寺丘陵	伊藤 (126)

## 挿図一覧

- |      |                          |      |                            |
|------|--------------------------|------|----------------------------|
| 第1図  | 調査区位置図                   | 第30図 | 南地区出土遺物実測図(4)              |
| 第2図  | 調査地周辺主要遺跡                | 第31図 | 南地区出土遺物実測図(5)              |
| 第3図  | 調査地周辺地形図                 | 第32図 | 南地区出土遺物実測図(6)              |
| 第4図  | 第8次調査区(南地区)全体図           | 第33図 | 南地区出土遺物実測図(7)              |
| 第5図  | 第8次調査区(南地区)平面図(1)        | 第34図 | 南地区出土遺物実測図(8)              |
| 第6図  | 第8次調査区(南地区)平面図(2)        | 第35図 | 南地区出土遺物実測図(9)              |
| 第7図  | 第8次調査区(南地区)平面図(3)        | 第36図 | 小谷28・29号墳平面図               |
| 第8図  | 第8次調査区(南地区)西壁土層断面図       | 第37図 | 小谷28号墳墳丘土層断面図              |
| 第9図  | 第8次調査区(南地区)東壁土層断面図       | 第38図 | 第8次調査区(北地区)平面図             |
| 第10図 | 土器棺墓S X 492平面・立面図        | 第39図 | 小谷28号墳埋葬施設平面・断面図           |
| 第11図 | 竪穴住居S H 526平面・断面図        | 第40図 | 小谷29号墳墳丘土層断面図              |
| 第12図 | 竪穴住居S H 453平面・断面図        | 第41図 | 北地区出土遺物実測図(1)              |
| 第13図 | 竪穴住居S H 454平面・断面図        | 第42図 | 北地区出土遺物実測図(2)              |
| 第14図 | 竪穴住居S H 461平面・断面図        | 第43図 | 北地区出土遺物実測図(3)              |
| 第15図 | 竪穴住居S H 469平面・断面図        | 第44図 | 土器棺墓S X 492土壤サンプル地点        |
| 第16図 | 竪穴住居S H 485・466平面・断面図    | 第45図 | 主要遺構配置図<br>(縄文時代晚期～弥生時代前期) |
| 第17図 | 竪穴住居S H 467平面・断面図        | 第46図 | 主要遺構配置図(弥生時代後期)            |
| 第18図 | 竪穴住居S H 475平面・断面図        | 第47図 | 主要遺構配置図(古墳時代)              |
| 第19図 | 竪穴住居S H 475関係土層断面図       | 第48図 | 主要遺構配置図(古代)                |
| 第20図 | 竪穴住居S H 531平面・断面図        | 第49図 | 主要遺構配置図(中世)                |
| 第21図 | 掘立柱建物S B 519平面・断面図       | 第50図 | 天花寺丘陵における後期弥生土器分類          |
| 第22図 | 環濠S D 456遺物出土状況図         | 第51図 | 天花寺丘陵における後期弥生土器年編          |
| 第23図 | 環濠S D 497遺物出土状況図         | 第52図 | 後期弥生土器における天花寺式の位置          |
| 第24図 | 天花寺城跡曲輪2・3調査後測量図         | 第53図 | 竪穴住居の規模                    |
| 第25図 | 天花寺城跡曲輪2関係土層図            | 第54図 | 竪穴住居の形態分類(1)               |
| 第26図 | 土壠S Z 498・堀S D 511平面・断面図 | 第55図 | 竪穴住居の形態分類(2)               |
| 第27図 | 南地区出土遺物実測図(1)            | 第56図 | 天花寺城の変遷                    |
| 第28図 | 南地区出土遺物実測図(2)            |      |                            |
| 第29図 | 南地区出土遺物実測図(3)            |      |                            |

## 表一覧

第1表	天花寺城跡曲輪2関係土層	第10表	第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(5)
第2表	第8次調査区(南地区)遺構一覧(1)	第11表	第8次調査区(北地区)遺構一覧
第3表	第8次調査区(南地区)遺構一覧(2)	第12表	第8次調査区(北地区)出土遺物観察表(1)
第4表	第8次調査区(南地区)遺構一覧(3)	第13表	第8次調査区(北地区)出土遺物観察表(2)
第5表	第8次調査区(南地区)竪穴住居一覧	第14表	第8次調査区(北地区)出土鉄製品観察表
第6表	第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(1)	第15表	土壤理化分析資料一覧
第7表	第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(2)	第16表	天花寺丘陵界隈の発掘調査経過一覧
第8表	第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(3)	第17表	天花寺丘陵界隈の遺跡変遷
第9表	第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(4)		

## 写真図版一覧

- |      |                  |      |                 |
|------|------------------|------|-----------------|
| 図版1  | 南地区(上部平坦面)遺構(1)  | 図版16 | 北地区(丘陵斜面)遺構(3)  |
| 図版2  | 南地区(上部平坦面)遺構(2)  | 図版17 | 北地区(丘陵斜面)遺構(4)  |
| 図版3  | 南地区(上部平坦面)遺構(3)  | 図版18 | 北地区(丘陵斜面)遺構(5)  |
| 図版4  | 南地区(上部平坦面)遺構(4)  | 図版19 | 北地区(丘陵斜面)遺構(6)  |
| 図版5  | 南地区(上部平坦面)遺構(5)  | 図版20 | 南地区(上部平坦面)遺物(1) |
| 図版6  | 南地区(上部平坦面)遺構(6)  | 図版21 | 南地区(上部平坦面)遺物(2) |
| 図版7  | 南地区(上部平坦面)遺構(7)  | 図版22 | 南地区(上部平坦面)遺物(3) |
| 図版8  | 南地区(上部平坦面)遺構(8)  | 図版23 | 南地区(上部平坦面)遺物(4) |
| 図版9  | 南地区(上部平坦面)遺構(9)  | 図版24 | 南地区(上部平坦面)遺物(5) |
| 図版10 | 南地区(上部平坦面)遺構(10) | 図版25 | 南地区(上部平坦面)遺物(6) |
| 図版11 | 南地区(上部平坦面)遺構(11) | 図版26 | 南地区(上部平坦面)遺物(7) |
| 図版12 | 南地区(上部平坦面)遺構(12) | 図版27 | 南地区(上部平坦面)遺物(8) |
| 図版13 | 南地区(上部平坦面)遺構(13) | 図版28 | 北地区(丘陵斜面)遺物(1)  |
| 図版14 | 北地区(丘陵斜面)遺構(1)   | 図版29 | 北地区(丘陵斜面)遺物(2)  |
| 図版15 | 北地区(丘陵斜面)遺構(2)   |      |                 |

# I 調査にかかる諸経過

## 1 調査の契機

ここで報告する調査記録は、県道松阪一志線の道路改良事業に伴って実施したものである。道路改良以前の同県道は、三重県松阪市嬉野一志町（旧三重県一志郡嬉野町一志地内）から同市嬉野天花寺町（同嬉野町天花寺地内）にかけて、比較的狭隘な路線であった。しかし、この県道は久居市方面へと抜ける県道松阪久居線へとそのまま接続されていることや、松阪市西部の堀坂山山麓部を通る幹線道でもあることから、その交通量は年々増加する傾向にあったといえる。さらに、近畿自動車道久居～伊勢間が整備されたことに伴って設置された一志嬉野I.C（松阪市嬉野島田町地内）へのアクセス道（県道天花寺一志嬉野インター線）を、この県道から接続させる計画が同時に進行していた。

以上のような開発計画のなかで、天花寺丘陵地内を「T」字形に縱貫する路線計画となり、天花寺丘陵内の事業地は、ほぼ全面調査することになったのである。

三重県埋蔵文化財センターでは、平成7(1995)年度以降、天花寺丘陵内および天花寺丘陵東麓部・北麓部での発掘調査を継続的に実施してきた。該当する遺跡は、以下のとおりである。なお、天花寺丘陵北麓部には天花寺瓦窯跡の存在が想定されたが、調査の結果、事業地内には確認できなかった。

- ・ 天花寺丘陵南東裾部
- 薬師寺北裏遺跡（奈良～中世）
- 天花寺北瀬古遺跡（縄文～平安時代）
- ・ 天花寺丘陵部
- 清水谷古墳群（古墳時代・基數不明）
- 清水谷遺跡（旧石器～中世）
- 天花寺城跡（中世）
- 小谷赤坂遺跡（縄文～平安時代）
- 小谷古墳群（古墳時代・35基のうち15基）
- 天花寺中世墓群（中世）
- 天草寺旧境内遺跡（近世）
- ・ 天花寺丘陵北福部

小谷A遺跡（縄文～中世）

堀田遺跡（縄文～中世）

ここで報告するのは、天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群にかかる第8次調査である。県道松阪一志線の改良事業にかかる天花寺丘陵部での調査としては、最終次である。

## 2 調査の経過と法的措置

### a 発掘調査の経過

発掘調査は、平成14年度事業として実施した。同年4～6月にかけて設計・諸準備にかかり、後述の発掘調査記録委託にかかる準備もこの段階で実施している。

調査は、便宜上丘陵上部の平坦面部（南地区）と、丘陵北斜面にあたる調査区（北地区）の大きく2地区に分かれた。南地区には、天花寺城跡と小谷赤坂遺跡が該当する。北地区は、天花寺城跡・小谷赤坂遺跡の斜面部と、周知の埋蔵文化財包蔵地である天花寺瓦窯跡が及んでいる可能性がある調査区として開始した。調査の結果、瓦窯跡は確認されず、天花寺城跡の関連施設も見られなかったが、新たに小谷28・29号墳の2基の古墳を発見することになった。

発掘調査の現地作業は、平成14年7月8日から開始し、同年12月16日に完了した。

なお、平成14年度中の当該調査にかかる業務としては、遺物の洗浄・注記・接合といった出土品の1次処理を実施している。これらは、出土遺物を埋蔵文化財センターに持ち帰っての作業である。

### b 発掘調査の普及・公開

この間、当発掘調査にかかるいくつかの普及・公開を実施している。開催したものは、下記のとおりである。

- ・ 平成14年8月7日、嬉野町教育研究会（当時）による小学校総合学習教材準備のための体験発掘（町立小学校の教諭20名）。
- ・ 平成14年9月25日、嬉野町立中郷小学校（当時）

の総合学習として、遭跡見学体験を実施（児童9名）。・平成14年10月14日、現地説明会の開催（参加者約120名）。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

当遭跡発掘調査にかかる文化財保護法関係の諸通知は、以下により行っている。なお、下記①は平成14年の文化財保護法改正以前のもので、同法第57条の3第1項にかかるものである。

① 発掘通知（三重県文化財保護条例第48条第1項、県知事→県教育長）

・平成7年7月20日付け道建第825号

② 発掘調査の実施報告（文化財保護法第58条の2第1項、県教育長→文化庁長官、平成14年度以降は、県埋蔵文化財センター所長→県教育長）

・平成13年11月12日付け教理第242号

③ 文化財発見・認定通知（遺失物法、県教育長→久居警察署長）

・平成13年3月30日付け教生第229-26号

### 3 発掘調査記録の委託

a 委託にかかる経緯と経過

今回の発掘調査にあたっては、民間活用という県行政の基本方針のもと、調査記録作業委託を実施した。すなわち、発掘調査にかかる土木的作業（表土掘削・遺構検出・遺構掘削）ならびに調査記録作業の委託である。

事業にあたっては、三重県埋蔵文化財センターで業務起案を作成し、指名競争入札の結果落札した業者と当センター所長とが委託契約を締結した。この結果、天宝寺城跡・小谷赤坂遭跡（第8次）調査は、安西工業株式会社が委託先となった。同社の調査体制は、つぎのとおりである。

・調査主任 川端博明氏

・調査員 坂口尚人氏・小泉信吾氏

発掘調査の期間中、当センターの担当である奥野・柴山の両名は、現場監督員としてほぼ全日現地に張り付いていた。これは、遭跡の記録保存にかかる行政的な措置としての遺漏が無いようにすることと、報告書作成業務は当センターが実施するために、現地での状況を事細かに把握しておく必要があるから

である。これは、平成10年9月29日付け、府保記第75号文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化について」2-(6)-(イ)-①における「民間の発掘調査組織の導入は、発掘調査を実施する地方公共団体等の発掘調査体制に組み込む形態で行う」とされた事項に則ることを目したことでもある。

b 委託にかかる成果と課題

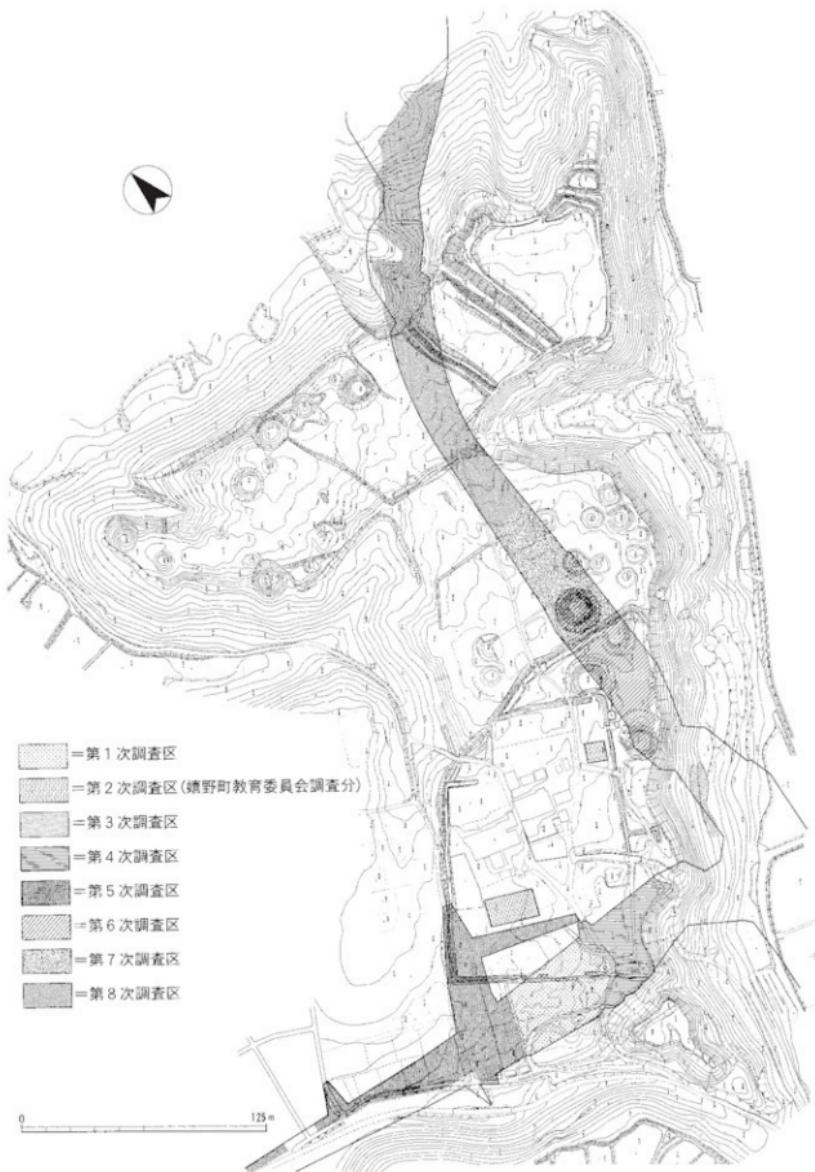
調査委託を実施することによって、いくつかの成果と課題（問題点）が生じた。

成果としては、調査記録作業を委託することにより、県の担当者が遭跡そのものを観察し、評価するための時間が確保されたこと、記録類の精度を委託側が第三者的に判断できるようになったこと、などが挙げられる。課題としては、調査経費が割高となること、記録類のうち、とくに写真類の検証がリアルタイムで出来ないことによる不備、などがある。

なお今後危惧されることとして、調査にかかる事務処理の流れが整備されたことの代償として、職員の保護意識が低下するのではないかということがある。遭跡を業務として第三者的に見るためには、充分な知識と経験を兼ね備える必要がある。その経験は、実際の調査で培うのが最も適切であり、書物のみによってなし得るものではない。保護の前面に立つ人間が遭跡保護への意識を低下させてしまうことは、今後の保護行政に暗い影を落としかねない。

調査記録委託を実施するためには、保護行政に充分な意識を有していることが不可欠であることを、事ある毎に再確認するよう努力しなければならない。ただし、今のところ、そういう内容の研鑽は個人の努力に任されているのが現状である。調査委託が今後も増加するのであればなあさら、行政側の措置・責務として、今後明確に位置づける必要がある。

三重県での調査委託は、当遭跡だけでなく、例年実施されている。感情的に調査委託への忌避を持つのではなく、また、検証することのない既成事實を積み上げるのではなく、常により良い方向への模索を図り、本来あるべき保護行政を推進していくことが肝要である。



第1図 調査区位置図 1:2,500 (『天王寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』付図 1:1,000を一部改変)

## 4 調査と記録の方法

### a 挖削の方法

今回の調査では、表土直下に中世遺構面の存在が想定されたため、最初の重機掘削は表土約20cmとした。そして、その面での精査を実施している（後述のように、結果的に中世遺構は確認できなかった）。その後、弥生時代遺構が明確に確認できるまでの10cmほどについては、人力掘削を実施し、遺構検出を行った。

また、中世の土壘については、土層図作成のための調査溝を人力掘削し、土層図作成後の盛土は重機で掘削した。

### b 地区設定

調査区内は、4m四方の枠目で区切ることによつて小地区（グリッド）を設定している。今回の調査は、第6・7次調査区とグリッド線は一致しているものの、地区名については第8次調査区のみで統一し、第6・7次調査区とは連動していない。第8次調査区内については、丘陵上部・斜面部ともに、一連のグリッドで設定されている。なお、ここで設定した小地区方眼は、国土座標軸とは無関係である。

### c 遺構図面

調査区の平面図は、丘陵上部は全体を1/20で手書き実測した。丘陵斜面部については、1/100の平面図（コンタ図）で対応した。コンタ図は、丘陵上部の天花寺城跡土壘についても、調査前後の状況を1/100で作成している。

また、個々の遺構で、遺物出土状況などが重要と判断したものについては、1/10の個別実測図を作成した。土層図は、丘陵上部・斜面部ともに、1/20で作成した。

### d 遺構写真

遺構関連の写真是、重要なものを4×5版および6×9版（ブローニー）で撮影し、細かな記録は35mm版で撮影した。それぞれのフィルムは、白黒とスライドを同時に作成している。

## 5 整理作業の方法

### a 遺物類

当調査で出土した遺物ラベルは、南地区は「天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第8次）」である。北地区は、当初存在の想定された天花寺城跡と天花寺瓦窯跡がいずれも確認されなかつたため、「小谷赤坂遺跡（第8次）」としている。なお、調査の途中で確認された小谷28・29号墳についても、遺物の注記・接合段階では「小谷赤坂遺跡」として整理している。

発掘調査を実施した平成14年度に、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測作業等を行つた。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。なお、当調査にかかる出土遺物は整理の結果、報告書掲載分が8箱、未掲載分が18箱の計26箱となつた。

実測図等が完成した遺物は、平成16年度に報告書作成のための観察や図版作成を実施した。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物については、報告書用の写真撮影を6×9版（ブローニー）で実施した。遺物写真の撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

実測図の作成は平成14年度から15年度にかけて、遺物写真撮影と図版作成、および遺物の収蔵については平成15年度から16年度にかけて実施した。

### b 記録類

発掘調査にかかる記録類は、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵庫に保管している。

また、調査と併行して実施した自然化学分析結果についても、同様の記録類として保存している。

（伊藤）

## II 天花寺丘陵界隈の歴史的諸環境

### 1 地形的環境

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群は、松阪市嬉野天花寺町（旧一志郡嬉野町天花寺）の丘陵部に所在する。天花寺丘陵は、通称「小鳥山」山塊から東方へ派生する低丘陵の東端部にあたる。丘陵の北東約1kmでは、旧一志郡各所の最奥部を水源とする雲出川と、その支流で旧嬉野町の最奥部から流れ出る中村川とが合流する。丘陵近くにはこの中村川が流れている。つまり、当遺跡は中村川河口部から見れば、最も接近した丘陵部にある遺跡といえる。

### 2 歴史的環境

旧伊勢国一志郡は、伊勢のなかでもとくに重要な遺跡が数多く存在する。近隣の状況は別に詳述しているので、ここではポイントのみを概観する。

当該地域の旧石器時代は判然としない。縄文時代では、中期を中心とした遺物が多く確認された下之庄東方遺跡・針箱遺跡<sup>①</sup>がある。また、天花寺丘陵内でも、少量の縄文土器が確認されている。

弥生時代では、天花寺丘陵の北西麓にあたる片野遺跡と鳥居本遺跡（いずれも一志町）が重要である。いずれも前期後葉以降に形成が確認できる<sup>②</sup>。

古墳時代では、当地域はさらに特長を増す。中村川流域は、古墳時代前期の前方後方墳が4基以上築造されるという極めて特徴的な様相を示す地域である。天花寺丘陵でも、古墳時代前期から継続的に古墳群が形成されており、前期に相当する西野古墳群や、前期から中期前葉に相当する片野池古墳群などがある。天花寺丘陵の南支脈には、全長約40mの前方後方墳である筒野1号墳が立地する<sup>③</sup>。今回の報告と一連の調査で確認された、直径約16mの小規模円墳である小谷13号墳からは、三角板紙留短甲や鉄製武器・工具類などの優秀な副葬品が出土した<sup>④</sup>。これらの資料から、天花寺丘陵内では古墳時代を通じてかなりの基盤を有した勢力が造墓活動を行っていたことが判明している。

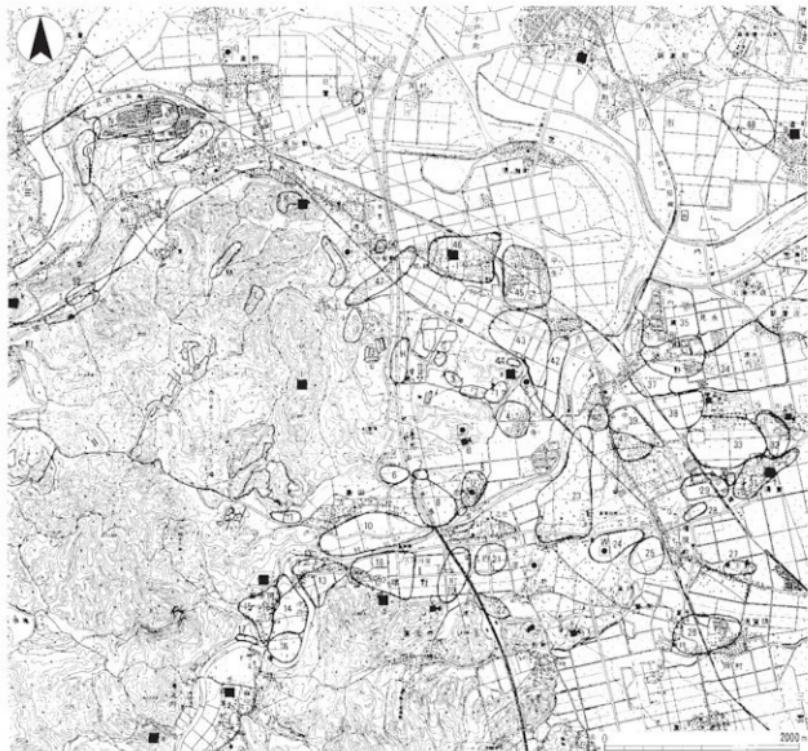
つぎに、古代の状況である。10世紀前葉頃に成立した 備名類聚抄<sup>⑤</sup>には、一（志）志郡内の郷として「八太・日置・島抜・民太・神戸・須可・小川・吳部・岩野・餘戸」が見える。郷名ではない「神戸・余部」を除くと、8郷である。現在の地名から現地比定が推測できるのは「八太」（一志町八太）・「日置」（一志町日置）、「島抜」（津市雲出島貴町）・「民太」（松阪市美濃田町）・「須賀」（松阪市嬉野須賀町）がある。天花寺丘陵付近は八太郷か、あるいは、小川郷が松阪市嬉野中川町付近に比定できるとすれば、小川郷になるのかも知れない。

天花寺丘陵付近では、天花寺廃寺・中谷廃寺・一志廃寺が極めて近距離に密集する。このうち天花寺廃寺は発掘調査され、伽藍配置が法起寺式で、複線鋸歯文を施す広義の川原寺式の軒瓦を出土することが確認されている<sup>⑥</sup>。一志廃寺付近には「郡一」の小字名、天花寺丘陵北麓には「都市神社」の旧地があり、この付近が古代一志郡の中枢部であったことを物語っている。当該期の遺跡も多く、天花寺丘陵の北麓にあたる堀田遺跡や、平生遺跡・片野遺跡からは畿内系暗文土師器が多数出土している<sup>⑦</sup>。

天花寺丘陵付近は、歴史的に極めて要地であったことが伺われる。  
(伊藤)

#### 〔註〕

- ①三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告（1996年）
- ②嬉野町教育委員会 針箱遺跡・下之庄東方遺跡（1987年）
- ③一志町教育委員会 片野遺跡発掘調査報告（1986年）、同 鳥居本遺跡発掘調査報告（1975年）ほか
- ④当地の古墳・古墳群については、伊勢野久好「一志郡の首長墓」（天花寺山 一志町、嬉野町遺跡調査会 1991年）
- ⑤三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告 VI（2005年）
- ⑥京都大学文学部国語学国文学研究室編 諸本集成備名類聚抄（1968 篠山書店）
- ⑦三重県教育委員会 昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告（1981年）ほか
- ⑧平生遺跡発掘調査団 平生遺跡発掘調査報告（1976年）、三重県埋蔵文化財センター 堀田第3～5次調査（2002年）ほか



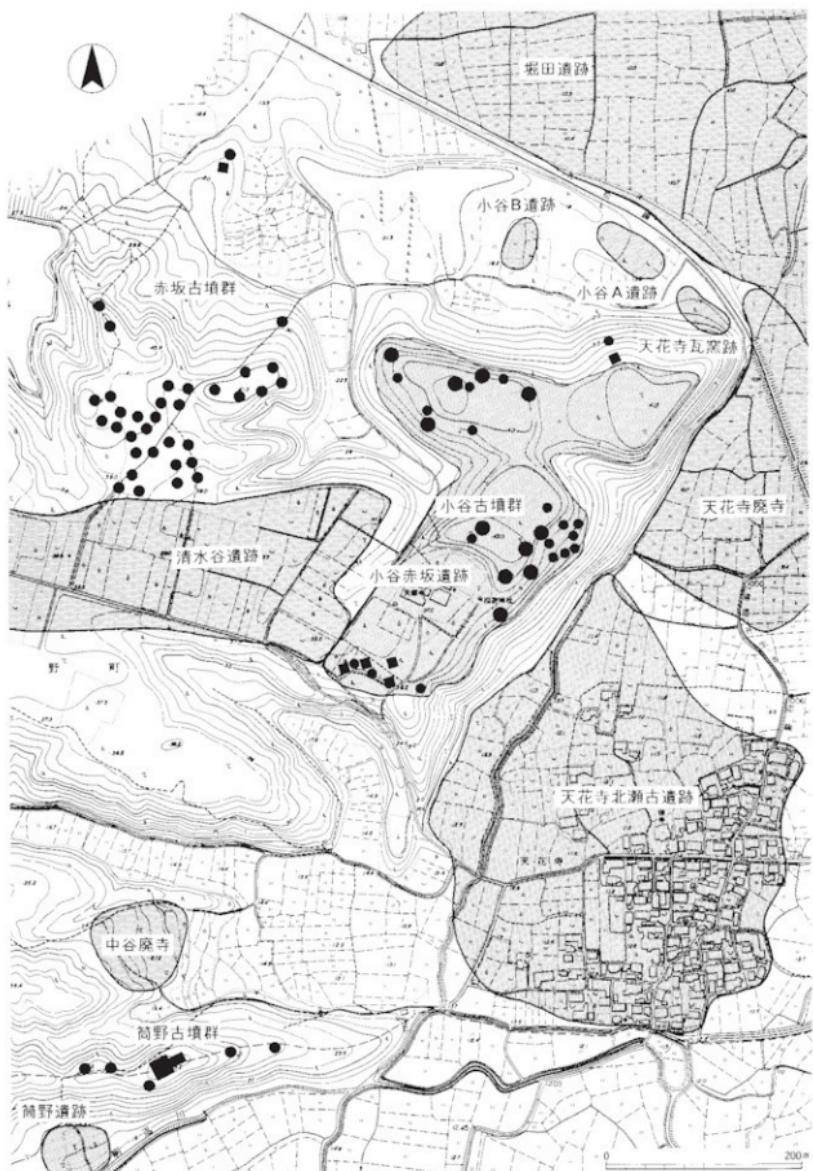
1. 小谷赤坂遺跡 2. 清水谷遺跡 3. 馬ノ瀬古道跡 4. 天花寺北湖古道跡 5. 薬師寺北裏道路 6. 蛇塚古道跡 7. 梶野遺跡  
 8. 天保遺跡 9. 郡一通路 10. 上野垣内遺跡 11. 畠道跡 12. 井之上遺跡 13. 間垣内道路 14. 弥五郎垣内遺跡  
 15. 並生田遺跡 16. 天白遺跡 17. 辻垣内瓦窯跡群 18. 八田遺跡 19. 堀之内遺跡 20. 門所垣内遺跡 21. 下之庄遺跡  
 22. 中尾垣内遺跡 23. 下之庄東方遺跡 24. 緒野遺跡 25. 山神田遺跡 26. 田村西湖古道跡 27. 垂玉野遺跡 28. 高くね遺跡  
 29. 芬野遺跡 30. 松葉遺跡 31. 天王垣内遺跡 32. 幢ノ垣内道路 33. 川北清水道跡 34. 片部遺跡 35. 黒田遺跡  
 36. 野田遺跡 37. 貝塚遺跡 38. 五反田遺跡 39. 六反田遺跡 40. 針箱遺跡 41. 一色垣内遺跡 42. 里前遺跡 43. 堀田遺跡  
 44. 天花寺瓦窯跡 45. 平生遺跡 46. 片野遺跡 47. 鳥居本遺跡 48. 木造赤坂遺跡 49. 貝鏡遺跡 50. 唐木垣内遺跡  
 51. 田尻上野遺跡 52. 下名倉遺跡  
 A. 西山1号墳 B. 筒野1号墳 C. 錦山古墳 D. 上野1号墓 E. 向山古墳 F. 鹿ノ門1号墳 G. 片野池古墳群 H. 西野古墳群  
 I. 小山古墳群 J. 中野山古墳群 K. 西出山古墳群 L. 七ツリ谷古墳群 M. 薬師谷古墳群 N. 上野山古墳群 O. 上野山弧塚古墳群  
 P. 下名倉古墳群 Q. 高寺庵寺 R. 八太塚寺 S. 天花寺廢寺 T. 中谷废寺 U. 一志废寺 V. 上野废寺 W. 須野废寺  
 a. 天花寺城 b. 八田城 c. 並生田城 d. 森本城 e. 津之川城 f. 須賀城および積善寺跡 g. 木造城 h. 川方城 i. 八太城 j. 小山城  
 k. 長谷城 l. 片野館跡

■—前方後円墳・前方後円形墳基

□—古代寺院跡

■—中世城館跡

第2図 調査地周辺主要遺跡 1:50,000 (国土地理院 1:25,000 「大仰」より)



第3図 調査地周辺地形図 1:5,000 (緒野町都市計画図 1:2,500より)

### III 南地区(上部平坦面)の層位と遺構

#### 1 調査区の基本層位

調査区は、標高約37mの丘陵上に位置している。調査区の中央部、谷筋が入ってきている堰の附近がやや低くなっている、曲輪3の中心部から北側の崖に向かってやや高くなっている状況である。

調査区の層序は東西両壁で確認し、記録を行った。基本層序は、第1層が腐葉土を含む表土、第2層が黒褐色砂質土、第3層が暗褐色砂質土(場所によつては黒褐色シルト)、第4層が黄褐色シルトである。

第2層上面で中世の遺構の検出を試みたが、明確な遺構は確認できなかった。また、第3層上面が奈良時代以前の遺構面である。ただし、この面での検出は遺構の輪郭が明確ではないため、第4層上面で最終の検出を行った。

また、土層の観察から弥生時代の竪穴住居や環濠などの痕跡が、かなり新しい時期まで残っていたことが確認できる。

#### 2 検出した遺構

今回検出した遺構は、縄文時代、弥生時代、中世に大きく分けられる。以下に主な遺構について概述する。個々の遺構については遺構一覧表(第2~5表)を参照されたい。

##### a 縄文時代晚期

土器棺墓S X492(第10図) 調査区北部のG27グリッドで検出した遺構である。平面橢円形で、長径1.0m、短径0.6m、深さ約30cmである。晩期の深鉢(16)が口縁を東に向け、横位の状態で検出された。単棺である。口の部分には、こぶし大くらいの長楕円の石が、土器の蓋をするように置かれていた。また、深鉢内にも長さ約15cm程の長楕円を呈する石が確認された。おそらく埋葬者に石を抱かせて葬ったものと考えられる。

##### b 弥生時代前期

竪穴住居S H526(第11図) 調査区中央部のF17グリッド付近で検出した遺構である。ピットが円形に並び、中央に炉跡と思われる焼土の痕跡があることから、直径約3.8mのいわゆる平地式住居跡であると

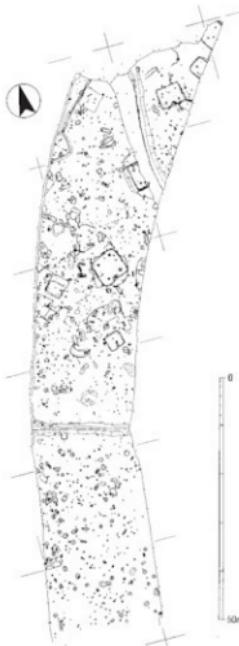
考える。この遺構の北部はピットの外周に添うような形で約10cmほどの段がある。全周で見られるわけではないが、建物に伴う落ちである可能性を考えられる。

松菊里型住居の「床面中央に橢円形土坑を有し、両端に二本柱穴を持ち、...」というような特徴は、今回の住居跡には見られなかった。

ピット内からは遺物がほとんど出土していないが、遺構上面および焼土付近で多量の弥生時代前期の遺物が出土していることからこの時期の建物跡とした。

##### c 弥生時代後期

今回の調査で確認した遺構は、この時期のものが



第4図 第8次調査区(南地区)全体図(1:1,000)



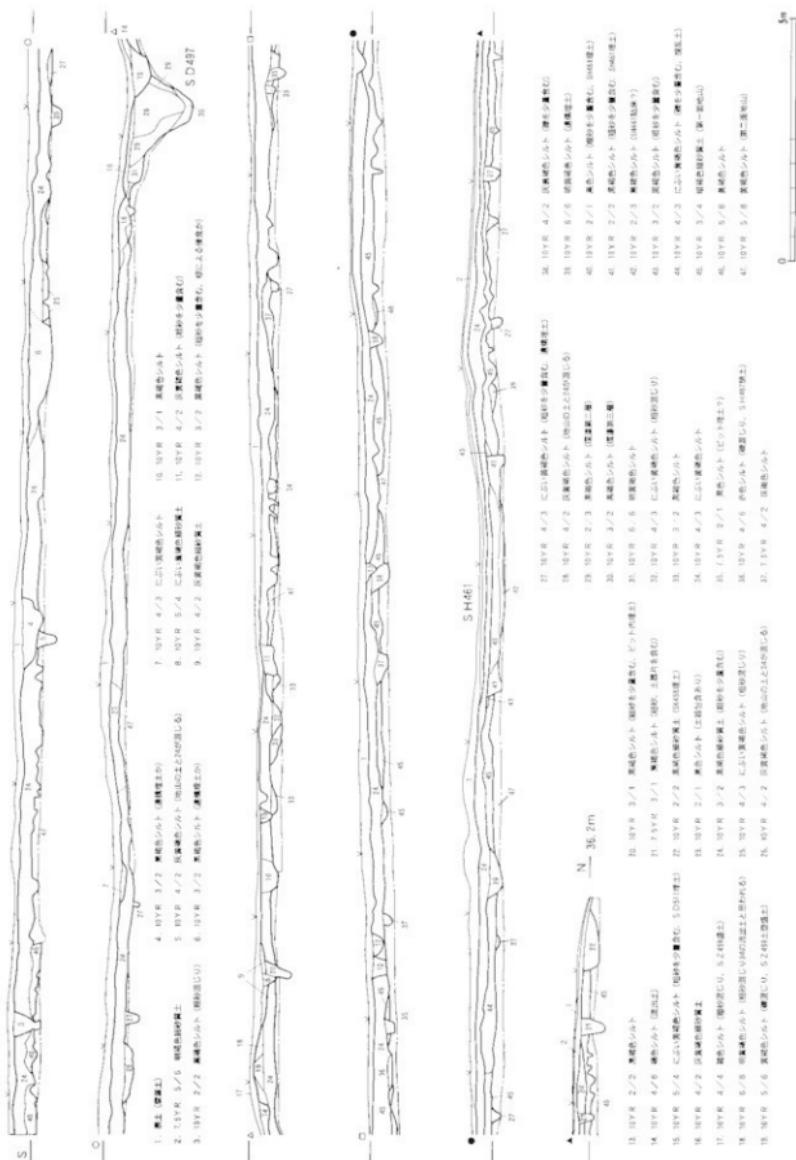
第5図 第8次調査区（南地区）平面図(1) (1:200)



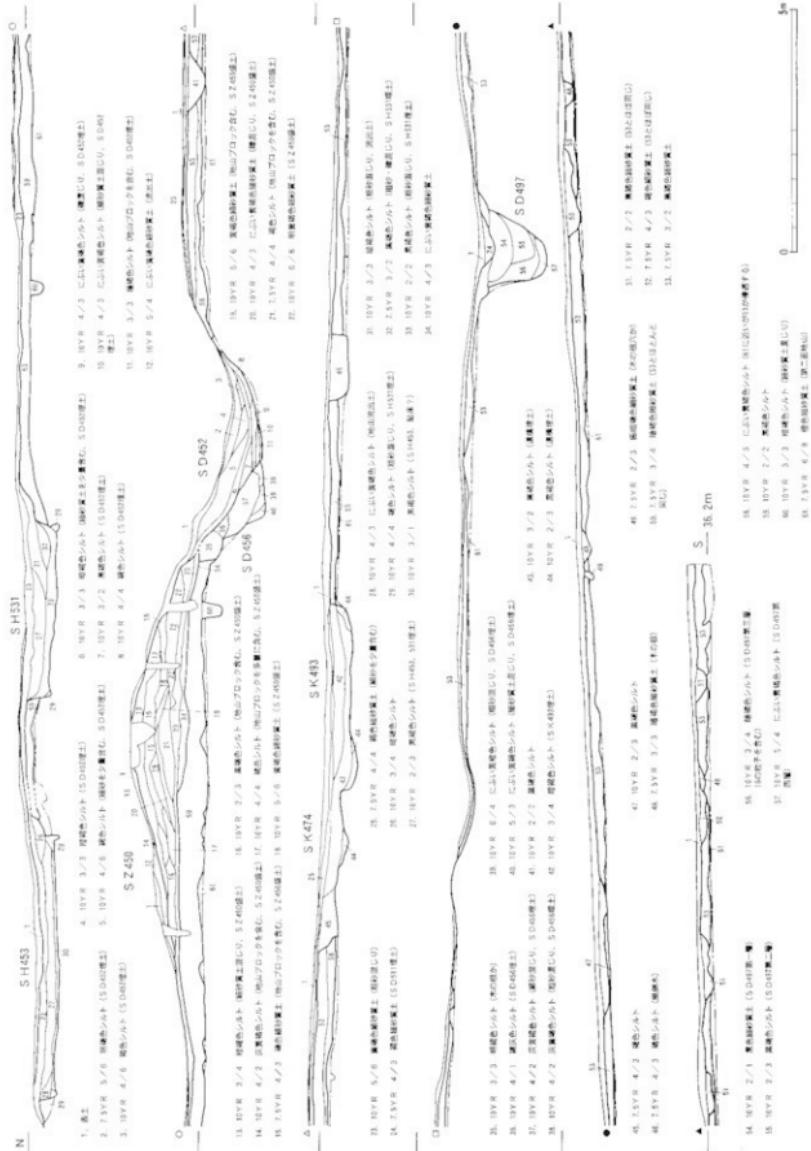
第6図 第8次調査区（南地区）平面図(2) (1 : 200)



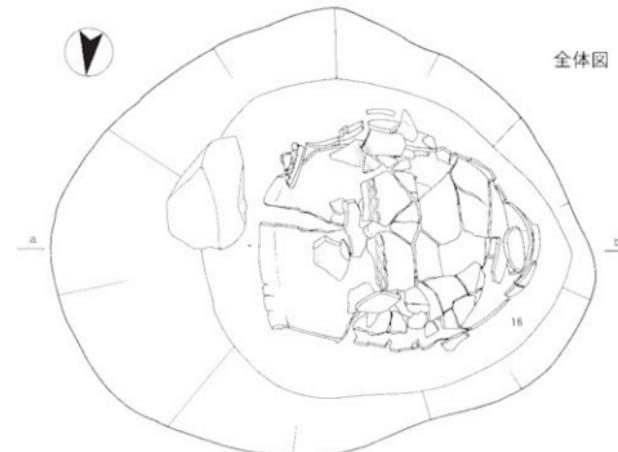
第7図 第8次調査区（南地区）平面図(3) (1:200)



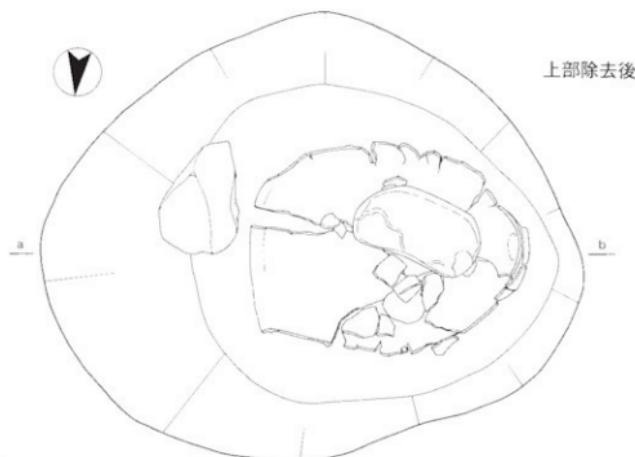
第8図 第8次調査区（南地区）西壁土層断面図（1:100）



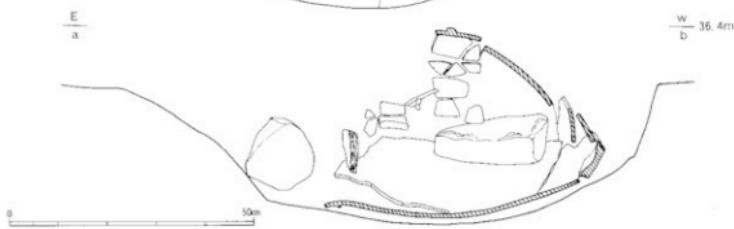
第9図 第8次調査区（南地区）東壁土層断面図（1:100）



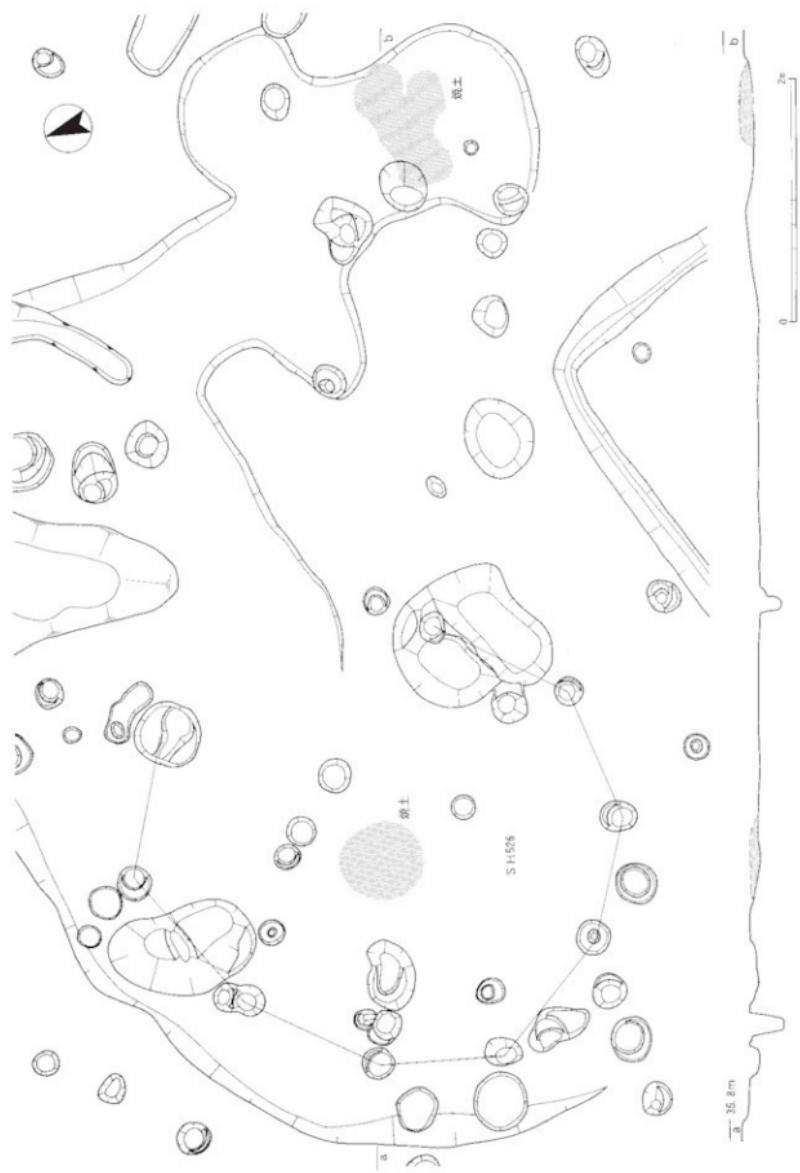
全体図



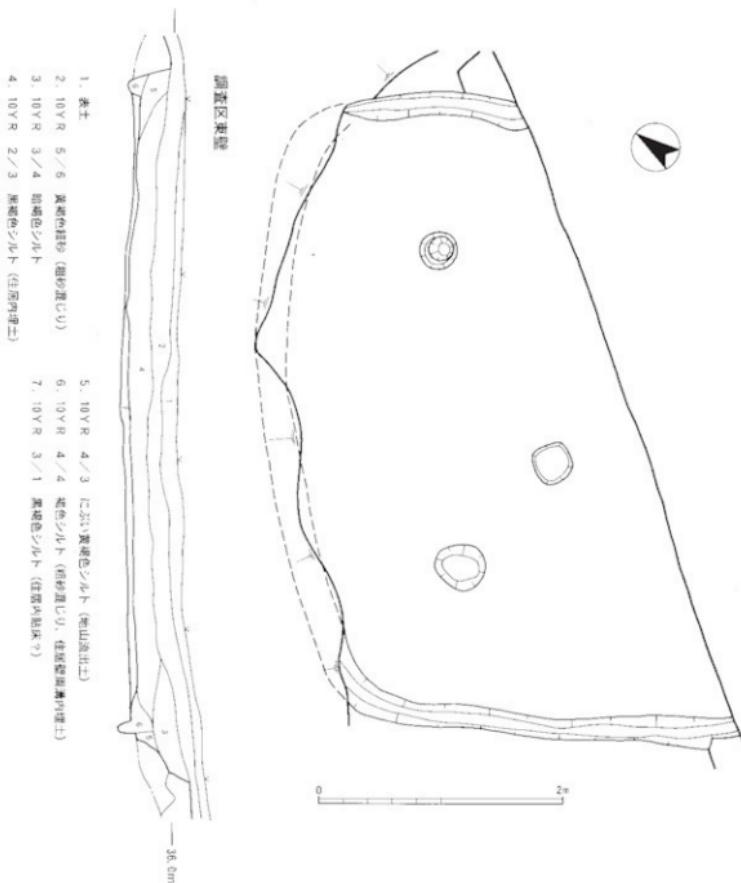
上部除去後



第10図 土器棺墓 S X 492平面・立面図 (1 : 10)



第11図 穂穴住居 S H 526平面・断面図 (1 : 40)



第12図 竪穴住居 S H453平面・断面図 (1 : 40)

中心である。竪穴住居および掘立柱建物、環濠、土坑などがある。

竪穴住居 S H453 (第12図) 調査区北端の崖際、N 30グリッド付近で検出した遺構である。東半分が調査区外にあるため全体の規模は不明であるが、南北辺約5.3m、検出面からの深さは約20cmである。崖際は、土の流出により残りが悪い。

壁周溝が巡り、西側の主柱穴も2ヶ所検出した。いずれの主柱穴もほぼ同じ深さで、床面から約30cm

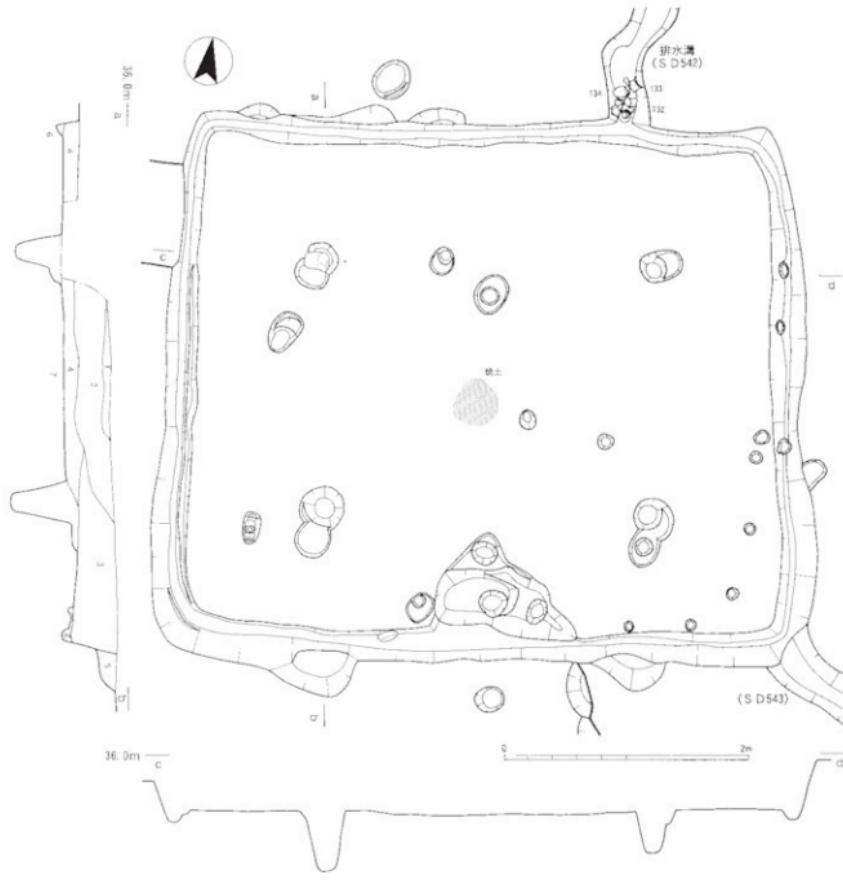
ほど掘削されている。

出土遺物は後期の高杯の脚部などをはじめ数点確認したが、非常に残りが悪い状況である。

竪穴住居 S H454・排水溝 S D542・S D543 (第13図)

調査区北部のL28グリッド付近で検出した遺構である。平面方形の竪穴住居跡で、東西辺約5.2m、南北辺約4.4mである。検出面からの深さは約30cmである。

貯蔵穴 (SK541) が建物の南辺中央に造られて

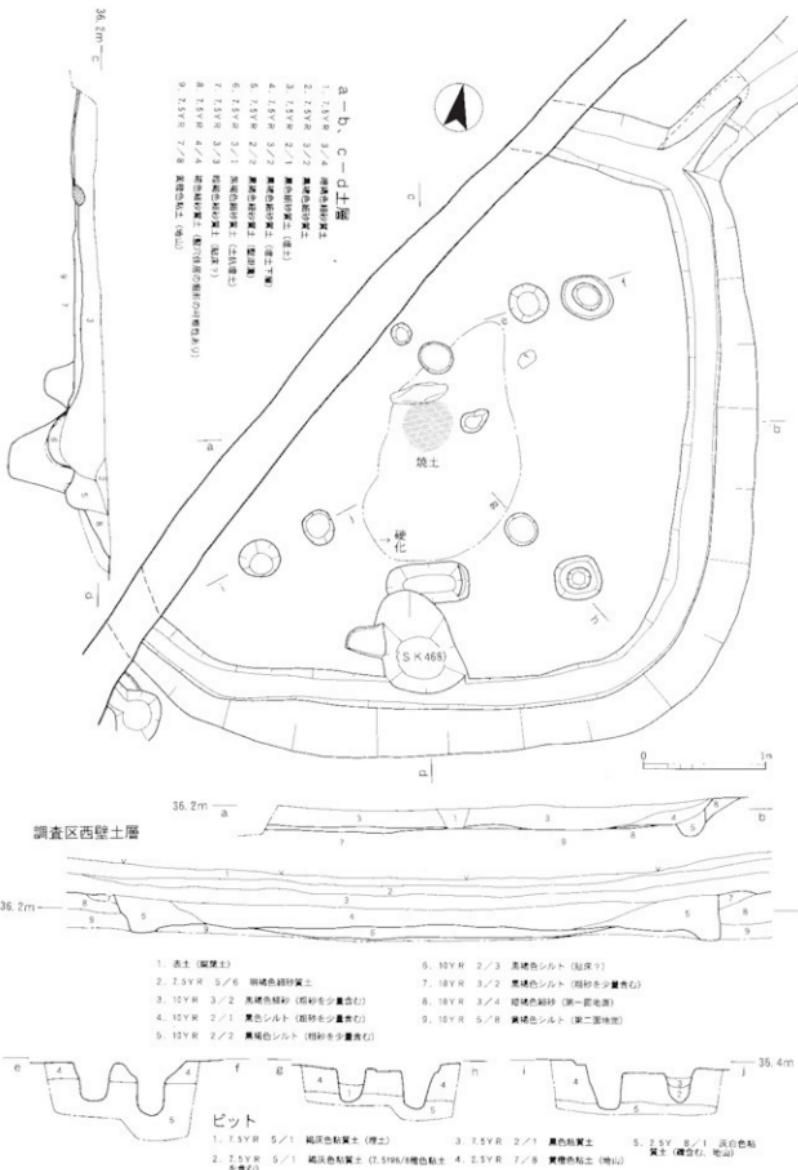


1. 7.5YR 3/2 黒褐色粘質土  
 2. 7.5YR 2/1 黒色粘質土  
 3. 7.5YR 3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/6褐色土ブロック多く含む)  
 4. 7.5YR 2/2 黒褐色細砂質土  
 5. 7.5YR 3/2 黒褐色細砂質土  
 6. 7.5YR 2/1 黒色粘質土 (壁周溝埋土)  
 7. 7.5YR 7/8 黄褐色粘土 (地山)

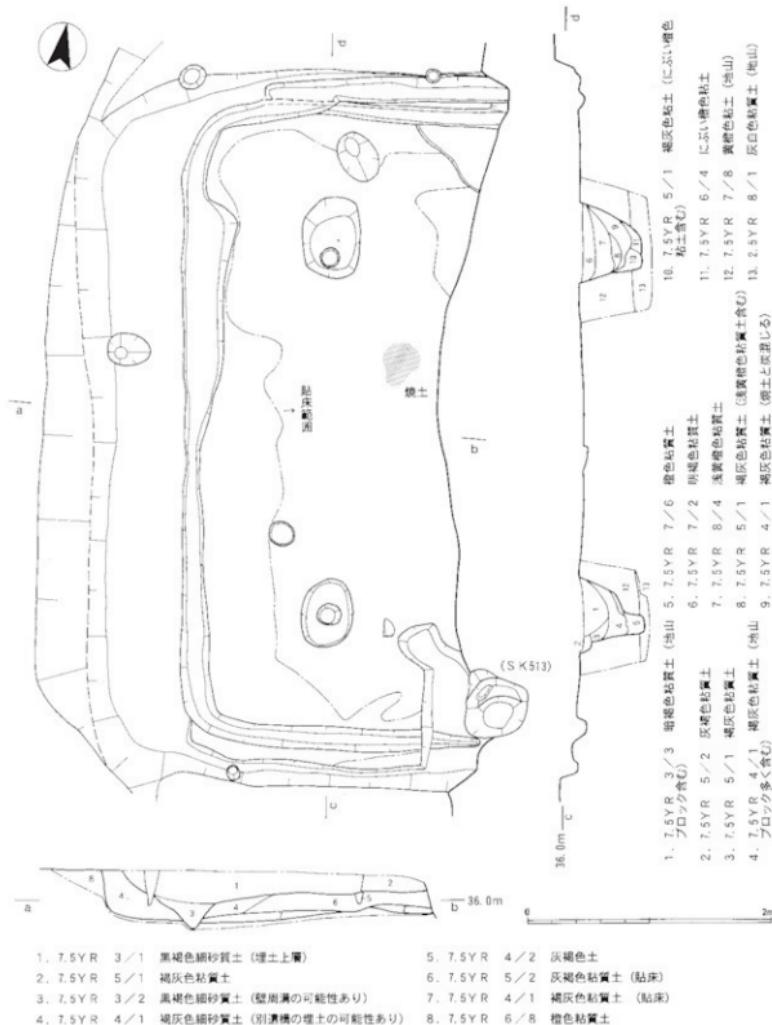
第13図 積穴住居 S H454平面・断面図 (1 : 40)

いる。この貯蔵穴の内部を含めて周辺に4ヶ所のピットが検出された。壁周溝は4辺を巡り、壁柱穴を一部で確認した。主柱穴はいずれも床面から約50cmほど掘削されており、ほぼ同じ深さである。炉跡は建物のほぼ中央で確認した。

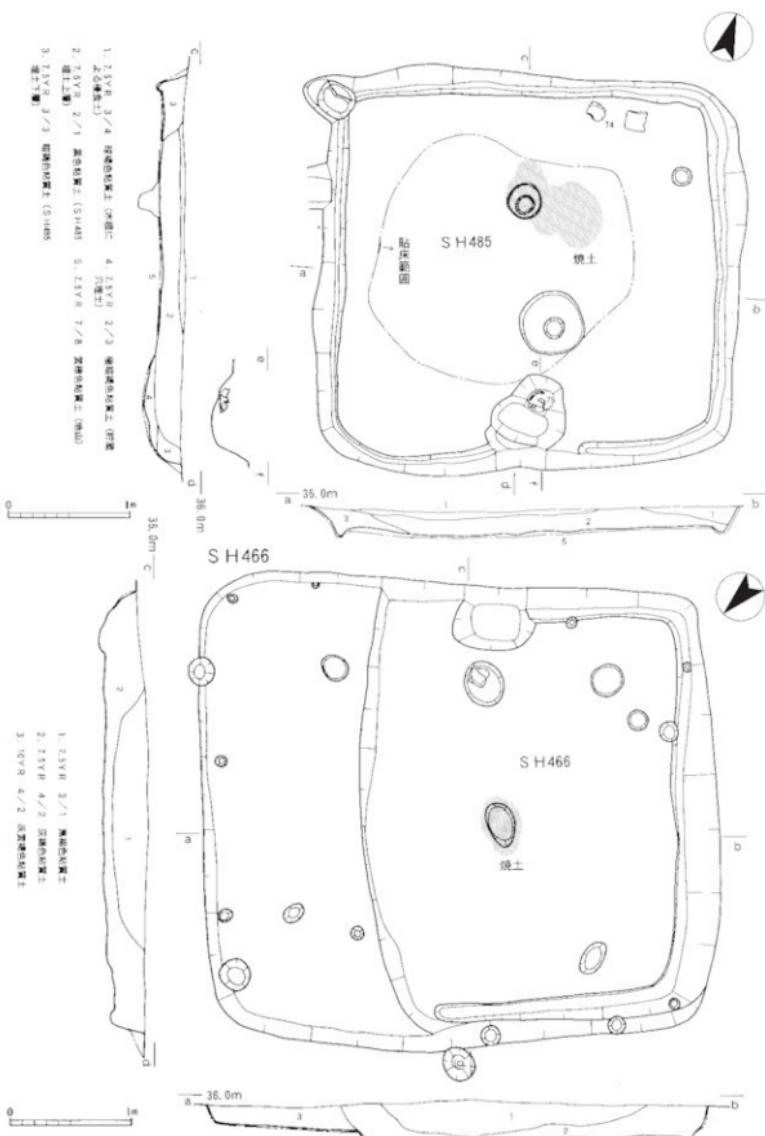
また、建物南東隅および北辺東寄りに溝が連結している。南東隅のもの (S D543) については、おそらく調査区外に存在する住居跡に伴う排水溝であると考える。北辺東寄りのもの (S D542) についてはS H454に伴うもので、壁周溝から崖の方向に



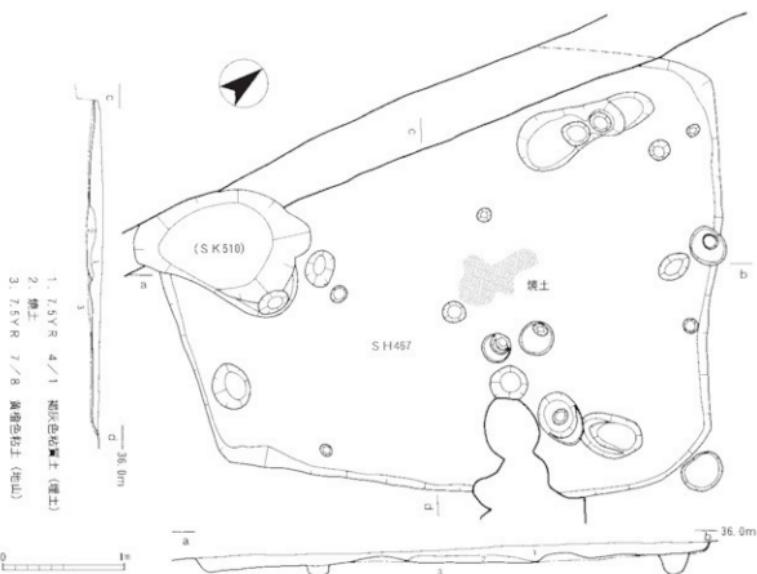
第14図 堪穴住居S H 461平面・断面図 (1 : 40)



第15図 積穴住居S H469平面・断面図 (1:40)



第16図 堪穴住居 S H 485・466平面・断面図 (1 : 40)



第17図 竪穴住居 S H467平面・断面図 (1 : 40)

徐々に深くなっている。このことから、排水を意識した溝であると考える。S H454とS D542の連結部分からまとまって遺物が出土した。

埋土からは、こぶし程度の多量の石や粘土塊が出土している。とくに建物の西側に多く確認できた。これらは建物の構築部材であった可能性が考えられ、建物廃絶時に遺構内に捨て置かれたものであろう。

出土遺物は後期の甕や壺、器台などを床面のほぼ直上で確認した。

竪穴住居 S H461・排水溝 S D457（第14図） 調査区北部の西端、F 26グリッド付近で検出した遺構である。一部調査区外であるが、平面隅丸方形で、南北約5.4mの竪穴住居跡である。検出面からの深さは約20cmである。

壁周溝が巡り、それに連結する形で貯蔵穴（S K468）が南辺に造られる。また、主柱穴は3ヶ所確認され、調査区外のものも含めて4ヶ所になるであろう。それぞれの柱穴には、近接した所にもう1つピットが掘削されており、建物の拡張などが考えられる。炉跡はほぼ中央にあり、その北側に炉石が置かれる。

かれていた。

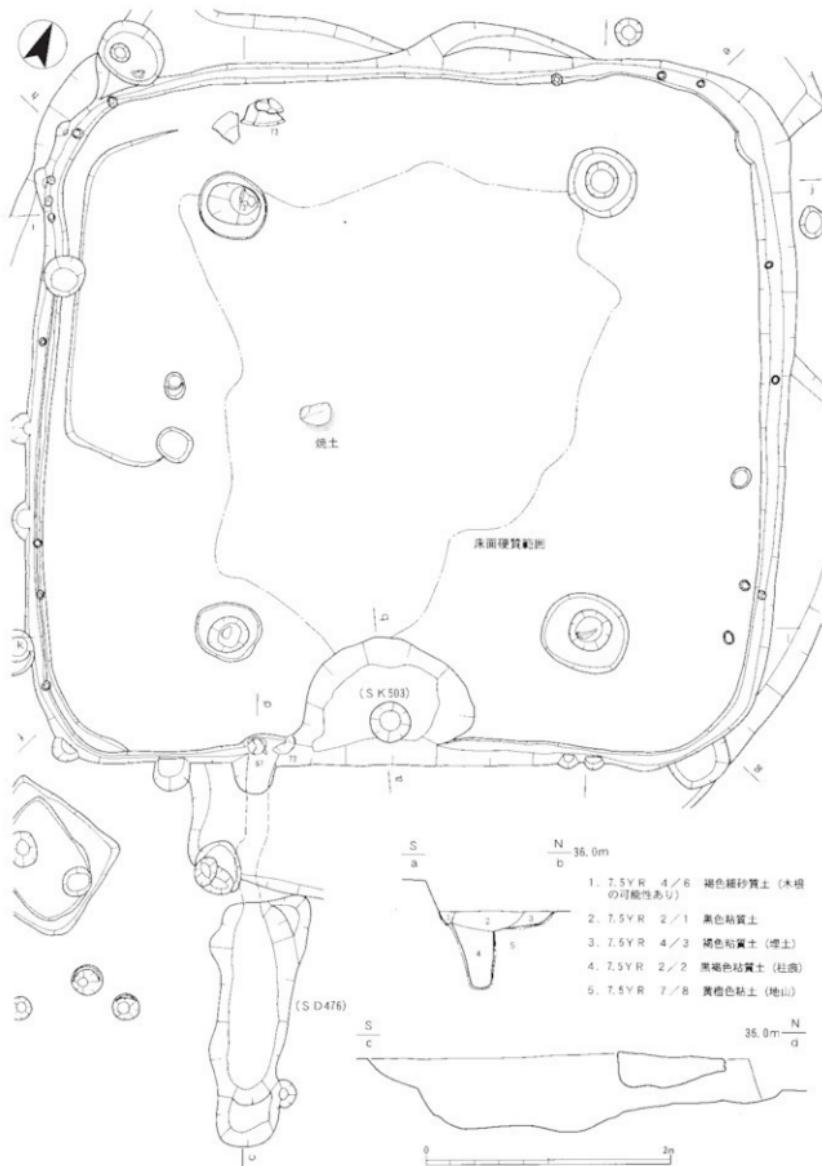
また、住居の北東隅から溝（S D457）がトンネル状につながっており、崖方向に向かって延びている。溝は北（崖方向）にいくほど深くなっていることからS H461に伴う排水溝であろう。

竪穴住居 S H466（第16図） 調査区中央部のD 19グリッド付近で検出した遺構である。平面方形の竪穴住居跡で長辺約4.3m、短辺約3.9mである。南側の2/3にあたる部分が1段深くなっていることから、検出面からの深さは高いところで約20cm、低いところで約30cmである。

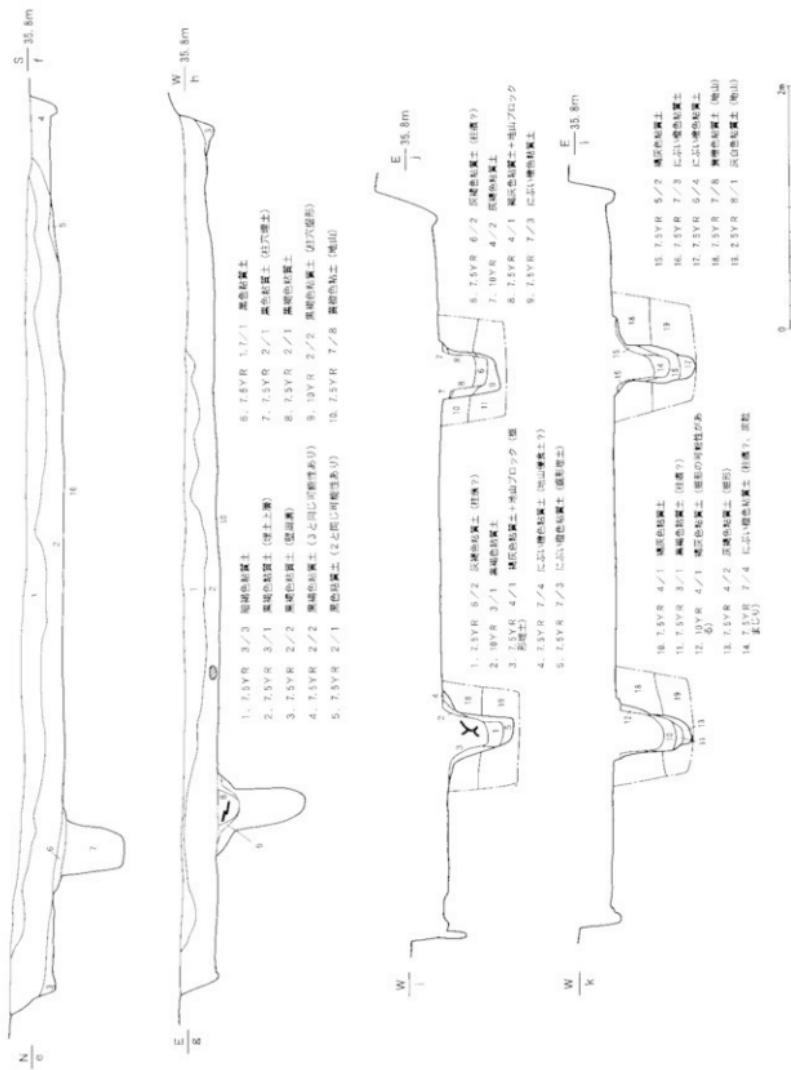
北側の1段高いところは、北部九州を中心に確認されている「ベッド」にあたるものであると考える。貯蔵穴（S K516）や炉、壁周溝は南半部（低いところ）で検出した。主柱穴は4ヶ所で確認したが、いずれも非常に浅いものであった。壁周溝は貯蔵穴と連結しており、住居の南側をコの字状に巡っている。

出土遺物は南半部の埋土中からのものがほとんどである。

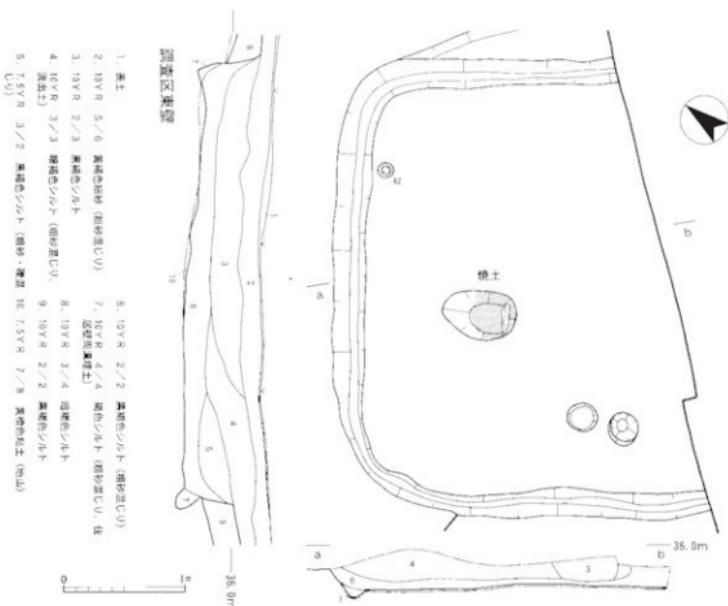
竪穴住居 S H467（第17図） 調査区西部のC 18グ



第18図 堪穴住居 S H475平面・断面図 (1 : 40)



第19図 窓穴住居S-H475関係土層断面図 (1 : 40)



第20図 竪穴住居S H 531平面・断面図 (1 : 40)

リッド付近で検出した遺構である。平面が長方形の竪穴住居跡で、南北辺が約4.2m、東西辺が約3.6mである。検出面からの深さは約10cmである。

貯蔵穴(S K 510)は南辺中央部分に、建物からやや飛び出して造られており、南辺が貯蔵穴に向かって開き気味に掘削されている。平面形や貯蔵穴の設置位置など、他の建物群とは異なる形状を呈する。炉跡はほぼ中央で確認した。主柱穴であろうビットは3ヶ所あったが、深さは一定でなかった。壁周溝は確認できなかった。

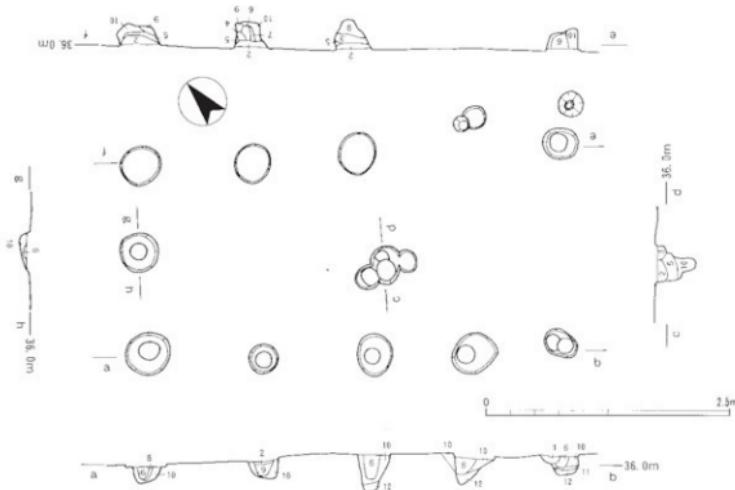
竪穴住居S H 469(第15図) 調査区北部のI 24グリッド付近で検出した遺構である。東側半分が天宝寺城の堀(S D 452)に切られている。

おそらく平面方形で、南北辺は約6mの竪穴住居跡である。検出面からの深さは約30cmである。検出の段階ではわからなかったが、掘削を進めていくと、壁周溝が一部で2条確認できた。このことから、住居跡が2棟切りあっているものと考えられるが、新旧関係はわからなかった。

主柱穴は2ヶ所ともしっかりとし、ほぼ同じ深さに掘削されている。貯蔵穴(S K 513)は建物の南辺、堀の法面で辛うじて確認できた。炉跡は堀に切られた東半部分に存在した可能性もあるが、検出できた建物の中央北部に一部焼き継ぎた部分が確認できる。

竪穴住居S H 475・排水溝S D 476(第18・19図) 調査区のほぼ中央、G 20グリッド付近で検出した遺構である。平面は方形状の竪穴住居跡で、今回検出した建物群の中では大型である。一辺が約6m、検出面からの深さは約30cmである。

貯蔵穴(S K 503)は南辺中央に造られているが、深さは床面から約20cmと浅い。また、貯蔵穴内の壁際にはビットが確認できる。主柱穴は、いずれも同じような深さで、床面から60cm前後掘削されている。壁周溝は全周し、壁柱穴も東西辺で一部確認した。しかし、前述のような施設がかなりしっかりといたにもかかわらず、明確な炉跡は確認できなかった。中央やや西寄りで炉石とも思えるこぶし大ほどの石



1. 10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂  
2. 10YR 3/3 緑褐色シルト  
3. 10YR 4/2 灰黄褐色シルト  
4. 7.5YR 5/8 緑色シルト  
5. 10YR 5/6 黄褐色細砂（シルト質を含む）  
6. 10YR 2/2 黒褐色粗砂（柱礎土）  
7. 7.5YR 4/2 灰褐色細砂（シルト質を多く含む、4が混じる）  
8. 10YR 4/4 褐色細砂  
9. 10YR 3/3 緑褐色細砂  
10. 10YR 3/4 緑褐色細砂（シルト質を含む）  
11. 7.5YR 5/4 にぶい褐色粗砂  
12. 7.5YR 4/6 褐色細砂（シルト質を多く含む）

第21図 堀立柱建物 S B 519平面・断面図 (1 : 50)

がほぼ床面直上で見つかったが、その近辺の床面が少し赤変していた程度である。

また、建物の南辺、貯蔵穴のすぐ西側からトンネル状につながる溝（S D 476）を確認した。いわゆる溝ではなく、長さ約2mほどで終結してしまうものであるが、竪穴住居の壁周溝から徐々に深くなるようにトンネルが掘削されてS D 476につながっていることなどから、排水溝の意味合いを持つと考え、「溝」とした。トンネルは、建物側およびS D 476側の両方から掘ってつなげたような形状が断ち切った形から観察できる。

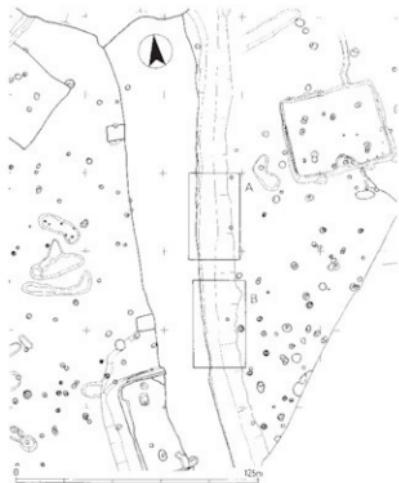
出土遺物は、床面直上からのものがほとんどである。後期の甕（67）は、排水溝と連結するトンネルの入り口付近で出土し、また把手付鉢（73）はそれのちょうど対辺際及び北西の主柱穴内から出土した。

竪穴住居 S H 485（第16図） 調査区中央部のG 16グ

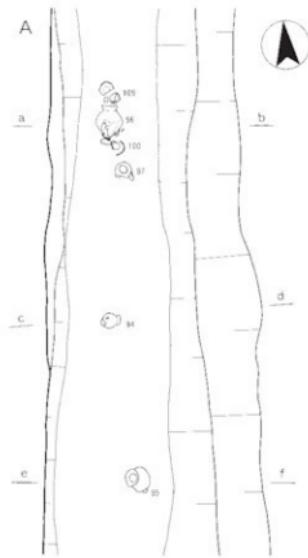
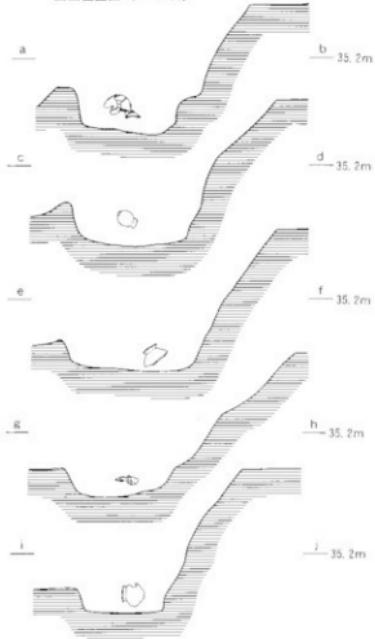
リッド付近で検出した遺構である。平面方形の竪穴住居跡で、南北の一辺が3.4mと、今回検出した建物群の中では小型のものである。検出面からの深さは約20cmである。

中央北寄りに火跡があり、貯蔵穴（S K 505）は南辺中央に造られている。火跡の被熱部分は建物の規模に比べると範囲は広いが、焼き締まりは弱い。壁周溝は貯蔵穴の両側で途切れるのを別にすると、全体に巡らされている。また、床面硬化部分は建物の中央部でよく残っていた。主柱穴は確認できなかつた。

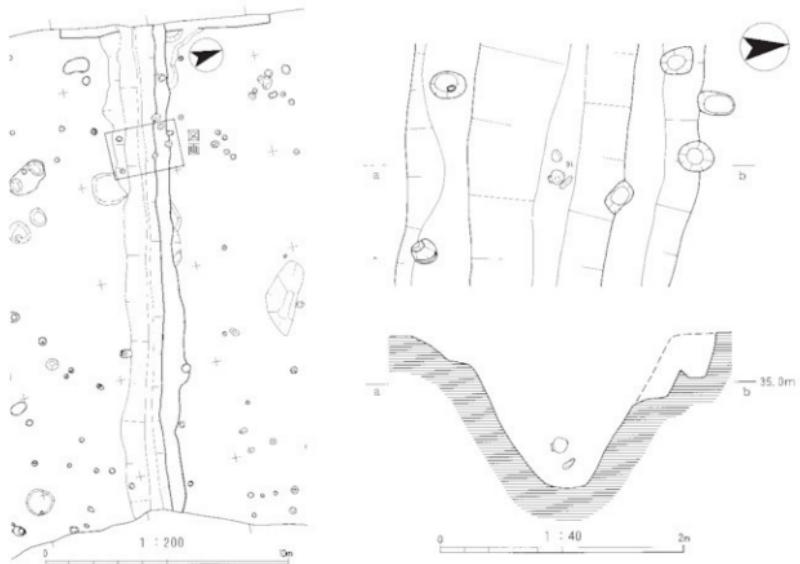
竪穴住居 S H 531（第20図） 調査区北端の東側、M 29グリッド付近で検出した遺構である。南東部が調査区外にあるため全体の規模は不明である。平面方形で一辺約3.8mの竪穴住居跡である。検出面からの深さは約20cmで、崖際のほうは流出が激しく残りが悪い。



図面位置図 (1 : 250)



第22図 環濠 S D 456遺物出土状況図 (1 : 40)



第23図 環濠 S D 497遺物出土状況図 (1 : 40)

炉跡は建物の中央から北に寄ったところに造られ、炉石も確認できた。貯蔵穴は他の住居跡と同様、調査区外にある南辺に造られているものと予想される。主柱穴は見つからなかった。

出土遺物は後期の甕や高杯、器台がある。壺(82)・甕(89)は床面直上で出土している。

掘立柱建物 S B 519 (第21図) 調査区北端部のD 3グリッド付近で検出した遺構である。東西約4.4m、南北約2mの掘立柱建物である。北は3間、南は4間、西は2間、東は1間と非常に不揃いな柱穴の並びであるが、建物としての規模は小さく、これだけの柱でも充分支えられる判断した。北東の柱が抜けているところが入り口とも考えられる。棟方向を北西～南東軸と考えると、軸方向はN52°Wである。

また中央にもピットがあることから、2間×2間の建物となる可能性も考えられる。

出土遺物はほとんど無く、明確な時期はわからぬが、直上および周囲から出土した遺物の時期などからこの時期の遺構とした。

環濠 S D 456 (第22図) 調査区北部のJ 24-29グリッ

ド付近で検出した遺構である。天花寺城の堀 (S D 452) に切られている。

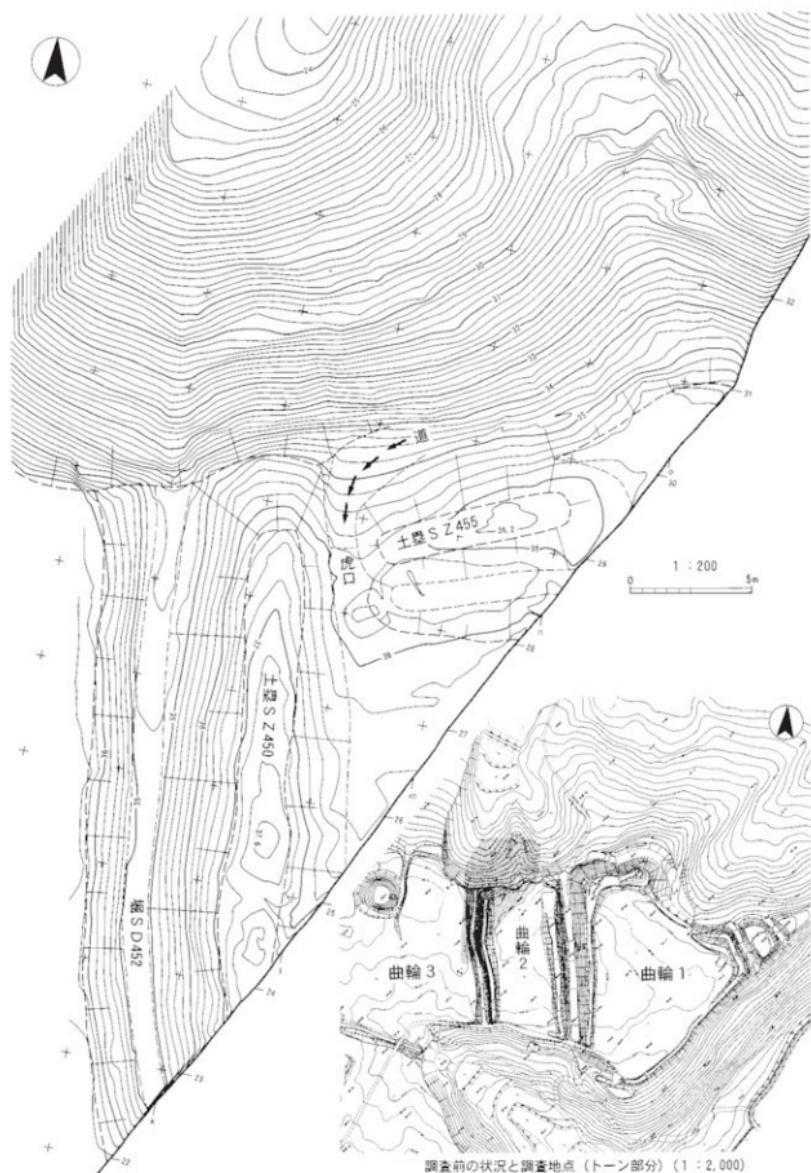
ほぼ同じ所にS D 452が掘削されているため、環濠の規模は不明であるが、残っているところで幅約1.5m、深さ約70cmで、延長約27mにわたって検出した。断面は逆台形である。岩盤である礫混じり層まで掘削されていた。

出土遺物はほとんどが溝の底部から少し浮いた状態で見られ、何らかの意図を持って並べたかのように間隔を空けて出土している。

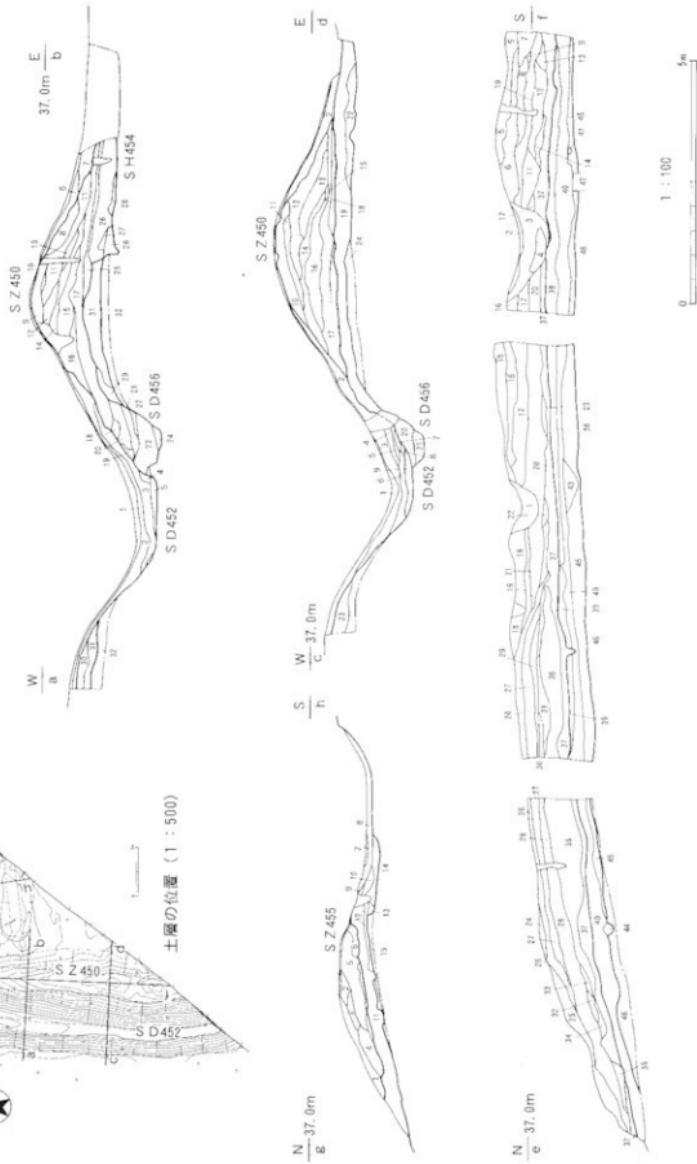
環濠 S D 497 (第23図) 調査区中央部のB～G 12グリッド付近で検出した遺構である。堀 S D 511と重複している。

環濠の規模は幅約3.2m、深さ約1.1mで延長約20mにわたって検出した。断面は一部テラス状に掘削されているところも見られるが、急傾斜のV字形である。

埋土上層からは奈良時代の土器や土馬、下層の環濠底付近からは弥生時代後期の甕や壺、高杯などが出土している。このことから、環濠がほぼ完全に埋



第24図 天花寺城跡曲輪2・3調査後測量図 (1 : 200)



第25図 天花寺城跡曲輪2関係土層図 (1 : 100)

a - b 土層	
1 表土 (一部蘿蔓土)	1 75YR6/4 黄褐色土。木根の侵食土
2 75YR6/4 に(5)1褐色砂質土	2 75YR6/6 棕色土。根の侵食土
3 75YR4/3 細褐色砂質土	3 30YR4/2 黄褐色土。根の侵食土
4 75YR3/3 咖褐色細砂質土	4 75YR4/1 硫酸可溶土。根の侵食土。黃褐色ブロック
5 75YR4/3 黄褐色砂質土	5 75YR4/1 黄褐色土。根の侵食土。黒色粘土。黒色粘土 (S240) 土壁
6 75YR4/4 に(5)1褐色砂質土	6 75YR2/1 黄褐色砂質土。地山ブロック多く含む (S240) 土壁
7 75YR6/2 及褐色細砂質土。シキ多く含む	7 75YR4/1 黄褐色砂質土 (S240 土壁)
8 75YR6/2 及褐色細砂質土。シキ混	8 75YR3/3 黄褐色砂質土。黃褐色ブロック (S240 土壁)
9 75YR6/2 及褐色砂質土。レ・泥	9 75YR5/2 及褐色砂質土 (S240 土壁)
10 75YR6/2 及褐色砂質土 (30%) + 75YR4/1 混合色砂質土 (70%)	10 75YR4/2 及褐色砂質土。黄褐色ブロック・表土 (S240 土壁)
11 75YR1/1 硫酸可溶土。硬質・くちむき	11 75YR1/1 黄褐色砂質土。地山ブロック多く含む (S240 土壁)
12 75YR1/1 硫酸可溶土。硬質・くちむき	12 75YR1/1 及褐色細砂質土。黄褐色ブロック・表土 (S240 土壁)
13 75YR1/1 硫酸可溶土。	13 75YR2/1 黄褐色砂質土 (S240 土壁)
14 75YR3/3 黄褐色土。地山ブロック多く含む	14 75YR5/2 に(5)1褐色砂質土。黄色ブロック (S240 土壁)
15 75YR3/1 黄褐色砂質土	15 75YR6/4 に(5)1褐色砂質土。硬質・くちむき (S240 土壁)
16 75YR4/2 黄褐色砂質土	16 75YR4/2 及褐色細砂質土。黄褐色 (S240 土壁)
17 75YR4/4 に(5)1褐色砂質土	17 75YR4/3 黄褐色砂質土。地山ブロック多く含む - 黑色粘土 (S240 土壁)
18 75YR3/3 咖褐色細砂質土	18 30YR3/2 黄褐色砂質土。地山ブロック多く含む (S240 土壁)
19 75YR3/3 咖褐色細砂質土	19 30YR3/2 黄褐色砂質土。黄褐色土。黑色粘土 (S240 土壁)
20 75YR2/2 黄褐色砂質土 (S240 土壁)	20 75YR1/1 黄褐色砂質土。地山ブロック多く含む (S240 土壁)
21 75YR2/2 黄褐色砂質土 (S240 土壁)	21 75YR4/3 黄褐色砂質土 (S240 土壁)
22 75YR2/2 黄褐色砂質土 (S240 土壁)	22 75YR4/2 黄褐色砂質土 (S240 土壁)
23 75YR3/2 黄褐色砂質土 (S240 土壁)	23 75YR5/2 及褐色細砂質土 (S240 土壁)
24 75YR2/3 黃褐色砂質土 (S240 土壁)	24 75YR5/2 黄褐色砂質土。白色粘土 (S240 土壁)
25 75YR4/2 及褐色砂質土	25 75YR5/8 黄褐色砂質土。 (S240 土壁)
26 75YR2/1 黑色砂質土 (SH64 理土)	26 75YR6/2 及褐色砂質土。硬質・白色粘土 (S240 土壁)
27 75YR4/1 及褐色砂質土 (SH64 土壁)	27 75YR1/1 黄褐色砂質土。黑・白色粘土。地山ブロック多く含む (S240 土壁)
28 75YR2/2 黄褐色砂質土 (SH45A 理土)	28 30YR4/2 黄褐色砂質土。黄褐色土。黑色粘土 (S240 土壁)
29 75YR3/3 黄褐色砂質土 (SH45A 理土)	29 30YR4/2 黄褐色砂質土 (S240 土壁)
30 75YR1/1 黑色砂質土 (SH64 理土)	30 75YR3/2 黄褐色砂質土 (S240 土壁)
31 75YR1/1 黑色砂質土 (SH64 理土)	31 75YR3/4 黄褐色砂質土。黃褐色ブロック (S240 土壁)
又 70YR5/6 黄褐色砂質土 (你生過橋面)	32 70YR5/8 黄褐色砂質土
c - d 土層	
1 表土	33 70YR4/6 黄褐色砂質土
2 75YR6/4 に(5)1褐色砂質土。 ◊ 2cm 程の小石含む	34 70YR4/6 黄褐色砂質土
3 75YR6/4 に(5)1褐色砂質土	35 70YR4/6 黄褐色砂質土
4 75YR4/1 黄褐色砂質土	36 75YR1/1 黄褐色砂質土。黄褐色土。黄褐色ブロック・黑色粘土 (S240 土壁)
5 75YR3/3 黄褐色砂質土	37 75YR1/1 黄褐色砂質土。中空骨地土
6 75YR3/3 黄褐色砂質土	38 75YR2/2 黄褐色砂質土。 (土色古土質)
7 75YR4/4 黄褐色砂質土	39 75YR1/2 及褐色砂質土。黄褐色土。黑色粘土 (S240 土壁)
8 75YR2/2 黄褐色砂質土	40 75YR1/1 黄褐色砂質土。黑色粘土。黄・白土。土器 (你生告古園)
9 75YR3/3 黄褐色砂質土	41 75YR2/2 黄褐色砂質土
10 75YR6/2 及褐色砂質土。硬質	42 75YR2/2 黄褐色砂質土 (ピット理土)
11 75YR4/1 及褐色砂質土	43 30YR2/3 黄褐色砂質土
12 75YR4/1 及褐色砂質土	44 75YR4/4 黄褐色砂質土 (道標理土)
13 75YR2/1 黄褐色砂質土シルト。地山ブロック多く含む	45 75YR2/2 及褐色砂質土 (便道された地山の可能性大)
14 75YR3/3 黄褐色砂質土	46 75YR7/8 黄褐色砂質土 (地山)
15 75YR3/1 黄褐色砂質土。地山ブロック多く含む	
16 75YR1/1 黄褐色砂質土	
17 75YR4/0 に(5)1褐色砂質土	
18 75YR4/1 及褐色砂質土	1 75YR7/4 に(5)1褐色土
19 75YR4/1 及褐色砂質土シルト	2 75YR3/2 黄褐色砂質土 (黄褐色ブロック)
20 75YR4/2 黄褐色砂質土	3 75YR4/4 黄褐色砂質土
21 75YR2/2 黄褐色砂質土	4 75YR2/1 黄褐色砂質土 (黄褐色)
22 75YR3/3 黄褐色砂質土	5 75YR3/2 黄褐色砂質土 (地山)
23 75YR3/1 黄褐色砂質土シルト	6 75YR2/2 黄褐色砂質土
24 70YR5/6 黄褐色砂質土	7 75YR2/3 黄褐色砂質土
g - h 土層	
1 75YR7/4 に(5)1褐色土	8 70YR5/6 黄褐色砂質土 (1と類似)
2 75YR3/2 黄褐色砂質土	9 75YR4/4 黄褐色砂質土
3 75YR4/4 黄褐色砂質土	10 75YR3/3 黄褐色砂質土
4 75YR2/1 及褐色砂質土	11 75YR2/2 黄褐色シルト (你生過橋面)
5 75YR3/2 黄褐色砂質土	12 75YR4/4 黄褐色砂質土
6 75YR2/2 黄褐色砂質土	13 75YR3/2 黄褐色砂質土
7 75YR2/3 黄褐色砂質土	14 75YR4/3 黄褐色砂質土 (道標理土か?)
8 75YR5/6 黄褐色砂質土	15 75YR7/8 黄褐色砂質土 (地山)

第1表 天花寺城跡曲輪2関係土層（第25図に対応）

没したのは奈良時代以降であろう。

風倒木 S K 540 調査区中央のE 13グリッドで検出した遺構である。このS K 540とその北にある土坑状のものが風倒木になる。

埋土から鏡形土製品が出土している。

#### d 奈良・平安時代

丘陵上の過去の調査で多く見つかっている奈良時代の遺構は、今回非常に少なく、住居跡なども確認していない。わずかに瓦片などが出土した土坑のみである。しかし、S D 497から当該時期の土馬をはじめ土器などが確認されていることから、何らかの人の営みがあったといえよう。また、調査区の北側ではこの時期の遺物はほとんど見つかっていない。

このことから奈良時代の遺跡の中心は丘陵の南西部であろう。

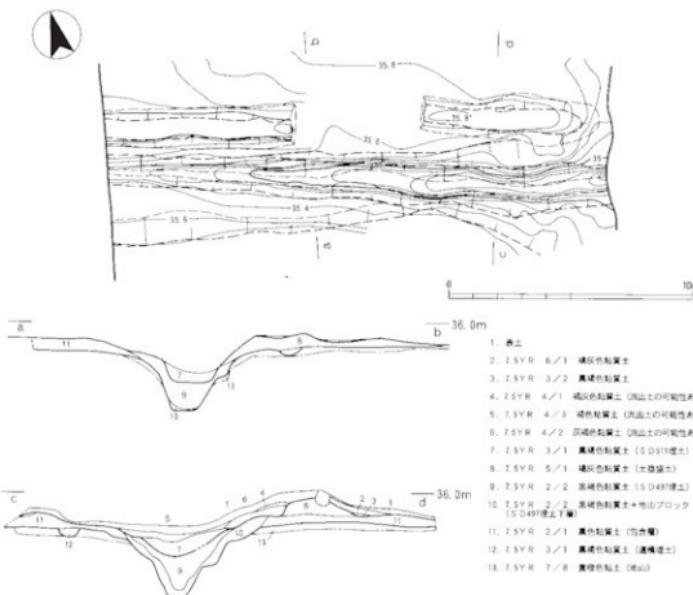
また、平安時代の遺構については、確認できることができなかった。

#### e 中世

この時期の遺構は、天花寺城関連の土壘や堀のみである。当初予想された曲輪内の遺構は確認できなかつた。

土壘 S Z 450（第24・25図） 調査区北部のK 25-K 29グリッド付近の遺構である。天花寺城跡の曲輪2と3の間を画す土壘である。平坦面からの高さは約1.6mで、延長約27mについて調査を行った。

横断面の土層の様子から堀を掘削した土を近くか



第26図 土壘 S Z 498・堀 S D 511平面・断面図 (1 : 200)

ら遠くへと盛っていった様子がうかがわれる。また、縦断面の土層の状況から、北から南に向かって盛っていった様子が観察できる。

土壘 S Z 455（第24・25図） 調査区北東端部のL・M39グリッド付近の遺構である。S Z 450の東に位置し、崖に添うように造営されている。平坦面からの高さは約0.6mである。S Z 450とS Z 455はほぼ直交する位置関係であるが、接続はされていない。この間が虎口に相当するものであると考えられる。S Z 455の南にはこれに沿うような溝状の落ちが見られる。

堀 S D 452（第24・25図） 調査区北部のL 24~29グリッド付近で検出した遺構である。曲輪2と3の間の堀で、S Z 450と並走する。幅が約4m、深さ約1.3mで、延長約27mについて調査を行った。断面形は逆台形で、岩盤である礫層まで掘削されている。ほぼ同じ位置で弥生時代の環濠が検出されていることから、堀 S D 452の掘削時には環濠の痕跡が残っていたものと思われる。

出土遺物はほとんどなく、当該時期のものは見られなかった。

土壘 S Z 498（第26図） 調査区中央部のB 13~G 12グリッド付近にある遺構である。天宝寺城跡の曲輪3と4を画する土壘である。高さ約40cmほどで、延長約20mにわたって調査を行った。中央部は、丘陵上を縦断する山道によって分断されていた。

非常に規模の小さいもので、単層の盛土である。いわゆる土壘というよりは、広い平坦地を区画するという意味合いのものであろう。

堀 S D 511（第26図） 調査区中央部のC 12~G 12グリッド付近にある遺構である。S Z 498と並走する。幅約1m、深さが約40cmで規模は非常に小さい。弥生時代の環濠と重複しており、掘削時に残っていたその痕跡を利用して造ったものと思われる。（柴山）

#### [註]

(1) 中岡研志「松菊里型住居- 我国稻作農耕容客期における竪穴住居の研究-」( 東アジアの考古と歴史 中岡崎敬先生退官記念論集 同崎敬先生退官記念事業会 1987年)

遺構番号	調査時の番号	性格	時期	グリット	特徴・形状・計測数値など
SZ450	SZ450	土壘	中世	J-L29~25	天花寺城削の遺構
SZ451	SD451	擾乱(試掘坑)		L27~29	
SD452	SD452	堀	中世	I・L24~29	天花寺城削の遺構
SH453	SH453	豎穴住居	弥生時代後期	N30・31	廬原に位置 残り悪い
SH454	SH454	豎穴住居	弥生時代後期	K・L28	排水溝あり 焼土あり 構梁部材と思われるこぶし大の石あり
SZ455	SZ455	土壘	中世	L-N29・30	天花寺城削の遺構
SD456	SD456	環濠	弥生時代後期	J28	SD452に切られる 断面V字形
SD457	SD457	排水溝	弥生時代後期	F27~H30	SH461の排水溝 SH461とはトンネルで連結
SK458	SK458	土坑	弥生時代前期	G30	
SZ459	SH459	擾乱		E24~25	
SZ460	SH460	擾乱		G・H28~29	
SH461	SH461	豎穴住居	弥生時代後期	E・F26・27	排水溝SD457あり 主柱穴2組あり
SK462	SK462	土坑	弥生時代	G28	木根の可能性あり
SK463	SK463	土坑	弥生時代	E25	
SK464	SK464	落ち込みか?	弥生時代	E25	
SK465	SK465	土坑	弥生時代	E25	SK463内
SH466	SH466	豎穴住居	弥生時代後期	D・E19・20	ベッド状遺構を持つ 焼土あり SH515と同一
SH467	SH467	豎穴住居	弥生時代後期	C・D18・19	残り悪い 焼土あり
SK468	SK468	貯蔵穴	弥生時代後期	F26	SH461貯蔵穴
SH469	SH469	豎穴住居	弥生時代後期	I23~25	2種切りあいか? ! SD452に切られる 焼土あり
SK470	SK470	落ち込み		J23	
SK471	SK471	土坑		E26	SH461内
SK472	SK472	土坑		G21~22	
SK473	SK473	土坑	弥生時代前期	H17	焼土あり(炉か?)
SK474	SK474	土坑	弥生時代	I19	平面方形の豎穴住居か 但し主柱穴・壁周溝など確認できず
SH475	SH475	豎穴住居	弥生時代後期	H20	排水溝SD476あり 今回検出した建物と比較すると大型
SD476	SD476	排水溝	弥生時代後期	H19	SH475排水溝 SH475とトンネルで連結
SK477	SK477	土坑	弥生時代	G19	木の根の可能性あり
SK478	SK478	落ち込み		F18~19	SH526と関連ありか? ! 風倒木も詰む
SK479	SK479	土坑	奈良時代	D14	平瓦片出土
SK480	SK480	土坑	奈良時代~	F16	
SK481	SK481	土坑	弥生時代	E17	土坑北部底面にこぶし大の石が並ぶ
SK482	SK482	土坑	弥生時代	I21	木の根の可能性あり
SK483	SK483	土坑	弥生時代	I25	
SK484	SK484	土坑	弥生時代前期?	H24	
SH485	SH485	豎穴住居	弥生時代後期	G16	平面形状が方形を呈す 他と比較すると小型
SK486	SK486	土坑	弥生時代	F22~23	
SK487	SK487	土坑	弥生時代?	E22	
SD488	SD488	溝	弥生時代	E23	土坑かも
SK489	SK489	土坑	弥生時代	F・G17	

第2表 第8次調査区(南地区) 遺構一覧(1)

遺構番号	調査時の番号	性格	時期	グリット	特徴・形状・計測数値など
SK490	SK490	土坑	弥生時代?	F24	
SK491	SK491	土坑?	弥生時代	E20-21	木根の可能性あり 埋土に炭化物含む 馬見塚様の深跡が横位で出土 稲内および稻の口に当たる部分に石あり
SX492	SX492	土器棺墓	縄文時代晚期	G27	
SK493	SH493	土坑	弥生時代	I19-20	S K 4 7 4 内 諫穴住居の可能性あり
SK494	SK494	土坑	弥生時代前期	E18	埋土に炭化物含む
SK495	SK495	土坑	弥生時代?	E18	サヌカイト片
SK496	SK496	土坑	弥生時代	F22-23	S K 4 8 6 内
SD497	SD497	環濠	弥生時代後期	B-G12	S D 5 1 1 (天花寺城の堀) と重複
SZ498	SZ498	土壘	中世	B-G13	天花寺城削の遺構 規模小さい
SK499	SK499	土坑		E16-17	木の根の可能性あり
SK500	SK500	亂倒木		E16	
SZ501	SZ501	攢乱		E14-15	
SK502	SK502	土坑		F23	S K 4 8 6 に切られる
SK503	SK503	土坑	弥生時代後期	G19	S H 4 7 5 貯蔵穴
SK504	SK504	落ち込み		F22-23	
SK505	SK505	貯蔵穴	弥生時代後期	G16	S H 4 8 5 貯蔵穴
抹消	SH506	欠番			
SK507	SK507	土坑	弥生時代前期?	H66	燒土あり(炉?)
抹消	SK508	欠番			
抹消	SK509	欠番			
SK510	SK510	土坑	弥生時代後期	C18	S H 4 6 7 貯蔵穴
SD511	SD511	堀	中世	B-G12	天花寺城削の遺構 S D 4 9 7 と重複
抹消	SD512	欠番			
SK513	SK513	貯蔵穴	弥生時代後期	J24	S H 4 6 9 貯蔵穴
SK514	SK514	土坑	弥生時代	I25	S H 4 6 9 内
抹消	SH515	欠番			S H 4 6 6 と同一遺構
SK516	SK516	貯蔵穴	弥生時代後期	E19	S H 4 6 6 貯蔵穴
SK517	SK517	土坑		G15・16	木の根の可能性あり
SK518	SK518	土坑		F9	木の根の可能性あり
SB519	SB519	掘立柱建物	弥生時代か?	D8	東西約4.4m×南北約2m
SK520	SK520	土坑	弥生時代か?	F3	
SK521	SK521	土坑	弥生時代か?	E2	
SK522	SK522	土坑	弥生時代か?	C7-8	
SK523	SK523	土坑		E9	
SK524	SK524	土坑		D4	
SK525	SK525	土坑	弥生時代か?	D7	
SH526	SH526	平地式住居	弥生時代前期	F17	炉を中心に柱穴が円形に並ぶ
SK527	SK527	土坑		G23	サヌカイト片
SK528	SK528	土坑?		I21	S K 4 8 2 と切り合うが、木根の可能性が高いと思われる
SK529	SK529	土坑		F24	木根の可能性大

第3表 第8次調査区(南地区) 遺構一覧(2)

遺構番号	調査時の番号	性格	時期	グリット	特徴・形状・計測数値など
S K 5 3 0	S K 5 3 0	土坑?		I22	土器小片
S H 5 3 1	S H 5 3 1	竪穴住居	弥生時代後期	M9	壁周溝・炉あり
S K 5 3 2	S K 5 3 2	土坑?		K・L29	包含層の可能性あり
S K 5 3 3	S K 5 3 3	土坑		H27	木根の可能性大
S K 5 3 4	S K 5 3 4	土坑		E23	
S K 5 3 5	S K 5 3 5	土坑	弥生時代	E22	埋土に炭を含む
S K 5 3 6	S K 5 3 6	土坑		G26	
S K 5 3 7	S K 5 3 7	風倒木		H26	
S K 5 3 8	S K 5 3 8	風倒木		H26	
S K 5 3 9	S D 5 3 9			K29	木根
S K 5 4 0	S K 5 4 0	風倒木	弥生時代後期	E13	鏡形土製品出土
S K 5 4 1	S K 5 4 1	貯蔵穴	弥生時代後期	L28	S H 4 5 4 内貯蔵穴
S D 5 4 2	S D 5 4 2	排水溝	弥生時代後期	L29	S H 4 5 4 の排水溝か
S D 5 4 3	S D 5 4 3	溝	弥生時代	M9	S H 4 5 4 につながる
S K 5 4 4	S K 5 4 4	土坑		C10	木根の可能性大
S K 5 4 5	S K 5 4 5	土坑		B9	土器小片
S K 5 4 6	S K 5 4 6	土坑		B8	土器小片
S K 5 4 7	S K 5 4 7	土坑		B6	木根の可能性大
S K 5 4 8	S K 5 4 8	土坑		B-C9	埋土に炭化物含む 焼土あり
S K 5 4 9	S K 5 4 9	風倒木		B5	
S K 5 5 0	S K 5 5 0	土坑	弥生時代か?	B7	焼土あり(?)

第4表 第8次調査区（南地区）遺構一覧（3）

遺構番号	図版番号	規模(m)		炉	貯蔵穴	主柱穴	備考
		長辺	短辺				
S H 4 5 3	第 12 図	5.3	—	—	—	あり	南半部調査区外
S H 4 5 4	第 13 図	5.5	4.4	中央	南辺中央	あり	排水溝を持つ
S H 4 6 1	第 14 図	5.4	5.4	中央	南辺中央	2組?	排水溝を持つ
S H 4 6 6	第 16 図	4.3	4.0	ほぼ中央	南辺中央	あり	ベッド状遺構
S H 4 6 7	第 17 図	4.6	3.7	ほぼ中央	南辺	あり	
S H 4 6 9	第 15 図	6.0	—	北西寄り	南辺	あり	2棟切りあい
S H 4 7 5	第 18・19 図	6.3	5.8	—	南辺中央	あり	排水溝を持つ
S H 4 8 5	第 16 図	3.5	3.3	北寄り	南辺中央	—	
S H 5 2 6	第 11 図			中央			円形 平地式住居 弥生時代前期
S H 5 3 1	第 20 図	3.8	—	北寄り	—	—	

第5表 第8次調査区（南地区）竪穴住居一覧

## IV 南地区(上部平坦面)の出土遺物

第8次調査区南地区(上部平坦面)から出土した遺物は、整理箱にして約26箱である。時期的には縄文時代晚期から中世にまで及ぶ。弥生時代後期の土器類が中心で、次いで、奈良時代のものが少量認められる。

以下では、出土遺物の特長を主に遺構単位で記述するが、石器類および縄文時代晚期～弥生時代前期は、遺構単位でのまとめが悪いため、一括して扱う。遺物個々の詳細については、遺物観察表(第6～10表)を参照されたい。

### 1 石器類

石器類には、石錐・石鎌・石匙・石斧などの利器のほか、叩石・磨石などの調整具がある。  
石錐(1) サヌカイト製。先端は少し欠けているものと思われる。  
石鎌(2・3) いずれもサヌカイト製。2は凸基式、3は凹基式のものである。  
石匙(4) サヌカイト製。側面には一部自然面が残る。縄文時代のものと考えられる。  
スクレイバー(5) サヌカイト製。1側辺に自然面を残す。  
剥片石器(6) サヌカイト製。調整痕のある剥片(RF)である。片面は自然面が残っている。  
扁平片刃石斧(7) 緑色の凝灰岩製と考えられる。全体によく研磨されている。長軸約3.6cmで、かなり小形である。SK474から出土しているもので、弥生時代後期のものと考えられる。なお、同様の石斧が第6次調査区からも出土している。  
太形蛤刃石斧(8) 緑色の凝灰岩製と考えられる。全体に剥離が進んでおり、原型を留める部分は少ない。竪穴住居SH454から出土している。  
磨石・叩石(9～11) 9・10は、いずれも平面に磨痕が、端部に敲打痕が認められる。後述の石皿(14)などとセットで用いられたものと考えられる。11は硬質の泥岩製で、スクレイバーの可能性もあるが、何かを敲打したために、1側辺が刃部状になったもの

のと考えた。

砥石・石皿(12～15) 12・13は粗製の砥石である。13・14には細かな擦痕がある。15は大形のものであるため、地面に固定して用いられたものであろう。14は図の右側平坦面に赤色顔料(ベンガラ?)が付着しており、石皿として用いられた後に、砥石へと転用されたものと思われる。

12・14はいずれも竪穴住居SH467から出土しているもので、弥生時代後期のものと考えられる。

### 2 縄文時代晚期の土器

縄文時代晚期の土器には、土器棺墓に利用されたもののほか、少量の破片がある。

土器棺墓S X 492出土土器(16) 16は土器棺として用いられていた深鉢である。口縁部外面および体部最大径部や上方の2箇所に突帯が付く。突帯上には、二枚貝による刺突が押し引き施文される。突帯間に二枚貝による条痕が施される。外面下半はヘラケズリの後に、粗いミガキが施されている。外面には煤、内面には炭化物が付着しており、煮炊具として利用された後に棺に転用されたことがわかる。手法の特徴から、縄文時代晚期末の馬見塚式に相当するものと考えられる。

その他の縄文土器(17) やはり縄文時代晩期末と考えられる深鉢の口縁部片である。外面には二枚貝による条痕が施されている。

### 3 弥生時代前期の土器

弥生時代前期の土器には、壺・甕・鉢・蓋などが見られる<sup>11)</sup>。

壺類(18～23) 18～23は、当該時期の壺類である。18は粗雑な波状文を施したもの。形態的には弥生時代前期のものと考えられる。類似する例が三河地域にあり<sup>12)</sup>、三河地域もしくはそれ以東からの搬入品か、あるいは当地での模倣品と考えられる。

19は口縁部外面に穿孔(焼成前)を持つ。他の一

群よりもやや古く、前期中段階に相当すると思われる。20・21は頸部にヘラ描沈線文のめぐるものである。20は多条化しており、弥生時代中期的な様相を持っている。22は半截竹管状の2本1対の工具により、2单位の沈線文を施している。23は口縁部内面が凹線状となり、頸部外面に半截竹管状工具による3単位以上の沈線文を施しているもので、いわゆる「垂流遠賀川式」にあたる。

蓋類(24・25) 24は、甕蓋の中央部の破片と考え、ここに含めた。ただし、他のものの可能性もある。25は甕蓋で、中央に穿孔(焼成前)を持つ。

鉢(26) 口縁部下方の外面に瘤状突起を持つもの。突起は2箇所分が残るが、接合しない破片であるため、全体の個数や方向は分からぬ。

壺類(27~39) 27のみ頸部外面が無文で、それ以外は沈線文が見られる。27は口縁部の外反が弱く、面をなす口縁端部、外面に2種類のハケメが見られるなど、他のものとは異なった特徴を持つ。

28・29はヘラ状工具による沈線文を持つもの。28は3単位、29は4単位施されている。いずれも、口縁部が短く、開きも小さいという特長を持つ。ただし、28の口縁端部外面には刻目文があり、30~38の特長をも併せ持っている。

30~38は半截竹管状工具による沈線文を持つもの。31・32は1単位(2条)、37は4単位(8条)、それ以外は2単位(4条)である。30・31以外は、口縁端部外面に刻目文を持つ。37は1単位(2条)が波状を呈するもので、珍しい。38は大形のものである。これらは、いわゆる「垂流遠賀川式」に相当するもので、前期新段階にあたる。

瓶(40・41) 底部に焼成前穿孔を持つもの。41は、弥生時代前期以降のものかも知れない。

#### 4 弥生時代後期の土器

弥生時代後期の土器<sup>1</sup>は、竪穴住居や環濠などから出土している。いずれも後期前半を中心とした土器類である。なお、当遺跡としては、今回の調査区からの出土は比較的多いといえる。

竪穴住居S H454出土土器(42~50) 42~43は壺。44は外面に煤が付着しており、煮炊具として使用さ

れている。45は器台。

46~48は甕。46は受口状口縁を呈するもので、口縁部外面には2種類の工具による刺突文が施されている。下部の刺突文は47の口縁部外面に施されたような、通常見られる「く」の字状口縁の甕と類似するものであるが、上部の刺突文は、やや押し引き状となっている。いわゆる「近江系」甕と、当該遺跡在来の施文方法とが融合したものと考えられ、興味深い。

49は台付甕の脚台部、50はミニチュアの鉢である。竪穴住居S H461出土土器(51・52) 51は高杯の脚柱部、52は壺の底部である。

排水溝S D457出土土器(53・54) 竪穴住居461に伴う排水溝であるため、上記51・52の土器と一体で把握できるものである。53は外面に櫛描横線文を施す高杯脚柱部、54は甕である。

竪穴住居S H466出土土器(55~58) 55~58は壺。58は、同一の櫛齒状工具により、体部外面に横線文と波状文が施されている。

59・60は高杯。60は中実の脚柱部であり、脚裙部が強く屈折する形態になると思われる。61・62は甕。竪穴住居S H469出土土器(63~66) 63は壺。64は高杯の脚部で、脚柱上端に格子目文が施される珍しいものである。65は甕で、口縁端部外面には刻目文が施される。66は台付甕の脚台部。

竪穴住居S H475出土土器(67~73) 67~70は壺。67は頸部下に同心円文のスタンプが4箇所押されている。スタンプ文は珍しく、小谷赤坂遺跡ではこれが初例である。71は甕で、体部下半はヘラケズリされている。72は高杯。73は大形の台付鉢で、2箇所に把手が付いている。同様の鉢は、松阪市草山遺跡出土資料中に類例がある<sup>2</sup>が、あまり例を見ないものである。

竪穴住居S H485出土土器(74~78) 74・75・78は壺。74は体部外面上半に櫛齒状工具により、横線文・波状文・刺突文のほか、「W」字状・「J」字状の施文を施す、珍しいものである。残存する破片から、「W」と「J」は連続しながら全周しているものと考えられる。76は「ワイングラス」形の高杯、77は台付甕の脚台部である。

竪穴住居S H453出土土器(79~81) 79・80は高杯

の脚柱部、81は台付甕の脚部である。

竪穴住居 S H531出土土器(82~90) 82は壺で、口縁部をやや拡張するもの。83は器台で、5単位の櫛描横線文が見られる。84は高杯の脚柱部、85は小形の高杯か、あるいは台付壺の脚部と考えられる。86・87は壺の底部。88~90は甕で、いずれも平底である。

環濠 S D497出土土器(91~93) 91は壺。ほぼ完形だが、脆弱なために口縁部が剥離欠損している。92は楕形を呈する高杯。93は楕形のやや深い高杯である。

環濠 S D456出土土器(94~111) 94~97は壺。96の外面頸部下には刺突文が施されている。98は器台で、口縁端部外面には2個1単位の円形浮文が4方向に施されている。99~103は高杯で、「ワイングラス」形や楕形のものがある。101・103の脚柱部は、櫛描横線文の間を、櫛歯状工具による刻目文で充填している。

104~111は甕で、いずれも平底のもの。下膨れとなるもの(108・109・111)、体部下半が強くすぼまるもの(104・106)など、形態の違うものが見られる。106・108・109のように、体部外面をヘラケズリするものが複数見られることも、当遺跡の特長と考えられる。

土坑出土土器類(112~131) S K487・462・477・478・481・486・532・533・540から出土した土器類である。

S K540から出土した131は鏡形土製品で、紐座は摘み上げて整形され、鏡面には1箇所の円孔が見られる。鏡背面には、特別な模様は施されていない。鏡面は平坦に調整されている。共伴する遺物が無いため、所属時期を断定することは難しいが、焼成や素地の状況から、弥生時代後期のものと見て差し支えないと考える。

溝 S D542出土土器(132~134) 132は壺、133・134は甕である。

ピット出土土器(135・136) 135は壺、136は小形の鉢である。

遺構外出土土器(137~140) 138は壺の体部上半部片で、外面には櫛描刺突文・横線文・波状文が同一工具により施文されている。137は土錘で、弥生時

代後期に相当する遺構から出土している例が他で見られる(122など)ことから、当該時期のものとした。139は甕の底部、140は壺の底部である。

## 5 奈良・平安時代以降の土器類

奈良・平安時代以降の土器類は、あまりまとまつた出土は無いものの、興味深いものがいくつか見られる。

なお、奈良・平安時代の土器類については、飛鳥・藤原・平城京の都城における土器分類と編年(以下、「都城分類」「都城編年」と呼称)<sup>5)</sup>、および、斎宮跡における編年(以下、「斎宮編年」と呼称)<sup>6)</sup>を参照する。

環濠 S D497上層出土土器類(141・142) 弥生時代の環濠である S D497の上部から出土したものである。

141は土師質の土馬。中実で重く、全体形はずんぐりしている。胴・脚・首・頭は、一連で形成しているが、脚端部には素地を補充して整形している。鞍は、前輪・後輪とともに素地粘土付加による。耳は、本体からの抜り出して整形する。頭頂部は、現状のままとも見えるが、剥離痕跡があるようにも見えるため、何か被り物のあった可能性がある。目と鼻は、同一の棒状工具による刺突で表現される。口・たてがみは、ヘラ状工具により刻み込まれている。鞍の前輪から頸部下方にかけ、同じくヘラ状工具により手綱が刻み込まれている。

142は須恵器杯Bである。都城編年の平城III~IV、斎宮編年ではI~3に併行するものであろう。

土坑 S K504出土土器(143~145) 143は須恵器杯A。焼成が悪く、極めて脆弱である。144は須恵器杯B。143・144はS K504内の同一ビットから出土している。145は土師器甕。これらは、都城編年では平城IVに、斎宮編年ではI~3に併行するものであろう。

竪穴住居 S H474出土土器(146) 土師器甕を示した。斎宮編年のI~3に併行するものと考えられる。

ピット出土土器(147~155) 調査区内のピットから出土したもので、それぞれが共伴関係に無い。147は土師器杯Aで、斎宮編年のII~2に併行するもの。

148は土師器皿Aで、斎宮編年の中からII-1頃に併行する。

149は杯Aで、器形と部分的な調整手法は須恵器を真似ているが、全体の調整手法は土師器の手法で作られているものである。したがって、土師質土器（ロクロ土師器）と認識できよう。時期的には、斎宮編年の中からIII-3頃にあたると思われる。

150は須恵器長頸壺、151は土錘、152-154は土師器甕である。153は長岡京期によく見られる鉢形をなすもので、斎宮ではII-1～2併行期によく認められる。155は土師器甕である。

遺構外出土土器（156～169） 遺構に伴わない当該時期の土器をここにまとめた。

156-166は、奈良・平安時代の土器類。都城編年では平城III以降、斎宮編年では斎宮I-3～II-1頃に併行するものが見られる。156-158は須恵器杯蓋で、宝珠摘みの付くもの。159は土師器皿Aで、斎宮編年ではII-1頃に併行する。160は須恵器皿A。161は須恵器鉢で、尾張猿投産の可能性がある。162は須恵器の甕で、底部には静止糸切痕が見られ、その上から高台が貼り付けられている。

167は陶器椀（山茶椀）で、渥美産のもの。12世紀後半頃のものである。168は陶器壺の底部片で、おそらく常滑産である。底面には煤が付着している。169は瀬戸産の陶器丸椀で、18世紀頃のものであろう。

## 6 瓦類

時期的には奈良・平安時代に相当する瓦類が数点出土している。当遺跡の東に近在する、天王寺廃寺に関連するものと考えられる。

170は軒丸瓦で、いわゆる川原寺式系のもの。中房には蓮子が1+4+8個の合計13個見られる。子葉は複弁重弁で、8葉見られる。外区には単線の鋸歯文がめぐっている。比較的精緻な素地を用いており、範の整形も丁寧である。

171は丸瓦、172～175は平瓦である。172の凸面には、長方形の格子目叩きが見られる。175のような正方形に近い格子目叩き、あるいは、173・174のような縞目叩きは、天王寺廃寺でもよく見られるが、

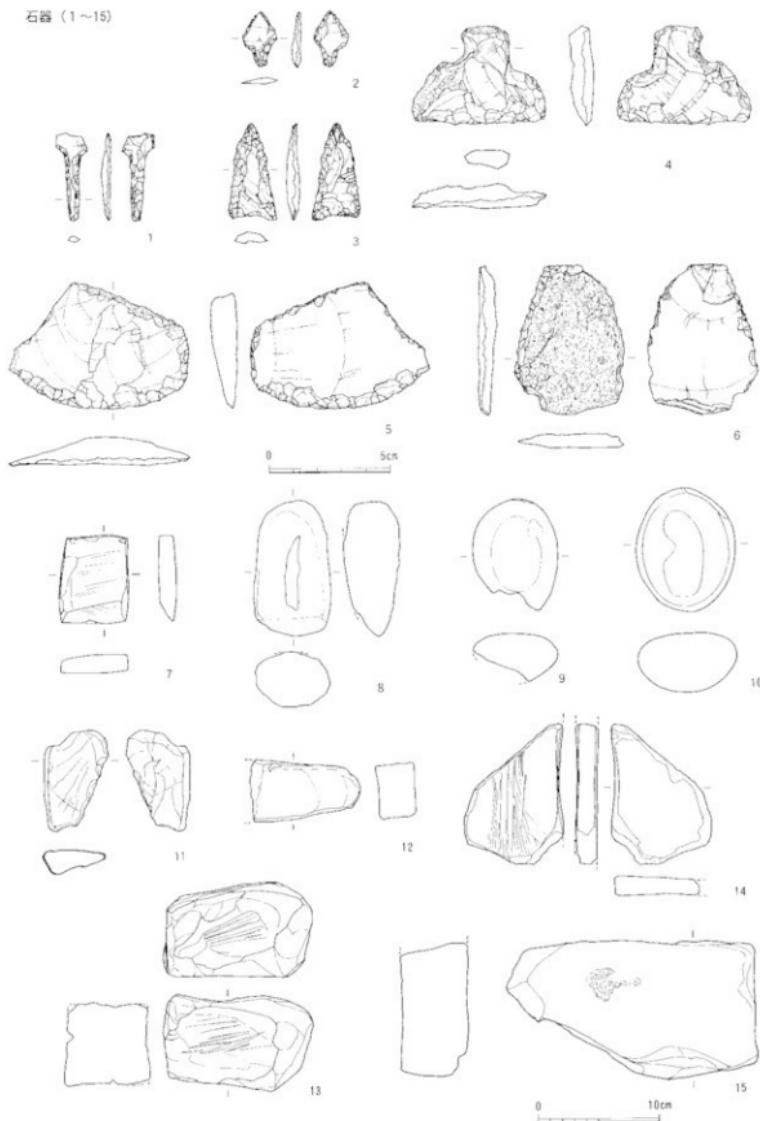
172のような長方形の格子目叩きは珍しい。

(伊藤)

### 〔註〕

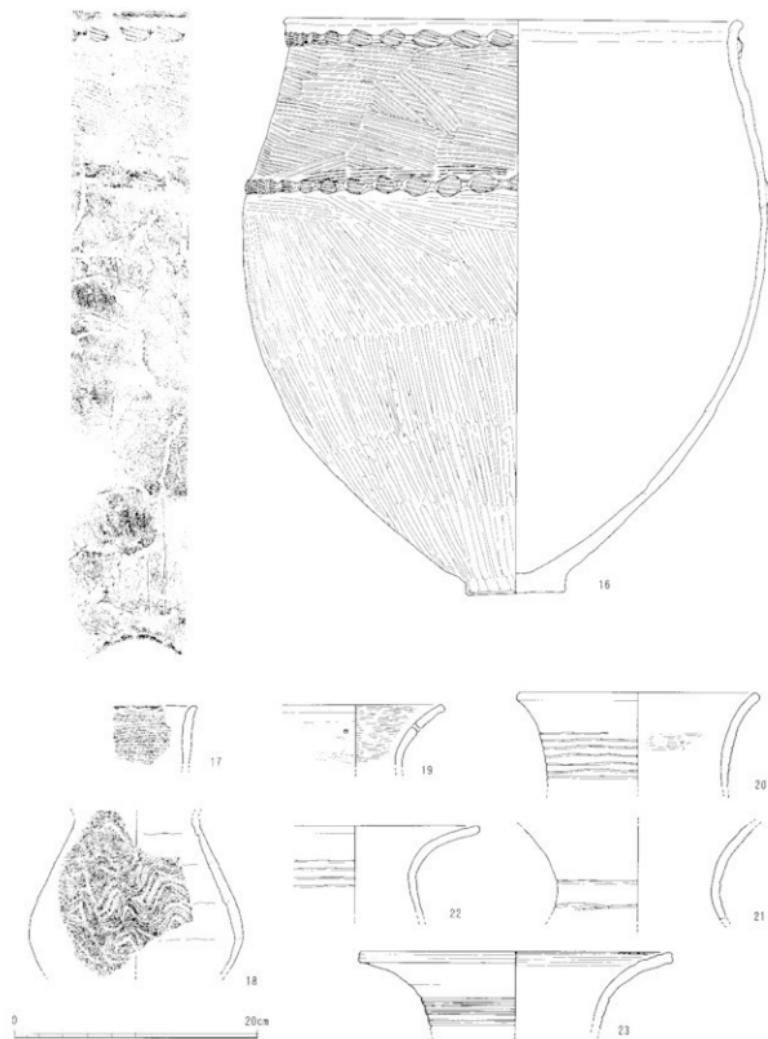
- ①弥生時代前期の区分等については、加納俊介・石黒立人編「弥生土器の様式と編年」（東海編）（木耳社2002年）を参照。
- ②類例として、麻生田大橋遺跡出土資料を挙げておく。（財）愛知県埋蔵文化財センター「麻生田大橋遺跡」（1991年）p.71・図版53
- ③弥生時代後期の土器については、本書総括編「天王寺丘陵の後期弥生土器」を参照されたい。
- ④松阪市教育委員会「草山遺跡発掘調査月報」No.9（1984年）
- ⑤都城編年と分類については、古代の土器研究会編「古代の土器」1「都城の土器集成」（1992年）を参照した。
- ⑥斎宮歴史博物館「斎宮の土器・みやこの土器」（国史跡高宮跡発掘30周年記念特別展「器は語る700年」記念シンポジウム資料2000年）および講演記録（「斎宮歴史博物館研究紀要」10（2001年）、駒田利治・泉雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」（「斎宮跡発掘調査報告」I 斎宮歴史博物館 2001年）

石器（1～15）

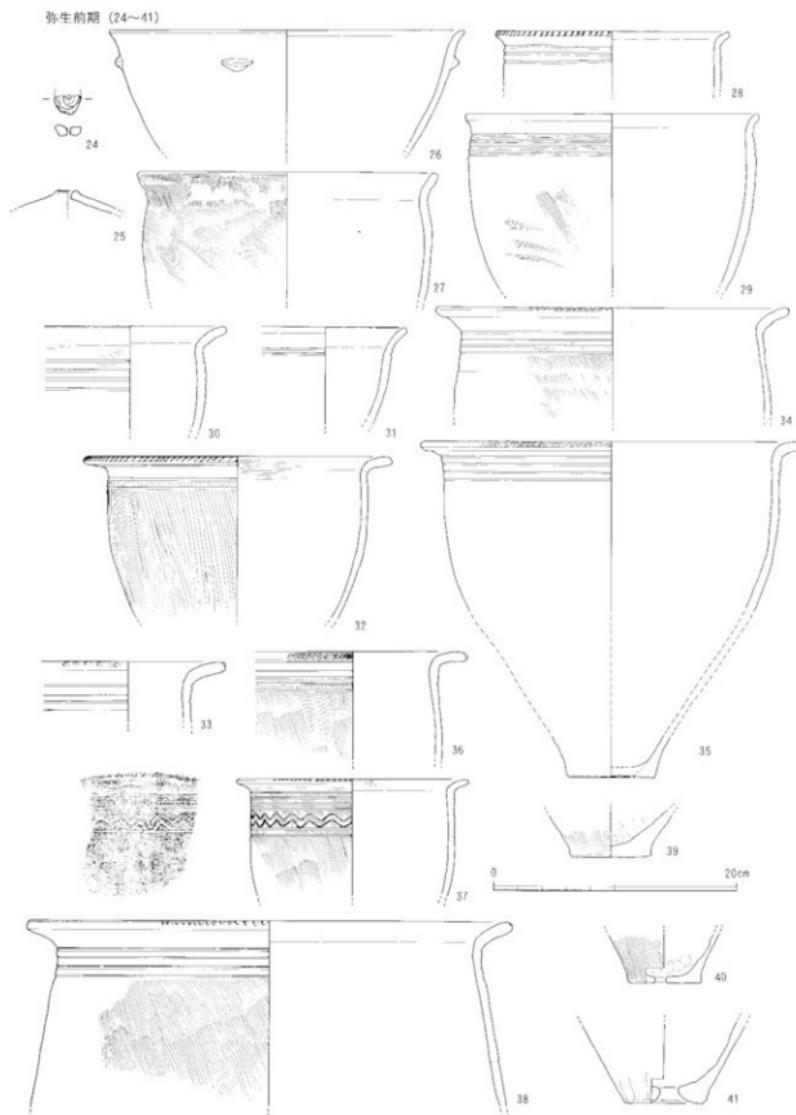


第27図 南地区出土遺物実測図（1）（1～7は1：2、他は1：4）

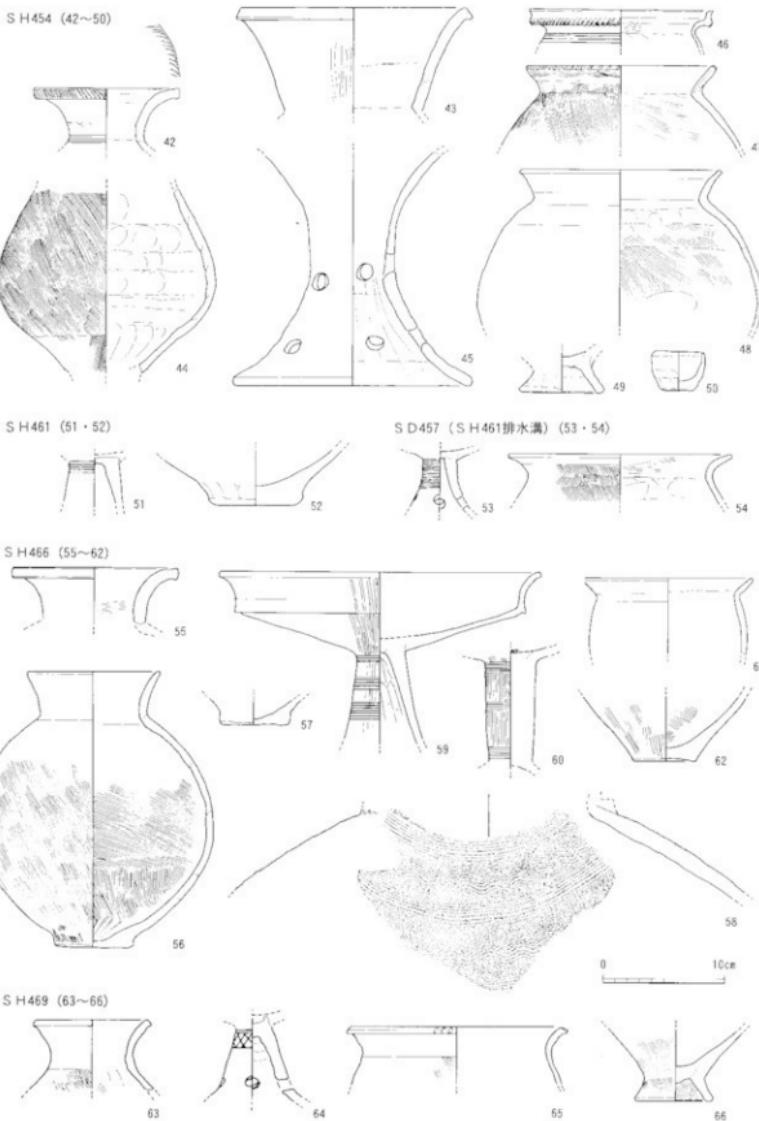
縹文 (16・17)・弥生前期 (18~23)



第28図 南地区出土遺物実測図 (2) (1 : 4)

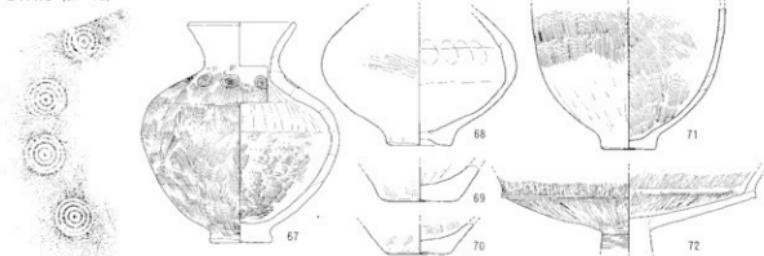


第29図 南地区出土遺物実測図 (3) (1 : 4)

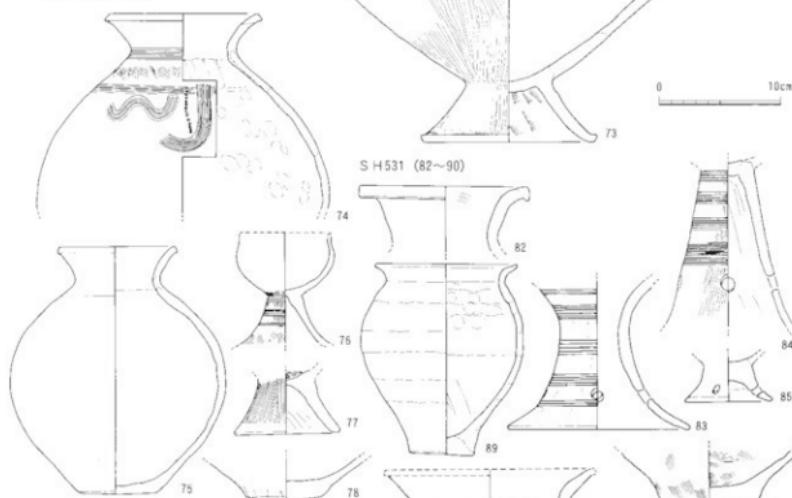


第30図 南地区出土遺物実測図 (4) (1 : 4)

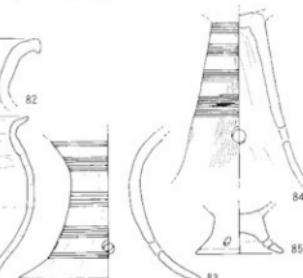
S H475 (67~73)



S H485 (74~78)



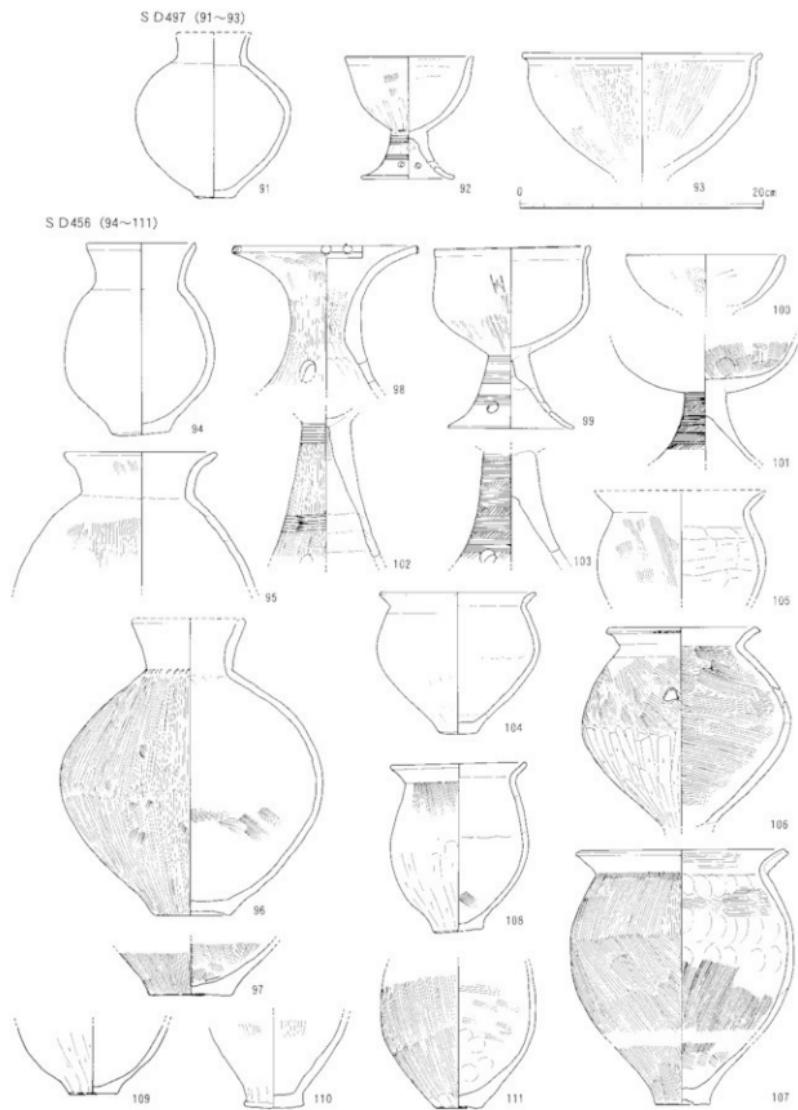
S H531 (82~90)



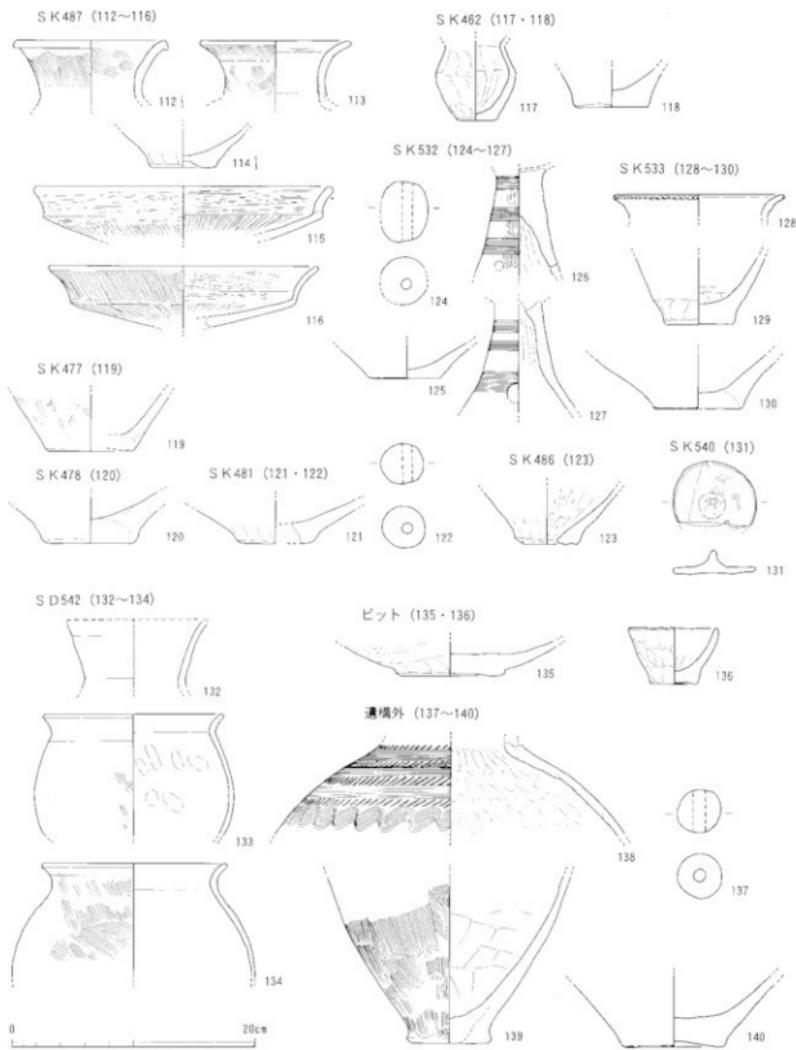
S H453 (79~81)



第31図 南地区出土遺物実測図 (5) (1 : 4、67の拓本は1 : 2)

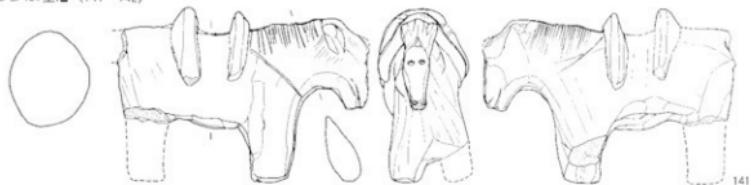


第32図 南地区出土遺物実測図 (6) (1 : 4)



第33図 南地区出土遺物実測図（7）（1：4）

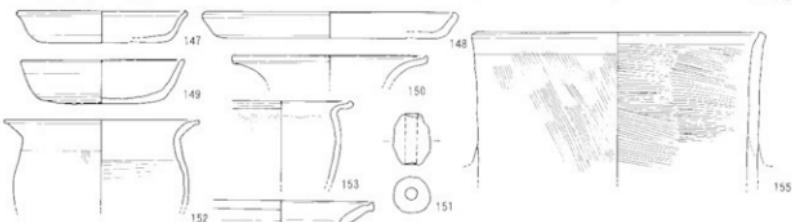
SD497上層 (141・142)



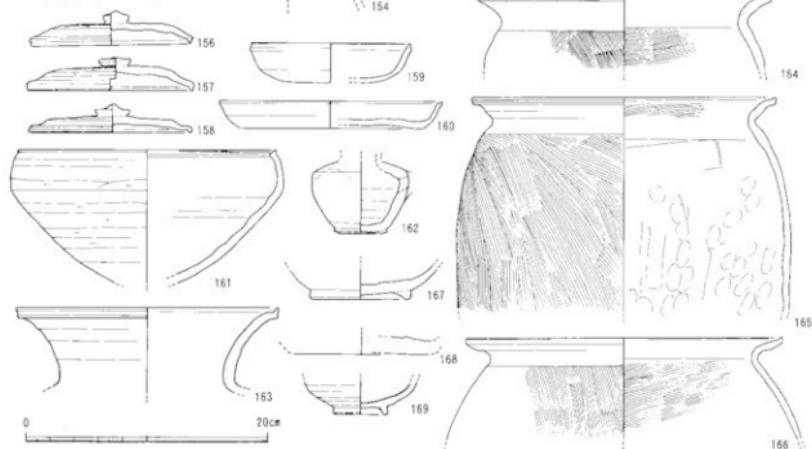
SK504 (143~145)



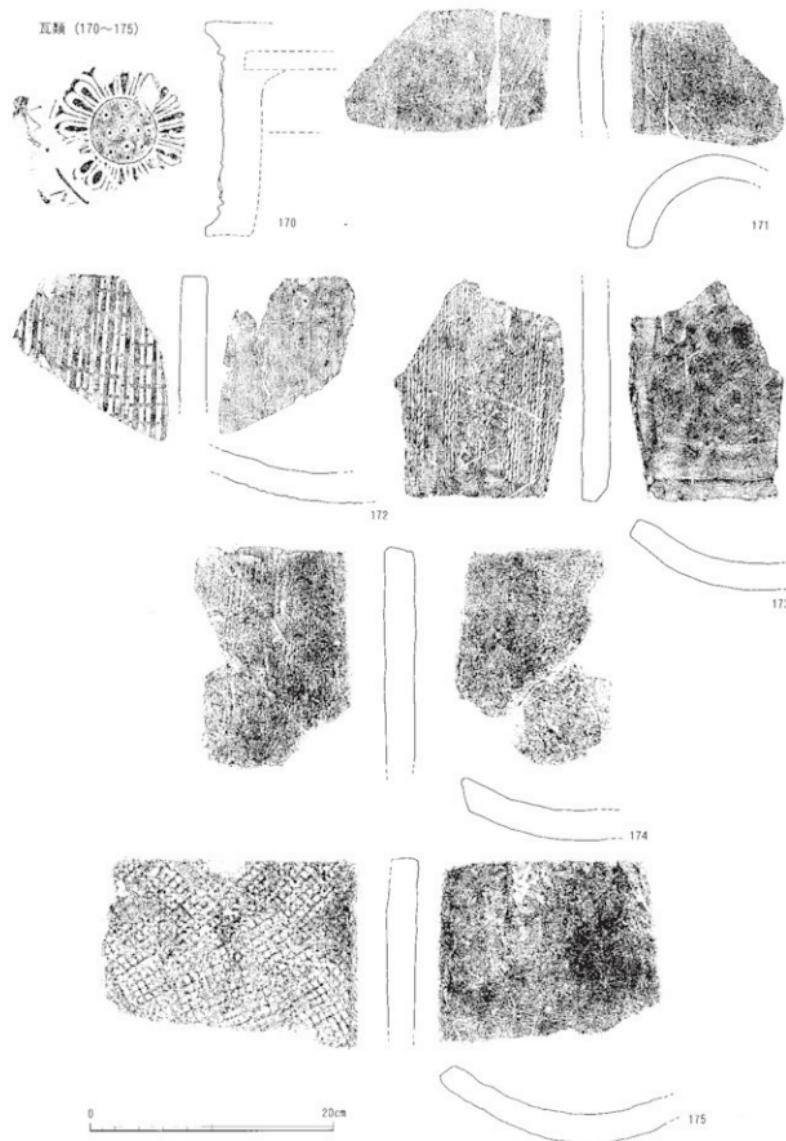
ピット (147~155)



遺構外 (156~169)



第34図 南地区出土遺物実測図 (8) (1 : 4)



第35図 南地区出土遺物実測図 (9) (1 : 4)

番号	実測番号	種・目	目録など	グリッド	通路・層番号	法面(cm)	調査・堆積の特徴	地主	色 調	堆存度	特記事項	
1	5002	石器	石器	G 1.7	S K 4.8.9	(高)1.58 (幅)1.29	サスカイト	-	-	一部欠損	(残量) 1.0 g	
2	5002	石器	石器	G 2.9		(高)1.58 (幅)1.29	サスカイト	-	-	一部欠損	(残量) 0.9 g	
3	5001	石器	石器	-	表土	(高)1.53 (幅)1.25	サスカイト	-	-	一部欠損	(残量) 3.7 g	
4	5001	石器	石器	G 1.5	S K 5.1.7	(高)1.53 (幅)1.16	サスカイト	-	-	残存	(重) 19.0 g	
5	5402	石器	スクレイバー	L 2.9	包合層	(高)1.17 (幅)1.42 (厚)1.16	サスカイト	-	-	一部欠損	(残量) 30.6 g	
6	5401	石器	石器	F 1.8	包合層	(高)0.46 (幅)0.46 (厚)0.40	サスカイト	-	-	一部欠損	(残量) 21.4 g	
7	300	石器	輪郭削 片状石器	G 2.2	S K 4.7.2	(高)2.28 (幅)2.25 (厚)0.50	緑色基底岩	-	-	残存		
8	2003	石器	磨削石器	-	S H 4.5.4	(高)0.12 (幅)0.12	緑色基底岩	-	-	堆存	全体に剥離	
9	2104	石器	同上	C 1.2	S D 5.1.1	(高)0.69 (幅)0.39	研磨少ない 先端部に叩き痕跡有り	-	-	-	(重) 31.0 g 花崗岩	
10	3802	石器	磨石	D 9	包合層	(高)0.31 (幅)0.31 (厚)0.48	熱を受けている	-	-	-	熱の石多く角む火成岩	
11	5204	石器	同上	C 1.2	S D 4.9.7	(高)0.20 (幅)0.20	泥岩	-	-	堆存		
12	1703	石器	石器	D 1.8	S H 4.6.7 丙 P 1.7.8	(高)0.11 (幅)0.12 (厚)0.13	-	-	-	約1/2		
13	3102	石器	石器	G 1.8	P 1.1.3	(高)0.11 (幅)0.12 (厚)0.12	全面被覆層、砂岩	-	-	堆存		
14	1703	石器	石器	C 1.9	S H 4.6.7	(高)0.15 (幅)0.20 (厚)0.18	表面有り、赤色斜面付着 石出か砕石に転用	-	-	-	砂岩	
15	3801	石器	石器	D 8.9	包合層	(高)0.31 (幅)0.31 (厚)0.55	-	-	-	-		
16	4201	構文土器 (焼成)	深窓	G 2.7	S K 4.9.2	(D) 0.96 (W) 0.25 (H) 0.13	外：二段鉛垂れ・突起(目口)・ケツリ 内：ナメ・コナメ	やや粗	灰白(黄褐・浅黄褐)	口縁：約1/2 内部：スス付着、内面に炭化物付着、瓦礫様		
17	3501	構文土器 (焼成)	深窓	G 2.6	P 1.1.2	(D) -	外：複数マニ・ズボ付着 内：ナメ・コナメ	粗	灰白(暗) 内：口縁	口縁：小穴 外面スス付着		
18	3701	学生土器 (前縁)	壺	I 2.8	包合層	(高)0.55	外：波立文(△単位濃度) 内：ナメ	粗	波立文・焼成 内：口縁	-	砂岩	
19	4801	学生土器 (焼成)	壺	F 2.3	S K 4.9.2	(D) -	外：複数マニ・ハケメ・丸孔・瓦キ 内：三分割	やや粗	外：口縁 内：口縁	口縁：約1/2		
20	3501	学生土器 (焼成)	壺	L 2.6	S Z 4.5.0	(D) 0.99	外：ナメ・ヘラ幅吹焼 内：ナメ・瓦キ	やや粗	外：明赤褐 内：口縁	口縁：約1/2		
21	5001	学生土器 (焼成)	壺	E 1.8	S K 4.9.5	(D) 0.94	外：ナメ・ヘラ幅吹焼 内：ナメ	粗	内：口縁	-		
22	3401	学生土器 (焼成)	壺	I 1.9	P 1.1.1	(D) -	外：牛首耳・口縁 内：口縁不規則	粗	明赤褐	-		
23	2802	学生土器 (焼成)	壺	E 1.7	S K 4.8.1	(D) 0.52	外：ヘラ幅吹焼 内：ナメ・コナメ	粗	明赤褐	口縁：約1/2		
24	3903	土器類	壺	G 2.3	S K 1.1.2	(D) 2.1	外：ナメ	やや粗	粗	明赤褐	-	既成窓穿孔
25	4802	学生土器 (焼成)	壺(側)	K 3.0	S K 2.1.2	(D) -	外：ナメ・口縁 内：ナメ	粗	外：口縁 内：口縁	中央部：約1/2 底部に穿孔(既成)		
26	901	学生土器 (焼成)	鉢	K 3.0	S K 3.3.2	(D) 0.50	外：鉢形・突起 内：口縁	粗	外：口縁 内：口縁	口縁：約1/2	扁化大、突起底部不明	
27	3502	学生土器 (焼成)	壺	K 2.9	S D 5.3.9	(D) 0.40	外：ハケメ・コナメ	中や粗	外：口縁 内：明赤褐	口縁：約1/2	外面スス付着	
28	803	学生土器 (焼成)	壺	N 3.1	溝縫突出	(D) 0.50	外：口縫部に剥り目文・棘部にハラ幅吹 内：口縫不規則	粗	外：口縫・口縫 内：口縫	口縫：約1/2	扁化大、沈縫幅不規(一本ずつ歯文)	
29	903	学生土器 (焼成)	壺	G 1.8	S K 4.7.8	(D) 0.42	外：ナメ・ハケメ・ヘラ幅吹4巻 内：ナメ	粗	外：口縫・口縫 内：口縫	口縫部分	扁化大	
30	3701	学生土器 (焼成)	壺	C 1.5	包合層	(D) -	外：ナメ・ハケメ・口縫部に剥り目文 内：口縫ナメ	やや粗	外：口縫・口縫 内：明赤褐	口縫部分		
31	801	学生土器 (焼成)	鉢	G 2.6	S K 5.3.6	(D) -	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・直縫 内：ナメ・コナメ	粗	外：口縫・口縫 内：口縫	口縫部分	扁化大	
32	4601	学生土器 (焼成)	壺	E 1.6	S K 4.9.9	(D) 0.54	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・棘部に 半周凹文 内：ナメ・コナメ	粗	外：口縫・口縫 内：口縫	口縫：約1/2 底部：約1/2	外面スス付着	
33	1402	学生土器 (焼成)	壺	H 1.7	S K 4.7.8 丙 P 1.1.2	(D) -	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・棘部に 半周凹文 内：ナメ・コナメ	粗	外：口縫・口縫 内：口縫	-		
34	2303	学生土器 (焼成)	壺	I 2.5	S K 4.8.3	(D) 0.51	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・棘部に 半周凹文 内：口縫ナメ	中や粗	粗	口縫：約1/2	外面スス付着	
35	2701	学生土器 (焼成)	壺	F 1.6	P 1.1.5 丙 P 1.1.7	(D) 0.30 (H) 0.48	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・棘部に 半周凹文 内：口縫ナメ	粗	粗・縦縫	口縫：約1/2 底部：約1/2	外面スス付着、内面剥離	
36	1403	学生土器 (焼成)	壺	I 1.9	S K 4.9.3 第1面包合層	(D) -	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・棘部に 半周凹文 内：口縫ナメ	粗	粗・縦	-		
37	209	学生土器 (焼成)	壺	F 2.5	S K 4.9.3 A-1	(D) 0.66	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・棘部に 半周凹文 内：ナメ・コナメ	やや粗	口縫：約1/2	外面スス付着		
38	1201	学生土器 (焼成)	壺	H 1.7	S K 4.7.8 P 1.1.1	(D) 0.58	外：ハケメ・口縫部に剥り目文・棘部に 半周凹文 内：ナメ・コナメ	粗	粗・灰	口縫：約1/2	外面スス付着、内面剥離	
39	3601	学生土器	壺	K 2.9	S D 5.3.9	(D) 0.64	外：ナメ・ハケメ・オワエ・ナメ	やや粗	外：口縫・口縫 内：口縫	口縫：既成 底部：既存	外面が黒変	
40	3501	学生土器 (焼成)	壺	F 2.5	S K 4.9.3 B-1	(D) 0.58	外：ハケメ・口縫(既成) 内：オワエ・ナメ	やや粗	粗	既成・既存		

第6表 第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(1)

番号	実測面番号	種・属	岩層など	グリッド	座標・層名等	法面(cm)	調査・採集の特徴	地主	色 調	性質度	特記事項
41	2202	寄生土壌	類	M 3.0	第2面丘山腹	(高)6.8	外：ナデ→横ナデ→ナデ 内：ナデ	やや暗	内：褐 外：灰褐色	荒原：充存	瓦礫成因堆丸、風化礫層
42	1002	寄生土壌	類	K 2.8	S H 4.5.4	(□)12.0	外：横ナデ→利口文→横縞模様文(無筋) 内：横ナデ→利口文→口縞模様文	粗	内：灰 外：灰	口縞：充存	
43	3301	寄生土壌	類	K 2.8	S H 4.5.4 2面 1	(□)19.4	外：横ナデ→三万キ 内：横ナデ	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：充存	
44	1001	寄生土壌	類	K 2.8	S H 4.5.4	(高)18.4	外：ナデ→ハケヌ 内：オサエ→ナデ	やや暗	浅黄緑	休耕：4/12	外表面付帯(直済使用)
45	1101	寄生土壌	類	L 2.8	S H 4.5.4	(高)19.7	外：横縞模様 内：横ナデ→押引削刃→キザニ→横縞模様 外：ハクメ→ヨコナデ→利口文 内：ハクメ→ナデ	粗	内：褐 外：灰	荒原：2/12	内表面に風化丸、調査不規則 瓦礫透かし孔が2箇所認められる
46	2001	寄生土壌	類	L 2.8	S H 4.5.4	(□)14.8	外：横ナデ→押引削刃→キザニ→横縞模様 外：ハクメ→ヨコナデ→ヨコナデ	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：3/12	外表面付帯(直済使用)
47	1102	寄生土壌	類	K 2.8	S H 4.5.4	(□)15.6	外：ハクメ→ヨコナデ→利口文 内：ハクメ→ナデ	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：3/12	外表面付帯(直済使用)
48	1103	寄生土壌	類	L 2.8	S H 4.5.4	(□)16.4	外：ナデ→ヨコゴ 内：ナデ→ハクメ→ヨコナデ	粗	内：灰 外：灰	口縞：3/12	外表面付帯
49	3304	寄生土壌	台付根	K 2.8	S H 4.5.4	(駆出)7.0	外：ナデ 内：ナデ	粗	内：灰 外：灰	荒原：充存	内表面に風化丸、調査不規則
50	3305	寄生土壌	ミニチュア 鉢	L 2.8	S H 4.5.4	(駆出)3.2 (面)3.2 (底)2.0	外：オサエ→ナデ 内：オサエ→ナデ	粗	内：灰 外：灰	荒原：充存	
51	1504	寄生土壌	類	F 2.6	S H 4.5.1	(駆出)4.1	外：横縞模様文 内：ナデ	やや暗	褐	樹上部充存	樹上部直済文跡有り
52	4006	土頭面	類	F 2.6	S H 4.5.1 壁面風	(面)6.9	外：風化により横割不規則 内：ナデ	粗	内：灰 外：灰	口縞：5/12	
53	3403	寄生土壌	類	G 2.8	S H 4.5.7 (S H 4.0水没面)	(駆出)2.8	外：横縞模様2単位、利口文2単位、4 面斜め縞模様、横縞模様、利口文 内：ナデ→ナデ→ナデ	やや暗	内：灰 外：灰	樹冠：充存	
54	3404	寄生土壌	類	F 2.8	S H 4.5.7 (S H 4.0水没面)	(□)18.9	外：ハクメ→ヨコナデ 内：オサエ→ナデ→ヨコナデ	やや暗	外：黄 内：灰 外：灰	口縞：1/12	
55	4001	寄生土壌	類	D 2.0	S H 4.6.6	(□)13.3	外：調査不規則 内：横ナデ→ハクメ	やや暗	外：褐 内：灰 外：灰	口縞：5/12	風化丸のため調査不規則
56	1501	寄生土壌	類	E 1.9	S H 4.6.6	(駆出)10.9 (面)10.9 (底)5.5	外：ハクメ→ナデ→ヨコナデ 内：ハクメ→工芸ナデ→ヨコナデ	やや暗	内：灰 外：黄 内：黄 外：黄	口縞：1/12 内：灰 外：黄 内：黄 外：黄	瓦礫透かし孔、外表面 風化丸透かし孔、外表面
57	4003	寄生土壌	類	E 1.9	S H 4.6.6	(高)5.5	外：風化丸のため調査不規則 内：風化丸のため調査不規則	粗	灰	荒原：充存	
58	1901	寄生土壌	類	D 1.9	S H 4.6.6	(駆出)2.1	外：横縞模様、波状文、横縞突起間に竹 葉状模様 内：ナデ	粗	暗褐色	樹冠：2/12	
59	5002	寄生土壌	類	D 1.9	S H 4.6.6	(駆出)4.0	外：ナデ→三万キ→横縞模様(脚) 内：利口文→横縞模様、ナデ→ナデ→ナデ	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：2/12 内：灰 外：灰	
60	1902	寄生土壌	類	D 1.9	S H 4.6.6	(駆出)4.2	外：ハクメ→ミカキ→横縞模様3単位 内：ナメ	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：2/12 内：灰 外：灰	
61	4005	寄生土壌	類	E 1.9	S H 4.6.6	(□)13.9	外：風化により横割不規則 内：風化により横割不規則	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：3/12	
62	1802	寄生土壌	類	D 1.9	S H 4.6.6	(高)5.3	外：ハクメ→ヨコナデ 内：ナデ→ハクメ	やや暗	内：灰 外：灰	荒原：6/12	
63	1302	寄生土壌	類	I 2.5	S H 4.6.6 P 1.5.1	(□)9.0	外：ハクメ→ヨコナデ→ヨコナデ 内：ハクメ→ヨコナデ→ヨコナデ	粗	褐	口縞：3/12	外表面付帯、柱状透かし孔り理土内 外の同じ系統
64	2504	寄生土壌	類	I 2.5	S H 4.6.9	(駆出)3.2	外：カラマツ子文→4万孔かし 内：ナメ	やや暗	内：灰 外：灰	樹上部：充存	
65	1502	寄生土壌	類	I 2.4	S H 4.6.9 P 1.5.1	(□)17.4	外：ヨコ縞模様に利口文 内：調査不規則	粗	内：灰 外：灰	口縞：3/12 部分的露頭露意しく、外表面 大穴付帯	
66	1803	寄生土壌	台付根	I 2.5	S H 4.6.9	(駆出)6.0	外：ハクメ→ナデ 内：ナデ→ハクメ	やや暗	内：灰 外：灰	荒原：小片 内：灰 外：灰	
67	1801	寄生土壌	類	G 1.9	S H 4.7.5 壁面風	(面)9.0 (壁)18.1 (底)4.6	外：ハクメ→ヨコナデ→サンプブ 内：ナデ→ハクメ→ヨコナデ	粗	内：灰 外：灰	口縞：6/12 内：灰 外：灰	外表面付帯、表面的露意しい、 糞丸大、サンプブ六面に4箇所露
68	1304	寄生土壌	類	H 1.9	S H 4.7.5 水没風 (S H 4.7.5)	(面)5.6	外：ナデ→ミカキ 内：オサエ→ナデ	やや暗	浅黄緑、斑オリーブ	荒原：6/12	
69	1505	寄生土壌	類	G 2.0	S H 4.7.5	(面)5.5	外：ナデ→ミカキ？ 内：ナメ	粗	褐 内：褐	樹冠：6/12	外表面風
70	1503	寄生土壌	類	H 2.0	S H 4.7.5 P 1.5.3	(面)5.5	外：ナデ→ハクメ→三万キ？ 内：ナデ→ナデ	やや暗	内：灰 外：灰	荒原：充存	
71	1401	寄生土壌	類	-	S H 4.7.5 P 1.5.6	(面)4.5	外：ハクメ→ヨコナデ→ナデ 内：ハクメ	やや暗	内：灰 外：灰	内：灰 外：灰	内：灰 外：灰
72	601	寄生土壌	類	G 1.9	S H 4.7.5 (駆出)3.9	外：三万キ→横縞→横縞模様文(脚) 内：ナメ→ナメ	やや暗	浅黄緑	樹冠：6/12	内表面風、接合面にハケメ	
73	4301	寄生土壌	把付根	G 2.0	S H 4.7.5 P 1.5.3	(□)46.0 (面)24.0	外：ハクメ→ヨコナデ→三万キ？ 内：ナデ→ナデ→ヨコナデ 外：横縞模様文、ナメ、横縞模様文、竹 葉状模様文、ナメ、横縞模様文、ナメ 内：オサエ→ナデ→ヨコナデ 外：調査不規則	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：6/12 内：灰 外：灰	「ナ」字、「W」字型の横縞文はS H 4.1
74	1701	寄生土壌	類	G 1.6	S H 4.8.5 東アゼ	(□)12.9 (面)24.0	外：ナデ→横ナデ→調査不規則 内：ナデ→ナデ→ヨコナデ 外：調査不規則	やや暗	褐	口縞：6/12 内：灰 外：灰	
75	5001	寄生土壌	類	G 1.6	S H 4.8.5 (S K 5.0.5)	(面)6.5	外：ナデ→横ナデ→調査不規則 内：ナデ→ナデ→ヨコナデ 外：調査不規則	やや暗	褐	口縞：6/12 内：灰 外：灰	
76	2504	寄生土壌	類	G 1.6	S H 4.8.5 (S K 5.0.5)	(面)7.4 (面)2.8	外：ハクメ→三万キ？→横縞模様文3単 位、利口文→利口文→利口文 内：利口文→利口文→利口文	やや暗	内：灰 外：灰	口縞：6/12 内：灰 外：灰	
77	1303	寄生土壌	台付根	G 1.6	S H 4.8.5	(面)8.7	外：ハクメ→ナデ 内：ナメ(体別)、工具ナデ(脚別)	やや暗	内：灰 外：灰	荒原：充存	外表面観察？
78	3102	寄生土壌	類	G 1.6	S H 4.8.5 (S K 5.0.5)	(面)6.3	外：ナデ	やや暗	褐	荒原：充存	
79	1903	寄生土壌	類	N 3.0	S H 4.5.3	(駆出)7.8	外：横縞模様文3単位、利口文 内：ナデ	やや暗	内：灰 外：灰	樹上部充存	
80	3601	寄生土壌	類	N 3.1	S H 4.5.3	(駆出)3.4	外：肥料のため調査不規則 内：ナデ	やや暗	内：褐 外：灰	口縞：6/12	

第7表 第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(2)

番号	実測面積	種・固有種	目録など	グリッド	通路・層名等	法面(m)	調整・注釈の特徴	地主	色調	既存度	特記事項
81	1802	野生土蘿	苔	N 3.1	S H 4.5.3	(台)7.3	外：ヨコダ 内：ナデ（体認）、ヨコダ（脚付）	やや暗	に(1)黄緑	台部、6'12	
82	1802	野生土蘿	苔	M 3.0	S H 5.3.1	(口)13.6	外：葉脈して根出脈不規律 内：八クタ、茎葉して調整不規律	やや粗	に(1)暗 に(1)黄	口縁、4'12	
83	1802	野生土蘿	苔	M 2.9	S H 5.3.1	(底)14.6	外：三叶角アツミ？ 帯状根出脈5重位→4方透かし 内：ナデ、調整不規律	粗	明黄緑	底部、3'12	四カスカシ(1cm)、面みり
84	3601	野生土蘿	苔	M 2.9	S H 5.3.1	(脚付)4.3	外：三叶角アツミ 帯状根出脈4重位→4方透かし 内：ナデ	粗	に(1)暗 に(1)黄	脚付、底部、6'12	脚付、底部、6'12
85	1003	野生土蘿	苔	M 2.9	S H 5.3.1	(脚)7.2	外：3方透かし 内：ナデ	やや暗	黄緑	底部、6'12	風化大、3方透かし
86	3303	野生土蘿	苔	N 2.9	S H 5.3.1	(底)7.8	外：ハクメ→ナデ 内：ハクメ	粗	に(1)黄緑・黄灰	底部、4'12	
87	1804	野生土蘿	苔	M 2.9	S H 5.3.1	(底)7.6	外：ハクメ→ナデ 内：ハクメ	粗	外：暗 内：暗	底部、6'12	
88	3304	野生土蘿	苔	N 2.9	S H 5.3.1	(底)5.2	外：ナデ→ハクメ→ナデ 内：ナデ	やや粗	淡黄緑	底部、6'12	
89	2001	野生土蘿	苔	N 2.9	S H 5.3.1	(口)11.7 N 6.1	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ナデ→ヨコナデ	やや粗	に(1)黄緑・黄灰 内：黄灰	口縁、10'12	外表面付着
90	3302	野生土蘿	苔	N 2.9	S H 5.3.1	(口)17.0	外：ハクメ（脚部弱）	粗	淡黄緑	口縁、小片	外表面付着
91	2302	野生土蘿	苔	C 1.2	S D 4.9.7	(口)6.0 N 6.1	外：三叶角、茎葉しての調整不規律 内：葉出葉しての調整不規律	やや粗	外：暗 内：暗	葉出葉	
92	2303	野生土蘿	苔	C 1.2	S D 4.9.7	(脚付)10.4 (脚付)10.5	外：葉出葉→ヨコナデ(1cm)、ハクメ、 内：ハクメ→ヨコナデ(1cm)、透かし、 内：ヨコナデ(1cm)、(脚部)、(1cm)、 内：ヨコナデ(1cm)、(脚部)、(1cm)	やや粗	外：暗 内：黄灰	脚付、3'12 底部、3'12	透かし凡は6'12所、不規則
93	3604	野生土蘿	苔	F 1.2	S D 4.9.7	(口)7.6	外：ヨコダニミガキ 内：ヨコダニミガキ	粗	外：暗 内：暗灰	底部、4'12	
94	4401	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	(口)9.6 土蘿 2	外：ハクメ（脚部のため調整不規律） 内：ハクメ(2cm)	やや暗	に(1)黄緑・淡黄	底部、6'12	
95	1301	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	土蘿 3	外：ハクメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	粗	口縁	4'12	内部の難
96	2801	野生土蘿	苔	J 2.7	S D 4.5.6	土蘿 1	外：ハクメ→ミガキ→ヨコナデ、斜葉尖 内：ハクメ→ミガキ	やや粗	淡黄緑、黒	底部、6'12	底部、6'12
97	4402	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	土蘿 6	外：ハクメ 内：ハクメ	やや粗	外：淡黄緑 内：暗灰	底部、6'12	底部、6'12
98	4003	野生土蘿	苔	J 2.8	S D 4.5.6	(口)15.7	外：ハクメ→ミガキ→3方透かし、口縁 内：2脚出葉内側透かし	やや暗	明黄緑、に(1)黄緑	口縁、9'12	沙文は2つ1組が4方向
99	4403	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	土蘿 4	外：ハクメ→ミガキ→葉出葉透かし単位 内：ハクメ→ミガキ	やや暗	に(1)暗 に(1)黄	底部、6'12	脚部外表面色料？
100	4005	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	土蘿 5	外：ハクメ 内：三叶角	やや暗	に(1)黄 に(1)黄	口縁	4'12
101	5002	野生土蘿	苔	K 2.5	S D 4.5.6	(脚付)3.4	外：ナデ→葉出葉透かし単位・別目又は 内：ナデ→葉出葉透かし	やや暗	淡黄緑	脚付、底部、6'12	
102	4504	野生土蘿	苔	K 2.5	S D 4.5.6	(脚付)4.0	外：三叶角 内：ナデ	やや暗	に(1)黄 に(1)黄	脚付、底部、6'12	3方透かし
103	402	野生土蘿	苔	J 2.4	S D 4.5.6	(脚付)4.3	外：ナデ→葉出葉透かし4単位・別目又は 内：ハクメ→3方透かし 内：ハクメ(1cm)	やや暗	淡黄緑	脚付、底部、6'12	3方透かし
104	4502	野生土蘿	苔	J 2.4	S D 4.5.6	(脚)4.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや暗	に(1)黄 に(1)黄	底部、6'12	外表面付着
105	5003	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	(脚)11.2	外：ハクメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ→ミガキ	やや暗	に(1)黄	-	外表面付着
106	1603	野生土蘿	苔	J 2.4	S D 4.5.6	土蘿 12	外：ハクメ→ヨコナデ→ミガキ→口縁部 内：ミガキ 内：ハクメ→ヨコナデ	やや暗	淡黄緑 に(1)黄 に(1)黄	口縁、9'12 底部、6'12	沙文は2付、内部に花崗岩、外部は花崗岩 沙文は全面せず、底部は花崗岩の可能性あり
107	401	野生土蘿	苔	J 2.7	S D 4.5.6	(口) 17.4	外：ハクメ→ヨコナデ 内：ナデ→ナデ→ハクメ→ヨコナデ	やや暗	口縁 淡黄緑	口縁、9'12 底部、6'12	外表面付着
108	4001	野生土蘿	苔	J 2.7	S D 4.5.6	(脚)15.0	外：ハクメ→ヨコナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ハクメ→ヨコナデ	やや暗	暗黄 に(1)黄	底部、6'12	底部上部花崗岩付着
109	4404	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	土蘿 4	外：ナデ→ケヌリ 内：ナデ	粗	底部	底部、6'12	底部一部葉落葉付着、棘の可能性もあり
110	403	野生土蘿	苔	J 2.6	S D 4.5.6	(高)4.5-5.0	外：ナデ→ハクメ 内：ナデ→ハクメ	やや暗	外：暗 内：暗	底部、6'12	外表面付着、内部に花崗岩、外部は花崗岩 沙文は全面せず、底部は花崗岩の可能性あり
111	501	野生土蘿	苔	K 2.5	S D 4.5.6	(高)4.0	外：ナデ→オガエ→ハクメ 内：ナデ→オガエ→ハクメ	やや暗	外：暗 内：暗	底部、6'12	外表面付着
112	4201	野生土蘿	苔	E 2.2	S K 4.8.7	(口)12.3	外：ハクメ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	やや暗	口縁	4'12	
113	3302	野生土蘿	苔	E 2.2	S K 4.8.7	(口)13.4	外：ヨコダニ→ハクメ 内：ナデ→ヨコナデ	やや暗	に(1)暗	口縁、3'12	
114	3303	野生土蘿	苔	E 2.2	S K 4.8.7	(底)5.6	外：ナデ 内：ナデ	やや暗	外：に(1)暗 内：淡黄緑	底部、6'12	
115	3305	野生土蘿	苔	E 2.2	S K 4.8.7	(口)24.6	外：根出葉立舌形(屬)・屬立舌形(屬) 内：属立舌形(屬)・属立舌形(屬)	やや暗	に(1)暗	口縁、3'12	
116	3304	野生土蘿	苔	E 2.2	S K 4.8.7	(口)2.0	外：能力弱の半 内：能力弱の半	やや暗	外：に(1)暗 内：暗	口縁、3'12	
117	301	野生土蘿	小形類	G 2.8	S K 4.6.2	(底)3.0-3.4	外：オサナ→ナデ 内：ナデ	やや暗	淡黄、に(1)黄	底部、6'12	
118	4004	野生土蘿	苔	G 2.8	S K 4.6.2	(底)5.0	外：風化木のため調整不規律 内：ナデ	粗	外：黄 内：暗	底部、6'12	底部、健保用
119	2303	野生土蘿	苔	G 1.9	S K 4.7.7	(底)7.4	外：ハクメ→ヨコナデ 内：ナデ	やや暗	外：暗 内：明黄緑	底部、3'12	風化により不規律
120	704	野生土蘿	苔	G 1.8	S K 4.7.8	(底)7.9	外：ナデ 内：ナデ	粗	外：に(1)暗 内：黄灰	底部、5'12	

第8表 第8次調査区（南地区）出土遺物観察表（3）

番号	実測番号	種・属	器種など	グリッド	直轄・監視番号	法面(cm)	調査・採集の特徴	地土	色 調	性質度	特記事項	
121	702	骨生土器	壺	E 1.7	S K 4 8.1	(高)6.3	外:ナデ 内:ナデ	粗	に(5.1)黄褐	瓦部: 3/12		
122	806	土器園	土罐	E 1.7	S K 4 8.1	(径)3.4	球状 円錐状具による孔	やや粗	褐	-	(重) 38.64g	
123	2703	骨生土器	瓶	F 2.2	S K 4 8.6	(高)4.2	外:ナデ(カズリ)・穿孔 内:ナデ(カズリ)	粗	灰白・に(5.1)黄褐	瓦部: 実存 外面スリ付裏、底成形穿孔		
124	805	土器園	土罐	K 3.0	S K 5 3.2	(径)3.8 (高)4.0	橢円形容 円錐状具による孔	粗	に(5.1)黄褐	ほぼ実存	(重) 71.36g	
125	705	骨生土器	壺	K 3.0	S K 5 3.2	(高)5.5	外:ナデ(カズリ)・穿孔 内:ナデ(カズリ)	やや粗	内:に(5.1)黄褐色 外:灰白・に(5.1)黄褐	瓦部: 6/12 一部露風あり		
126	2205	骨生土器	瓶	K 2.9	S K 5 3.2	(高)3.8	外:三方窓・三脚底盤(穿孔) 単位:透かし丸三方窓	やや粗	に(5.1)黄褐	脚部: 5/12 三カスカリ		
127	302	骨生土器	瓶	L 2.9 ~ 3.0	S K 5 3.2	(高)3.9	外:ナデ・複縦横縫3単位 内:シボリナデ	粗	に(5.1)黄褐	脚柱: 実存 底化: カスカリテ		
128	706	骨生土器	瓶	H 2.7	S K 5 3.3	(径)14.0	外:ヨコナデ・斜凹文 内:ヨコナデ	やや粗	外:灰褐色 内:黄褐色	口縁: 2/12	外面スリ付裏	
129	701	骨生土器	壺	H 2.7	S K 5 3.3	(高)5.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ・オサエ	粗	に(5.1)褐	瓦部: 9/12		
130	703	骨生土器	壺	H 2.7	S K 5 3.3	(高)7.4	外:ナデ 内:ナデ	粗	外: 暗・赤褐色 内: に(5.1)黄褐色	瓦部: 6/12 内面露風(底化)		
131	2404	土製品	焼成土製品	E 1.3	S K 5 4.0	(径)6.8 (高)2.0	端は崩れ付け、穿孔1箇所ハメ形あり	やや粗	外: 粗 内: 粗	外縁部: 8/12		
132	2201	骨生土器	壺	L 2.9	S D 5 4.2	(径)11.4	外: ナメ・厚泥	やや粗	外: 黄褐色 内: 黄褐色	口縁: ほぼ完存 口縁端		
133	2102	骨生土器	瓶	L 2.9	S D 5 4.2	(径)14.8	外: ナメ(ス)・ヨコナデ	粗	底面	口縁: 2/12	内面露風(底化)、外面黒褐色有り	
134	2101	骨生土器	瓶	L 2.9	S D 5 4.2	(径)15.3	外: ハメナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	やや粗	外: 暗・深黄褐色 内: 暗	口縁: 4/12	外面スリ付裏、内面黒褐色化(底)	
135	3404	骨生土器	壺	I 1.9	P 1.1.1	(高)9.0	外: ナデ・三刀万 内: ナデ	粗	に(5.1)褐 内: 暗	瓦部: 4/12 並み有り		
136	3305	骨生土器	小形瓶	P 1.9	P 1.1.1	(高)7.3 (高)4.0	外: オサエ・ナデ 内: 亂泥	やや粗	外: 暗 内: に(5.1)褐	瓦部: 実存		
137	304	土器園	土罐	F 1.7	瓦当類	(高)4.9	球状 円錐状具による孔	粗	に(5.1)黄褐	瓦存	(重) 40.66g	
138	4002	骨生土器	壺	K 2.8	S D 4 7.9	(高)11.5 (主縁底孔)	外: 傾斜斜文4単位・横縫縫維3単位 内: ヨコナデ・オサエ	やや粗	外: 暗 内: 小(5.1)黄褐 内: 工具鉗	脚柱: 4/12 内面スリ付裏、S K 5 1.3 頸部から		
139	4002	骨生土器	瓶	J 2.3	S D 4 5.2	(径)6.9	外: ナメナデ・オサエ	粗	に(5.1)黄褐	瓦部: 実存		
140	402	骨生土器	壺	M 3.0	第2面白色陶	(高)8.4	外: ナデ 内: ナデ	粗	瓦部: はぼ完存 内: 暗	瓦部黒度		
141	101	土器園	土罐	F 1.4	S D 4 9.7 上層	(高)14.4 (高)28.8	脚柱-斜面-底面-底部斜面-側面斜面-側面直面 外: ハメナデ・オサエ	やや粗	外: 暗 内: に(5.1)褐 内: 工具鉗	口縁: 10/12 底部: 6/12 中実		
142	502	漆器園	絹	B 1.2	S K 5 9.7 上層	(高)5.2 (高)18.0	外: ハメナデ・ナデ 内: ハメナデ	やや粗	瓦	口縁: 2/12 底部: 2/12		
143	2503	漆器園	絹A	F 2.2	S K 5 9.4 内 P 1.2	(高)3.0 (高)1.6	外: ハメナデ 内: ハメナデ	やや粗	瓦	口縁: 2/12 底部: 2/12	底付け、調整不明確	
144	2906	漆器園	絹B	F 2.2	S K 5 9.4 内 P 1.2	(高)12.1 (高)9.0	外: ハメナデ・脚柱直面 内: ナデ	やや粗	外: 暗 内: に(5.1)褐	口縁: 5/12 底部: 4/12 底付け		
145	3001	土器園	瓶	F 2.2	S K 5 0.4	(径)20.3	外: ハメナデ・ヨコナデ 内: ヨコナデ	やや粗	瓦	口縁: 3/12		
146	2502	土器園	瓶	I 9	S H 4 7.4	(径)24.8	外: ヨコナデ 内: ナデ	やや粗	瓦	口縁: 2/12 底部: 2/12	脚柱のため調整不正確	
147	2405	土器園	絹A	F 2.4	P 1.1.1	(径)14.1 (高)3.6	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	やや粗	瓦	口縁: 4/12	底度Ⅱ-2 狹径	
148	2403	土器園	絹A	C 1.5	P 1.1.1	(径)20.5 (高)3.2	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	やや粗	瓦	口縁: 1/12 底部: 1/12		
149	2402	土器園	土罐	F 2.2	P 1.1.2	(径)13.5	外: ハメナデ・脚柱直面 内: ハメナデ	やや粗	瓦	口縁: 1/12 底部: 1/12	脚柱-調整ともに底面を真似るが、手元は土罐	
150	2903	漆器園	絹	9.6	P 1.1.4	(径)16.0	外: ハメナデ 内: ハメナデ	粗	瓦 外: 暗 内: 暗	口縁: 2/12 底部: 2/12		
151	2103	土器園	土罐	H 2.2	P 1.1.1	(高)4.2 (径)3.1	橢円形容 円錐状具による孔	粗	に(5.1)褐	瓦存	(重) 30g	
152	3201	土器園	瓶	B 1.0	P 1.1.1	(径)16.0	外: ハメナデ・ヨコナデ 内: ハメナデ・ヨコナデ	やや粗	外: 暗 内: に(5.1)褐	口縁: 6/12 内面黒化物、B.C代		
153	2907	土器園	絹	D 2.2	P 1.1.1	(径)13.0	外: ハメナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗	瓦	口縁: 1/12 底部: 2/12		
154	3005	土器園	瓶	C 7	S K 5 2.2	(径)~	外: ナデ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	やや粗	瓦	口縁: 小内 B.C代		
155	2401	土器園	瓶	B 8	P 1.1.1	(径)24.1	外: ハメナデ・ヨコナデ 内: ハメナデ・ヨコナデ	やや粗	瓦	口縁: 2/12	内面化物化	
156	2901	漆器園	絹	G 2.1	第1面包詰繩	(径)2.7	外: ハメナデ・ハメナデ・ヨコナデ 内: ハメナデ	やや粗	瓦	口縁: 6/12		
157	301	漆器園	絹	F 2.3	漆構繩柱	(径)13.8 (高)3.2	外: ハメナデ・ハメナデ・ヨコナデ 内: ハメナデ	粗	瓦	口縁: 10/12 底部: 3/12	一部自然剥	
158	3904	漆器園	絹	-	瓦当類	(径)13.5 (高)2.6	外: ハメナデ・ハメナデ 内: ハメナデ	やや粗	瓦	口縁: 2/12		
159	2905	土器園	絹A	F 2.2	第1漆構底柱	(径)13.0 (高)3.2	外: ナデ・ヨコナデ 内: ヨコナデ	やや粗	瓦	口縁: 4/12	露窓Ⅱ-1段	
160	3905	漆器園	絹A	G 2.3	瓦当類	(径)18.3 (高)2.5	外: ハメナデ・ハメナデ 内: ハメナデ・ハメナデ	やや粗	瓦	口縁: 3/12		

第9表 第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(4)

番号	実測番号	種・目	目標など	グリッド	通標・層名等	法面(m)	調整・注釈の特徴	地主	色調	既存度	特記事項	
161	2501	須恵器	錐A	B 1.2	包合層	(□)21.1	外：三輪ナデ→ケズリ 内：三輪ナデ	やや暗 灰	口縁：2'12	外面に自然段		
162	5203	須恵器	そう	F 1.2	SZ 4.9.8	(台)4.4	外：三輪ナデ→圓軸ナデ→錐止形切口 内：輪付高白 門：輪付アマ	やや暗 灰・灰白	にぶい緑・灰褐	台部：一部灰		
163	5201	須恵器	錐	C 1.0	包合層	(□)21.4	外：三輪ナデ	やや暗 灰・灰白	口縁：4'12	重ね焼き痕		
164	5303	土師器	瓶	I 2.3	包合層	(□)24.0	外：ハクナメ→ヨコナデ 内：オサエナデ→ハケヌメ→ヨコナデ	やや暗 緑	口縁：2'12	奈良時代前期		
165	4202	土師器	有陶器	F 2.2	第1構造物B	(□)25.0 (株)27.5	外：ハクナメ→ヨコナデ 内：ハクナメ→ヨコナデ	やや暗 緑	にぶい黄緑・にぶい 緑	口縁：4'12 体部：3'12	E C 前期	
166	5304	土師器	有陶器	K 2.2	S D 4.5.2 構造物C	(□)26.0	外：ハクナメ→ヨコナデ 内：ハクナメ→ヨコナデ	やや暗 緑	法算理	口縁：5'12	E C 後半	
167	2902	陶器	瓶	K 2.5	S Z 4.5.0 構造物D	(高)7.8	外：ロクロナデ・輪切り・輪付高白 内：ロクロナデ・一向向ナデ	灰 灰黒	瓶部：薄青	深窓		
168	3902	陶器	壺	F 1.7	加須色砂礫土	-	外：ナデ 内：ナデ	やや暗	にぶい緑	瓶部A	深窓・底部外面スリット	
169	2904	陶器	瓶	J 2.3	包合層	(台)4.0	外：ロクロナデ・瓶輪 内：ロクロナデ・瓶輪	灰 灰	瓶底：裏窓 瓶内：灰色 裏窓：にぶい緑	萬台：4'12	沿壁	
170	3001	瓦	斜瓦	B 1.2	S D 4.9.7上層	(瓦当付) (7.7)既定	織文(草摺)→葉輪(開孔子葉)→ 中間葉子(1)	やや暗 灰	前面；法算理	-	E C 後期 片なり丁寧なづくり	
171	4101	瓦	瓦	B 9	素土瓦	-	凹面：舟口→ケズリ？ 凸面：アマ	やや暗 緑	-	-	戸戸瓦の可能性有り	
172	3301	瓦	平瓦	L 2.6	S Z 4.5.0 裏窓	-	側面：へタ目口 内：輪付アマ 外：輪付アマ→ケズリ 内：輪子目ラキ底	粗 灰	-	-	良い形格子	
173	3002	瓦	平瓦	E 2.3	第2面包合層	-	側面：アマ 内：輪付アマ→コビキ底→ヘラケズリ 外：アマ→輪目タキ底	やや暗 灰白・黄灰	-	-		
174	2401	瓦	平瓦	F 2.7	通磧棟出	-	側面：アマ 内：輪付アマ 外：厚窓窓く強度不明瞭	やや暗 緑	-	-	主筋窓	

第10表 第8次調査区(南地区)出土遺物観察表(5)

## V 北地区（丘陵斜面）の層位と遺構

ここでは、丘陵の北側斜面部の調査成果について報告する。斜面部については、舌状に伸びた尾根があり、谷を挟んで傾斜はやや緩くなる。調査前の段階では天花寺廐寺の瓦の窯跡が存在する可能性が指摘されていたが、今回の調査区部分に関しては、瓦片がわずかに出土したものの、窯跡の所在を直接的に示す遺構等は確認されなかった。なお、本報告は、記録図面・写真を基に考えられる事項を記述する。

### 1 調査区の基本層位

北側斜面の土層断面については、古墳の墳丘部を除き、図示していないが、層位は比較的単純である。腐葉土を除くと黄褐色土が堆積するが、場所により違いはあるものの、20cm~40cmの厚さである。その下には、地山である明褐色の砂礫がある。

### 2 検出した遺構

丘陵平坦部では弥生時代後期の住居址をはじめ、中世の天花寺城に関連するものなど多くの遺構が確認されたが、北斜面には古墳以外にはさほど遺構は認められなかつた。

北東斜面の尾根上で確認した2基の古墳は新発見である。天花寺丘陵には小谷古墳群が存在し、東支群の6基については第6・7次調査で調査されている。この2基は丘陵の北側に所在し、支群を異にするため、新たに小谷28・29号墳とした。この2基の古墳の立地は、傾斜のやや急な尾根に位置しており、他の尾根上などに築造に適した箇所があるにも関わらず、東支群と比較するとあまり良好とはいえない箇所に築造されている。

#### a 28号墳

墳丘 28号墳は、丘陵の北側の斜面に存在した。土層断面図によると地山ベースの基盤層に浅い約40cmほどの盛土がなされている。墳形は、一辺約8mの方墳と考えられる。

周溝 墳丘の北東には、方形にめぐる溝が検出され

ている。遺物はほとんど出土していないものの、溝が埋葬施設を中心として取り囲んでいることや、土層断面などから、この溝を古墳の周溝と捉えた。

埋葬施設 古墳のほぼ中央部で検出したもので、墓壙はかなり削平されており、原形をとどめていないが、残された平面図から復元すると、短軸約1m、長軸約2.4m程度の規模と推定され、北東の一部は調査区外である。埋葬施設は木棺直葬で、木棺痕跡は盗掘坑などにより原形をとどめていなかったが、遺物の出土状況と平面図などから短軸約0.34m、長軸約2m程度の規模と推定される。

棺内からは、鉄刀が1本出土した。元々は完形であったと推定されるが、盗掘の際に破壊されたものとみられる。墓壙内からは鉄鏃がまとまって出土している。出土位置が鉄刀よりもかなり高く、レベル差が大きいため、鉄鏃に関しては棺内ではなく、棺の埋葬後に供献されたものと捉えたい。

#### b 29号墳

29号墳は28号墳より西に3mほどさがった尾根上に位置する。調査前の写真では若干の高まりが確認できたとみられるが、表土剥ぎの段階で、調査区内にかかる墳丘はほとんど削平してしまい、周溝が残るのみになってしまった。そのため調査前の墳丘の測量も行っていない。

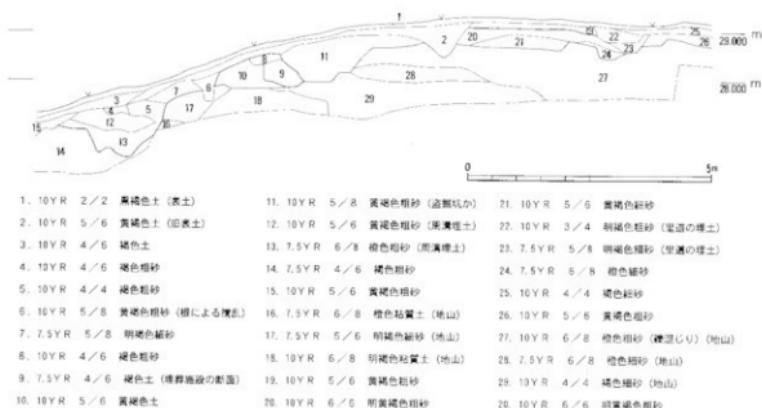
墳丘 土層断面図によれば、地山を削りだし、その上に黄褐色土の砂質土・黄褐色土・粘土ブロックを含んだ黄褐色土を水平に盛っている。盛土の厚さは約110~120cmである。墳丘の規模は径約10mの円墳である。

埋葬施設 埋葬施設の有無については、筆者らが現地で実見した際には、これよりも深いレベルで埋葬施設の断面と考えられるものを確認したのを記憶しているものの、誠に遺憾ながら埋葬施設についての詳細は明確ではなく、不明といわざるを得ないが、石棺材とみられるような石材などは確認されていないため、おそらく木棺直葬と推定される。

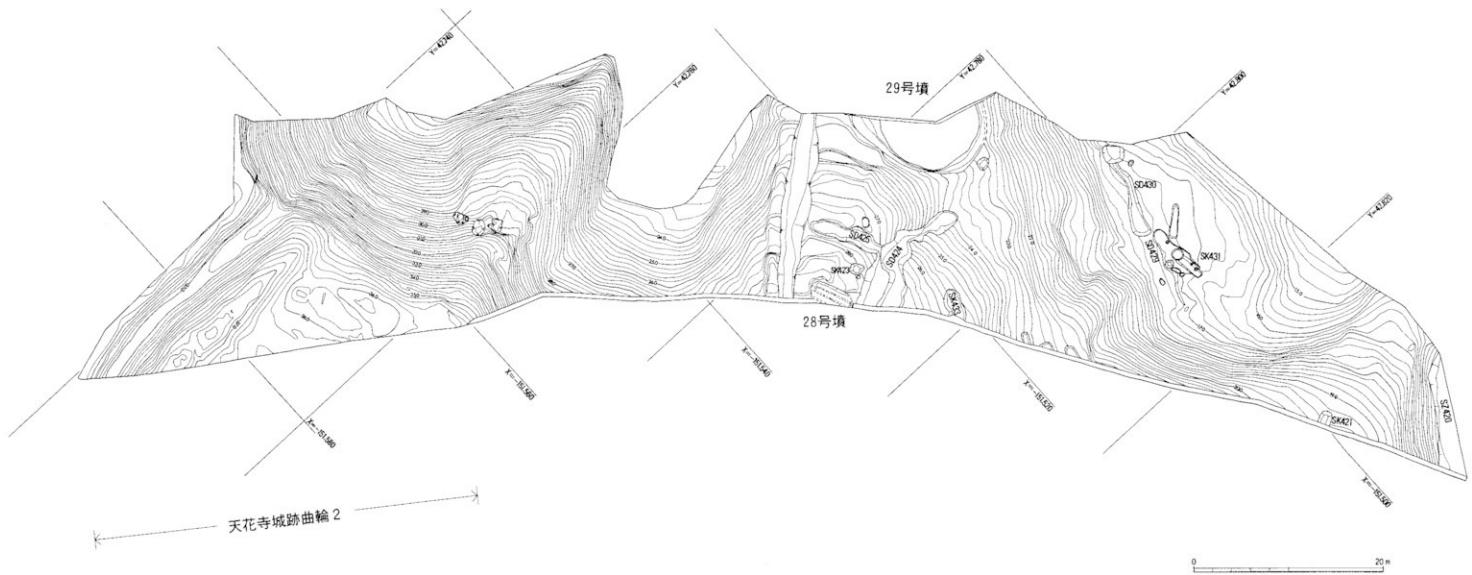
周溝 周溝は北側が削平のため不明瞭であったが、南側で幅約2m、深さは表土から約90cmである。埋



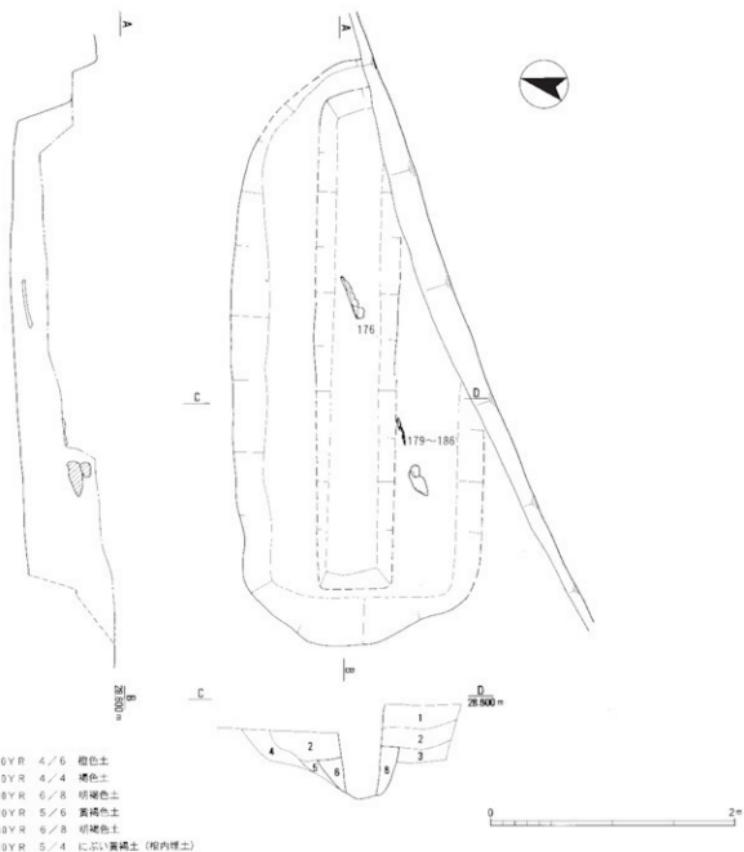
第36図 小谷28・29号墳平面図 (1 : 200)



第37図 小谷28号墳填丘土層断面図 (1 : 100)



第38図 第8次調査区（北地区）平面図（1:400）



第39図 小谷28号埴輪葬施設平面・断面図 (1 : 40)

土からは、埴輪片や土師器片が出土しているが小片のみである。周溝はきれいな円弧を描いており、埴形が円墳であることを示している。

#### c 古墳以外の遺構

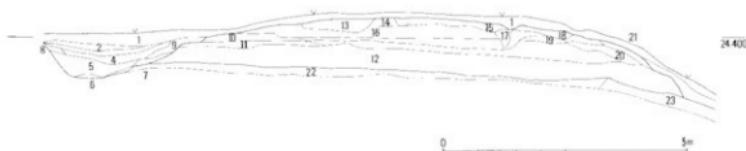
古墳以外の遺構としては土坑・溝があるが、出土遺物に乏しく、遺物も小片で時代の異なるものが混入している場合もあり、正確な遺構の時期・性格は不明のものが多い。

土坑 S K 423 調査区のT 41グリットで確認した土坑である。長さ3m以上の楕円形の土坑である。埋

土からは古代の土師器梶、鉄釘片が出土しているが、土坑墓といった性格のものではないとみられる。

溝 S D 424 28号墳の北側で確認した遺構である。遺構の一部は調査区外のため、全長は不明であるが溝である。遺物は小片のみで、時期を特定する材料に乏しく、台付梶の破片が出土しているものの、28号墳の周溝 S D 425を切るかたちで伸びてあり、詳しい時期は不明である。

また、28号墳の脇を通る里道については天花寺城との関連も想定されるが、現時点では明確ではない。



1. 10YR 2/2 黒褐色土(表土)	11. 10YR 5/8 黄褐色細砂	21. 7.5YR 5/8 明褐色細砂
2. 10YR 3/3 噴褐色紙紗	12. 10YR 6/8 前噴褐色細砂	22. 7.5YR 5/8 新褐色紙紗(地山)
3. 10YR 3/4 噴褐色紙紗	13. 10YR 3/2 黒褐色細砂	23. 7.5YR 5/6 明褐色紙紗(地山)
4. 10YR 4/4 褐色紙紗	14. 10YR 6/8 黃褐色細砂	
5. 10YR 2/3 黒褐色土(周溝埋土)	15. 10YR 4/4 褐色紙紗	
6. 10YR 4/6 褐色紙紗	16. 7.5YR 4/6 黄褐色紙紗	
7. 10YR 5/6 黄褐色紙紗	17. 7.5YR 5/6 明褐色紙紗	
8. 7.5YR 4/6 褐色紙紗	18. 10YR 2/3 黑褐色紙紗	
9. 10YR 4/6 褐色紙紗	19. 10YR 6/8 明黄褐色紙紗	
10. 10YR 5/6 黄褐色紙紗	20. 10YR 4/6 褐色紙紗	

第40図 小谷29号墳埴丘土層断面図 (1 : 100)

## VI 北地区（丘陵斜面）の出土遺物

先にも触れたように、北斜面部では弥生時代の遺構が確認できなかったが、遺物に関しては極めて少量で、出土遺物は古墳～中世のものが中心である。

### 1 古墳に伴う遺物

#### 28号墳

鉄製品 (176～187) 176は鉄刀で、平造りの太刀である。刀身の一部は欠損している。茎尻は欠損しており、不明である。残存長は46.7cm 刃部幅3.3cm 間は片闊で、撫角に切り込んでいる。X線写真で確認したものの、茎部に目釘孔は確認できなかった。177・178は平根式の大形の三角形鐵<sup>1</sup>で、残存長は177で9.5cm 178で8.3cmである。共に鐵身部は平造りで、斜め闊である。茎部は欠損する。179～181は長頸鎌の片刃鎌で、いずれも頸部の一部と茎部は欠損している。181は逆刺が欠損している。182～186は長頸鎌の頸部の破片である。182・183は台形闊である。184・185は長頸鎌の茎部の破片で、矢柄に螺旋状に巻かれた樹皮が確認できる。186は長頸鎌の頸部の破片である。187は刀子の茎尻の破片と

考えられ、木質が残存している。

土器(188) 188は須恵器の模である。埴丘の流出土中に含まれていたもので、古墳に伴う遺物と考えられる。口縁部のみの破片であるが、薄手でシャープに作られており、波状文が施される。体部外面にはタタキ痕が若干残存する。田辺昭三氏による陶邑編年<sup>2</sup>のT K208型式の新段階に併行する時期のものと考えられる。

#### 29号墳

埴輪 (189～207) 189・190は円筒埴輪の口縁部の破片である。口縁はやや外反するが、端部は面をもち、折り曲げられていない。189は外面にヨコハケ<sup>3</sup>が確認できるが、静止痕は判然としない。191～200は円筒埴輪の胴部の破片である。突帯は断面方形である。194は須恵質とまではいかないがやや硬質である。201・202は朝顔形埴輪の頸部である。

203～206は形象埴輪の破片である。線刻がみられ、蓋形埴輪の破片であろう。204は笠部の破片である。205・206も小片であるが、線刻が確認でき、蓋形埴輪の一部である。

207は、小片であるが、朝顔形埴輪よりも小さく、

口縁部の屈曲部に突帯が貼り付けられないことから、壺形埴輪と考えられる。

土器（208～210） 208・209は台付楕の脚台部である。端部には折り返しがみられる。210は高杯の脚部の破片である。これらは埴輪の時期よりも古く位置付けられ、混入遺物と考えられる。

## 2 その他の出土遺物（211～238）

S K 423（211・212） 211は土師器の甕である。外面はタテ方向のハケの後ケズリを施す。212は鉄釘であろう。

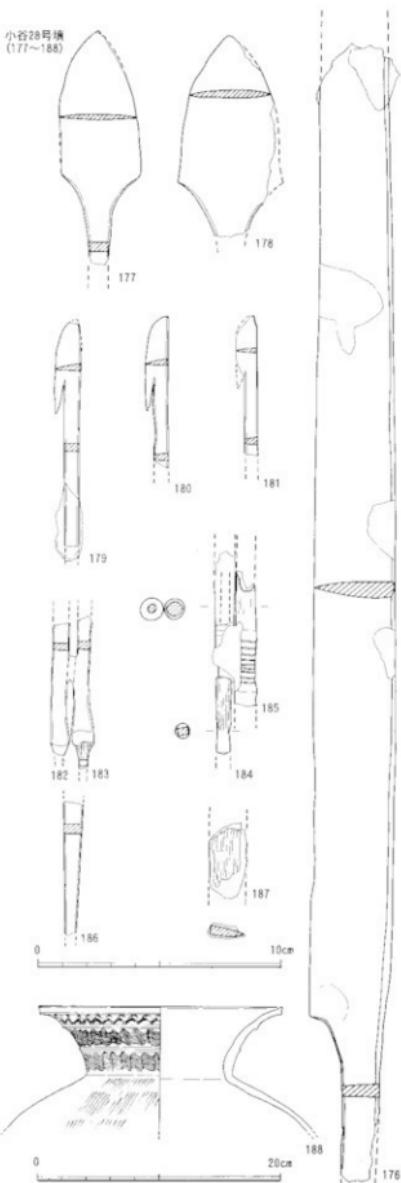
S D 424（214） 214は、S字状口縁台付楕の上半部である。外面には荒いタテハケが施される。赤塚次郎氏による分類のD類に相当する。

S Z 429（216） 216は陶器の山皿である。その他図示していないが、山茶楕の破片も出土している。13世紀前半頃のものと考えられる。

包含層（217～238） ここでは、遺構に伴わない土器を扱う。217・218は縄文土器である。218には口縁部に突帯が貼り付けられる。縄文晩期のものであろう。219・220は弥生土器で、ともに高杯の破片である。221は調整痕のある石器の剥片（R F）で、石材はサヌカイトである。222は石鎚の未製品と考えられる。石材はサヌカイトである。223は台付楕の口縁部の破片である。224～228は土師器の甕である。224は体部にタテ方向のハケ目を施す。奈良時代頃のものと考えられる。227は口縁部の摘み上げが明瞭に確認できる。平安時代中期頃のものであろう。226・228は、口縁端部を折り返していることから、平安時代後半～鎌倉時代初頭のものと考えられる。229～231・235は土師器皿、232～234は山茶楕の高台である。高台には粉殻痕が残る。13世紀前半代のものと考えられる。236は丸瓦、237・238は平瓦である。ともに凹面には布目の痕跡が確認できる。平瓦は凸面にタキ痕がみられる。（農田）

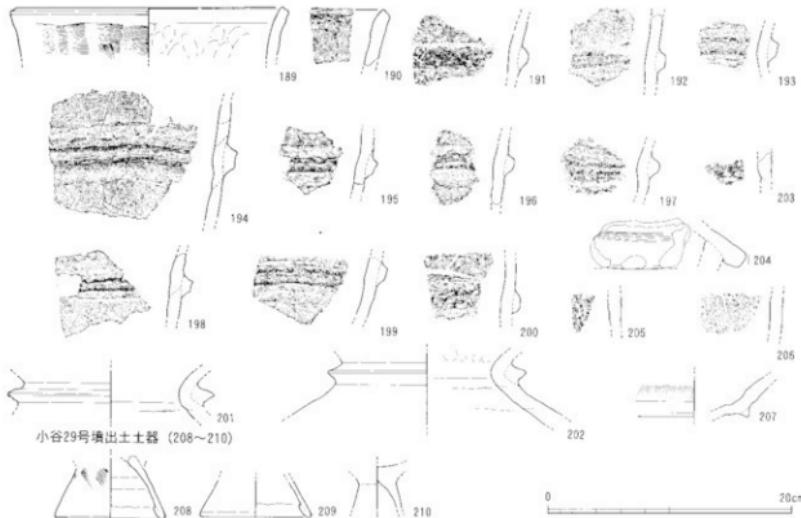
### [註]

- (1) 杉山秀弘「古墳時代の鉄鉗について」（福原考古学研究所論集 第八 吉川弘文館 1988年）
- (2) 田辺昭三「須恵器大成」（角川書店 1981年）
- (3) 調整方法の呼称については川西宏幸氏の区分にならう 川西宏幸「円筒埴輪紹説」（考古学雑誌 第64巻 第2号 1978年）
- (4) 赤塚次郎「縄文遺跡」（愛知県埋蔵文化財センター 1990年）

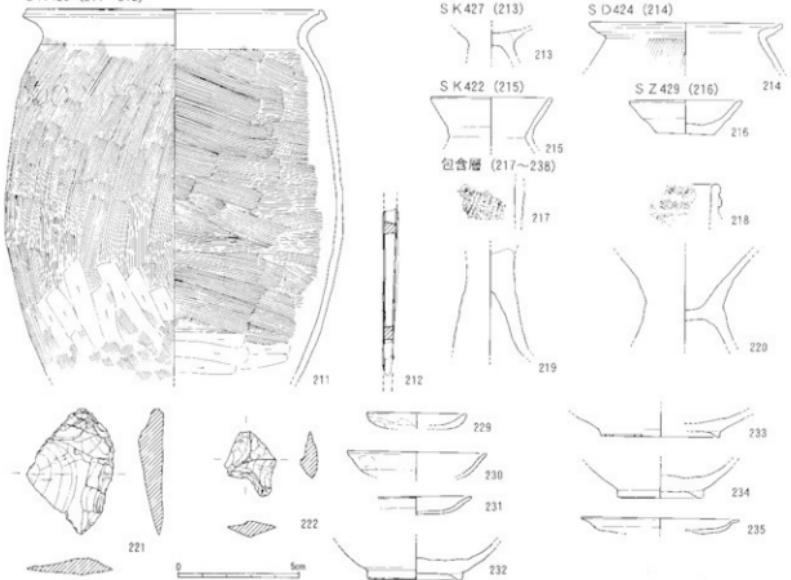


第41図 北地区出土遺物実測図（1）  
(188は1:4 他は1:2)

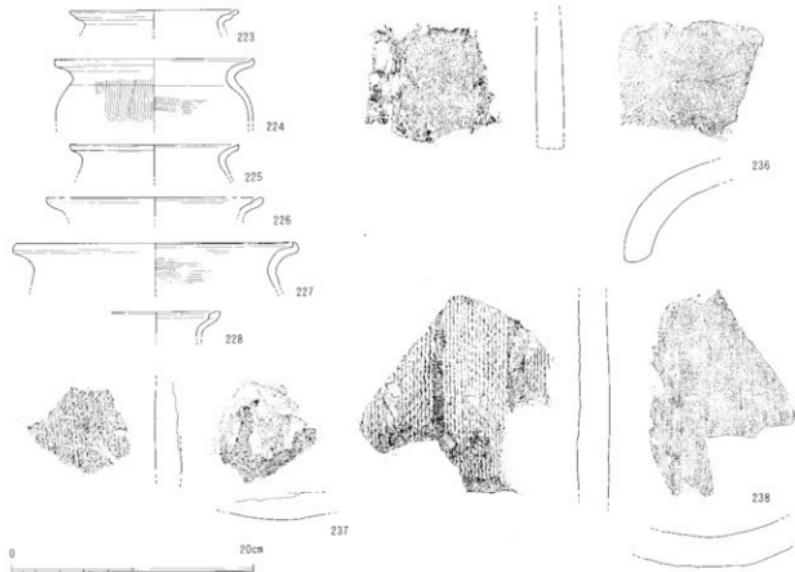
小谷29号墳出土埴輪（189～207）



SK423 (211 • 212)



第42図 北地区出土遺物実測図（2）（212・221・222は1：2 その他は1：4）



第43図 北地区出土遺物実測図（3）（1：4）

遺構番号	性 格	時 期	次 数	グリット	特徴・形 状・計測数値など
S Z 4 2 0	落ち込み	不明	8 次	E - H51	幅約3m、深さ0.5mの範囲で東西方向に伸びる落ち込み
S K 4 2 1	土坑	不明	8 次	D 48 - 49	縄文土器片・土師器片など出土しているが混入多い。
S K 4 2 2	土坑	古墳後期	8 次	S 42	土師器・須恵器片出土
S K 4 2 3	土坑	不明	8 次	T 41	土師器片・須恵器片・鉄釘など混入
S K 4 2 4	周溝	古墳中期	8 次	T 41 - 44 - U 41	幅1.5m、28号墳に伴う周溝
S X 4 2 5	周溝	古墳中期	8 次	R 40 - 41 - S - T 41 - 42	幅1.5m、28号墳に伴う周溝
S X 4 2 6	土坑	不明	8 次	Q - P 41	短径約0.5m、長径約2.0m、深さ30cm前後の土坑？
S X 4 2 7	墓壙	古墳中期	8 次	T - U 40	28号墳の埋葬施設。1.8×4.5m
S X 4 2 8	周溝	古墳後期	8 次	Q - R 43 - 44 S 43 - 45	29号墳の周溝。幅0.5m~1m、深さ0.2~0.4m
S Z 4 2 9	落ち込み	鎌倉	8 次	X - Y 48	幅約3m、深さ0.2~0.3m、山茶桜片・山皿が出土
S D 4 3 0	溝	不明	8 次	V - X 48 Y - Z 47	幅約0.5m、長さ9.0m、深さ0.3m前後
S K 4 3 1	土坑	不明	8 次	X - Y 48	0.5×2.1m、深さ0.2m前後
S K 4 3 2	土坑	不明	8 次	Y 47	0.2×0.3m、深さ0.2m前後、埋土に埴土混じる。
S K 4 3 3	土坑	不明	8 次	V - W 42	1.5×3.5m、深さ約0.3m
S K 4 3 4	土坑	古墳後期	8 次	S - T 45	0.2×0.3m、深さ0.2m前後、土師器片あり

第11表 第8次調査区（北地区）遺構一覧

番号	実測面積	種・目	目録など	遺構・層名	高さ(cm)	調査・技術の特徴		出土	色調	性状	特記事項
						内	外				
188	011-1	須恵器	瓶	29号埴燒丘 (II) 20.0	—	内: タガキ・瓦縫・波状文・ヨコナデ 外: ナデ	黒 SWH/黒	(II) 2/12			
189	005-3	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: タガキ・ヨコナデ 外: 背頭ナダ・ヨコナデ	やや黒 SWH/4C/5A 横	小片	土師質		
190	006-3	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: タガキ・ヨコナデ 外: ナデ	やや黒 SWH/4C/5A 横	小片	土師質		
191	007-6	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ・突葉貼り付け・ヨコナデ 外: オサエ	粗 SWH/4C/5A 横	小片	土師質		
192	006-4	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ・突葉貼り付け・ヨコナデ 外: ナデ	やや黒 SWH/4C/5A 横	小片	土師質		
193	007-7	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: 突葉貼り付け・ヨコナデ 外: ナデ	やや黒 SWH/4C/5A 横	小片	土師質		
194	007-1	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ・突葉貼り付け・ヨコナデ 外: オサエ・ナデ	粗 10H8/2反眞横	小片	土師質		
195	008-1	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ・突葉貼り付け・ヨコナデ 外: ヨコナデ	やや黒 10H8/3C/5A 横	小片	土師質		
196	006-1	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ・突葉貼り付け・ヨコナデ 外: ナデ	やや黒 10H8/4C/5A 横	小片	土師質		
197	007-5	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: 突葉貼り付け・ヨコナデ 外: 葉化のため不規	粗 7.5H8/6褐色	小片	土師質		
198	006-5	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ・突葉貼り付け・ヨコナデ 外: ナデ	やや黒 7.5H8/4C/5A 横	小片	土師質		
199	006-2	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ・突葉貼り付け・ヨコナデ 外: ナデ	やや黒 7.5H8/4C/5A 横	小片	土師質		
200	005-6	埴輪	円周埴輪	29号埴燒丘	—	内: 突葉貼り付け 外: 葉化のため不規	やや黒 10H8/4C/5A 横	小片	土師質		
201	008-3	埴輪	網形形埴輪	29号埴燒丘	—	内: ナデ 外: ナデ	やや黒 H-34 黄横	小片	土師質		
202	006-3	埴輪	網形形埴輪	29号埴燒丘	—	内: ナデ・背頭オサエ・ナデ	粗 2.5H6/1塊灰	小片	土師質		
203	005-4	埴輪	直周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ナデ・直周 外: 葉化のため不規	やや黒 7.5H8/6 横	小片	土師質		
204	005-2	埴輪	直周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ヨコハラ 外: 葉化のため不規	やや黒 7.5H8/4C/5A 横	小片	土師質		
205	005-5	埴輪	直周埴輪	29号埴燒丘	—	内: 直周 外: 葉化のため不規	やや黒 7.5H8/6褐色	小片	土師質		
206	007-3	埴輪	直周埴輪	29号埴燒丘	—	内: 直周 外: 葉化のため不規	やや黒 7.5H8/6褐色	小片	土師質		
207	005-3	埴輪	直周埴輪	29号埴燒丘	—	内: ナデハラ 外: 葉化のため不規	やや黒 7.5H8/6褐色	小片	土師質		
208	007-4	土師器	高杯	29号埴燒丘	—	内: 葉化のため不規 外: ナシボリ・ナデ	やや黒 10H8/3C/5A 横	小片	土師質		
209	011-1	土師器	台付杯	29号埴燒丘 (I) 9.0	—	内: 葉化のため不規	やや黒 10H8/3C/5A 横	3/12	台脚部折り返しあり		
210	011-2	土師器	台付杯	29号埴燒丘 (I) 9.0	—	内: 葉化のため不規	やや黒 2.5H6/2反眞	3/12	台脚部折り返しあり		
211	003-1	土師器	瓶	5 K 423 (II) 24.2	—	内: タガキ・カゼリ・ヨコナデ 外: クズリ・ヨコナデ	黒 7.5H8/6直	3/12			
212	010-2	土師器	台付杯	5 K 422 (II) 15.6	—	内: タガハラ・ヨコナデ 外: ナデ	粗 10H8/4C/5A 横	小片			
214	011-3	土師器	高杯	5 K 422	—	内: 葉化のため不規 外: 葉化のため不規	やや黒 10H8/1塊灰	小片			
215	010-4	土師器	瓶	5 K 424 (II) 9.7	—	内: 葉化のため不規 外: 葉化のため不規	やや黒 10H8/4C/5A 横	小片			
216	010-3	陶器	山皿	5 Z 429 (II) 9.0	—	内: クロクダ 外: ロクロクダ	黒 2.5H6/2反眞	4/12			
217	009-2	織文土器	瓶	匂合皿	—	内: 織目文瓶 外: ナデ	粗 10H8/4C/5A 横	小片			
218	009-3	織文土器	瓶	匂合皿	—	内: 突葉貼り付け・ヨコナデ 外: ヨコナデ	粗 10H8/4C/5A 横	小片			
219	012-3	須生土器	高杯	匂合皿	—	内: 葉化のため不規 外: 葉化のため不規	粗 7.5H8/6直	櫛柱部のみ			
220	010-5	須生土器	高杯	匂合皿	—	内: 葉化のため不規 外: 葉化のため不規	粗 10H8/3C/5A 横	面と体部の一部			
221	015-1	石器	KF	匂合皿	(残高15.5cm) (内径13.5cm) (厚さ1.1cm)	サスカイト	—	—	一部欠損	(重量) 12.43g	
222	015-2	石器	(未削)	匂合皿	(残高10.7cm)	サスカイト	—	—	一部欠損	(重量) 2.15g	
223	012-1	土師器	台付瓶	匂合皿	(II) 13.4	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	やや粗 10H8/4C/5A 横	3/12			
224	012-6	土師器	瓶	匂合皿	(II) 16.4	内: タガナデ・ヨコナデ 外: ヨコハラ・ヨコナデ	やや粗 10H8/4C/5A 横	3/12			
225	012-2	土師器	瓶	匂合皿	(II) 13.8	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	やや粗 7.5H8/6	3/12			
226	013-5	土師器	瓶	匂合皿	(II) 17.7	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	やや粗 10H8/4C/5A 横	小片			
227	012-5	土師器	瓶	匂合皿	(II) 16.4	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	やや粗 7.5H8/4C/5A 横	3/12			
228	013-4	土師器	皿	匂合皿	—	内: ナデ・オサエ	やや粗 10H8/4C/5A 横	小片			

第12表 第8次調査区(北地区)出土遺物観察表(1)

229	013-3	土師器	器	包合層	(II) 8.0 内：ナデ+ヨコナデ 外：ナデ	やや硬 10%W/4L薄壁	3/12	
230	013-1	土師器	器	包合層	(II) 11.4 内：ナデ+オサエ 外：ナデ	— 10%W/4L薄壁	3/12	
231	013-2	土師器	器	包合層	— 内：ナデ+ヨコナデ 外：ナデ	やや硬 10%W/4L薄壁	小片	
232	014-3	陶器	瓶	包合層	(I 白) 7.2 内：ロウロナデ→船付両台+舟切縫	硬 NW側白	底部6/12	粗粒感あり 蘭底層
233	014-4	陶器	瓶	包合層	(I 白) 9.7 内：ロウロナデ→船付両台+舟切縫	硬 2.5%W/2灰白	底部5/12	粗粒感あり 蘰底層
234	014-5	陶器	瓶	包合層	(I 白) 6.2 内：ロウロナデ	硬 NW側白	底部5/12	
235	012-4	土師器	器	包合層	(II) 12.8 内：ナデ+ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや硬 7.5%W/4L5L1壁	3/12	
236	010-1	瓦	瓦	包合層	— 内：布目織	やや硬 2.5%W/2灰黑色	破片	
237	013-6	瓦	瓦	包合層	— 内：不規 外：布目織	やや硬 10%W/1橘灰色	破片	
238	009-1	瓦	瓦片	包合層	— 内：タガキ 外：布目織	やや硬 5%W/1灰黑色	破片	

第13表 第8次調査区（北地区）出土遺物観察表（2）

番号	実測番号	種類	法面	備考	特記	備考
176	2- 1	鉄刀	鉄長46.7cm 刃部43.0cm 片闊 基底 不明	刃先欠損		
177	14- 1	鉄鎌 (三角鎌)	鉄長9.5cm 鎌身長6.0cm 鎌身間 斜め開		基部欠損	
178	1- 8	鉄鎌 (三角鎌)	鉄長8.3cm 鎌身長6.2cm 鎌身間 斜め開		基部欠損	
179	14- 2	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長9.2cm 鎌身長3.8cm 鎌身間 逆剝		片刃鎌	
180	1- 4	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長6.2cm 鎌身長5.9cm 鎌身間 逆剝		片刃鎌	
181	1- 5	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長5.9cm 鎌身長5.5cm 鎌身間 逆剝		片刃鎌	
182	1- 7	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長5.3cm 基闊 自刃開			
183	1- 7	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長6.2cm 基闊 自刃開			
184	1- 2	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長6.3cm		基部に木製柄る	
185	1- 2	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長5.5cm		尖頭に木製柄底巻が残る	
186	1- 6	鉄鎌 (長脚鎌)	鉄長5.6cm		鋸歯	
187	1- 3	刀子?	鉄長3.3cm 幅約1.6cm			
212	1- 1	鉄刀	鉄長 6.8cm	5 K 4 2 3		

第14表 第8次調査区（北地区）出土鉄製品観察表

## VII 自然科学分析～縄文時代晚期土器棺墓の土壤理化学分析～

### 1 分析の目的

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡第8次調査では、縄文時代晩期末の土器棺墓S X 492に関する自然化学分析を実施した。これは、土器棺内外の土壤を理化学分析することにより、当該遺構に遺体が埋葬されたいたのかどうかを理化学的に特定することを目的としたものである。

自然化学分析の実施にあたっては、パリノ・サーヴェイ株式会社と契約を締結・委託した。以下に、当該会社からの報告文を掲載する。  
(伊藤)

### 2 分析の方法

今回測定する成分は、動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸の含量測定を行う。リン酸は、土壤中に固定されやすい性質があり、遺体が埋葬されると土壤中にリン酸の富化が認められる。このことから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。

### 3 試料

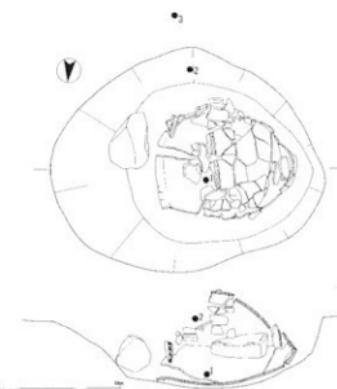
試料は、土器棺S X 492とその周辺から採取された4点（試料1～4）である。この内、試料1が土器棺埋土、試料2が土坑内埋土、試料3が遺構南側の遺構検出面真下、試料4が遺構より南側に離れた地点から採取されている（第44図）。試料は、暗褐～黒褐色を呈し、埴壙土（C L：粘土15～25%，シルト20～45%，砂3～65%）あるいは軽壙土（L i C：粘土25～45%，シルト0～45%，砂10～55%）よりなる。なお、土色はマンセル表色系に準じた新

版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）に、また土性は土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性に基づく。

### 4 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリムデン酸比色法で行う（土壤養分測定法委員会、1981）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素



第44図 土器棺墓S X 492土壤サンプル地点

試料番号	土性	土色	P2O5(ng/g)	備考
1	軽壙土(L i c)	10YR2/3 黒褐	0.27	土器棺埋土
2	軽壙土(L i c)	10YR2/4 暗褐	0.24	土坑埋土
3	軽壙土(C L)	10YR2/4 暗褐	0.17	遺構南側遺構検出面真下
4	軽壙土(C L)	10YR3/3 暗褐	0.24	遺構南側の離れた地点

第15表 土壤理化学分析資料一覧

酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P2O5)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)を求める。

## 5 結果および考察

結果を第15表に示す。リン酸含量は、0.17~0.27 P2O5mg/gが得られる。今回分析した試料の中で比較すると、最も低いリン酸含量が得られる試料は、遺構南側の遺構検出面真下から採取された試料1でリン酸含量が高い。このことが、土器棺内に遺体が埋納されていたことを示している可能性がある。

ただし、土器棺内埋土から採取された試料1のリン酸含量は、土坑内埋土あるいは遺構外から採取された試料(試料2~4)のリン酸含量と著しい差が認められない。また、土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量の上限は、Bowen(1983)、Bolt & Bruggenwert(1980)、川崎ほか(1991)、天野ほか(1991)の調査例から推定すると約3.0P2O5mg/g程度と考えられる(なお、各調査例の記載単位が異なるため、全てP2O5mg/gで統一している)。今回の測定値は、いずれの試料も天然賦存量の上限を上回る値でなく、外的要因によりリン酸含量が富化されたと断言できない。また、土壤中にリン酸成分が供給される要因として植物体がある。今回のようにリン酸含量が天然賦存量より低い場合、植物体によるリン酸の影響を受けることも考慮しなければならない。したがって、植物体の影響を差し引いてもリン酸含量が高い試料を抽出することが重要であり、土壤中の腐食含量測定が望まれる。また、土壤中に残留するコレステロールとコプロスタノール、さらにアラキシン酸(C20)・ベヘン酸(C22)・リグノセリン酸(C24)などの割合で遺体埋納について検証することができる場合がある(例えば、小山、1995)。このように多角的な調査を行うことで、より詳細に遺体埋納について検討することが可能となる。今後、これらの調査を行った上で、今回の結果を再評価していきたい。

(株)パリノ・サーヴェイ)

## 6 評価

㈱パリノ・サーヴェイに委託・実施した分析結果は、土器棺S-X-492に遺体が埋葬されていたことを示唆するものの、断定できるデータとまでは言えないものであった。

この結果は、基本的には当遺跡の土壤条件がリン酸含量測定にそぐわなかったものと認識できる。しかし、当地の土壤条件が通常の丘陵部よりも特殊であったとは思えない。考古学的な所見以上のものを理化学的に得ようとするならば、測定の方法を複数用意して実施するといった体制も考えていく必要があろう。また、その際には考古学的な所見の正否も検討対象になることは言うまでもない。(伊藤)

### [引用文献]

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p.28-36.
- Bowen, H. J. M (1983) 「環境無機化学 - 元素の循環と生化学-」、浅見輝男・茅野充男訳、297p., 博友社 [Bowen, H. J. M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M. (1980) 「土壤の化学」、岩田進牛・三輪睿太郎・井上隆弘・羅捷行訳、p.235~236、学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) SOIL CHEMISTRY].
- 土壤費分測定法委員会編(1981)「土壤費分分析法」、440p., 貢賢堂.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久(1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p.23~27.
- 小山鶴造(1995) 東北地方の脂肪酸分析結果、考古学ジャーナル、386、p.17~21.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967) 新版標準土色帖、ペドロジスト懇談会編(1984)「土壤調査ハンドブック」、156p., 博友社.

## VIII 第8次調査のまとめ

第8次調査区では、縄文時代晚期から中世までの遺構・遺物が確認された。中心は、縄文時代晚期～弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代後期、古代、中世の5時期である。

ここでは、今回の調査区における成果をまとめておく。

### 1 縄文時代晚期から弥生時代前期の状況

**土器棺墓** 縄文時代晚期の土器棺墓 S X 492は、馬見塚式の深鉢1個を棺身とするもので、蓋部付近と棺内の2箇所に大石を伴うものである。棺内の石は、遺骸に抱かれていた可能性が高い。当該期の葬送を考える上で興味深い事例といえる。

**弥生前期の平地式住居** 弥生時代前期の遺構としては、中央に焼土を有し、周囲に円形のピットがめぐるもので、平地式の建物跡（住居跡）の可能性が高い。弥生時代前期の住居跡は、県内ではコドノB遺跡・金剛坂遺跡（いずれも多気郡明和町）で確認されているに止まっており、今回の事例で3例目に相当する。

今回この住居跡が確認できたのは、明確に遺構が確認できる面のやや上部で検出を試みたことによるものであり、精査を行うことで、今後は他の遺跡でも確認事例が増加する可能性がある。

**土器類** 弥生時代前期の土器類は、前期中段階から新段階のものがある。弥生時代前期の土器は、第6・7次調査区からもまとまって出土しているが、ここでは前期新段階のいわゆる「亜流遠賀川式土器」を中心であり、第8次調査区ではそれよりもやや古いものも含んでいる。亜流遠賀川式土器で純粹に構成される遺跡はこれまでに明確にはなっていないとされていたが、第6・7次調査区の事例はまさに純粹な状況を示す。小谷赤坂遺跡の事例は、「亜流遠賀川」式土器の成立に、中段階からの継続性を示すものである。

さて、伊勢湾西岸部で最も良好な弥生時代前期の土器を出土した遺跡として著名な中ノ庄遺跡（松阪

市中ノ庄町、旧一志郡三雲町中ノ庄）<sup>10</sup>は、当遺跡の南東約5kmと比較的至近距離に位置する。いわゆる「正統」遠賀川式土器と「亜流」との関係は、鈴木克彦氏による検討<sup>11</sup>があるものの、未だ明確になっているとは言い難い。小谷赤坂遺跡の事例は、伊勢で遠賀川式土器を受容する中心となった地域において「亜流」が発生した可能性を示唆するものであり、今後の研究にあたって極めて重要な意味を有するといえる。

**馬見塚式と遠賀川式系土器** 当遺跡において、馬見塚式と遠賀川式系土器との共伴関係は無い。同じような状況は、縄文時代晚期の突帯文系土器と弥生時代前期の遠賀川式土器の関係として、多くの遺跡で見られることである<sup>12</sup>。両者の時期は極めて近接しているか、あるいは一部重複する可能性を考えるべきかも知れない。土器棺に用いられるのが突帯文に集中し、遠賀川式系のものが極めて少ないととも、充分に考慮の対象とされるべき問題であろう。

### 2 弥生時代後期の状況

**環濠** 今回の調査区からは、2条の環濠<sup>13</sup>が検出された。南部の環濠 S D 497は断面V字形、北部の環濠 S D 456は断面逆台形のものである。いずれも弥生時代後期前半の土器を埋土内に含んでいる。当遺跡では、並行する2条の環濠を既に検出しており、今回の確認によって、都合4条となった。

第5次調査区の環濠は、一方が断面V字形（S D 306）、もう一方が断面逆台形（S D 307）であり、形態上は当調査区のものと共通する。ただし、第5次調査区で確認した環濠と第8次調査区の環濠とが連結しているわけではなく、それぞれは独立している可能性が高いように思われる。

環濠の開削時期は明確にはできないが、埋土内から出土した土器を見る限り、埋没時期には違いがありそうである。南部の環濠 S D 497の方がやや古くに埋没し、北部の環濠 S D 456は集落最盛期を過ぎると同時に埋没したものと考えられる。いずれの環濠からも良好な土器が出土していることから、環濠

を廃棄するにあたっての「マツリ」が想定される。同様な傾向は、時期的にはやや新しいものの、雲出島貴遺跡（津市雲出島貴町）でも認められる<sup>5</sup>。

環濠は、廃棄の際に人為的な埋め戻しはなされていないものと考えられる。これは、南部の S D 497 墓土中から奈良時代の遺物が出土していることや、南北いずれの環濠も中世の段階で堀が開削される場に当たっていることから推察できる。後の世まで環濠の痕跡が遺存する事例は、当遺跡第5次調査で確認した環濠や前出の雲出島貴遺跡のほか、天王遺跡（鈴鹿市天王町）でも確認できる。つまり、環濠廃棄にあたっての「マツリ」が行われたとしても、埋め戻しは行われずに放置されていたと考えられる。一般論としてどこまで言えるのかは今後の検討が必要であろうが、集落廃絶に伴い、環濠はそのまま放置されてもとくに支障がなかった代物と考えることもできる。

建物類 第8次調査区からは、9棟の竪穴住居と1棟の掘立柱建物を確認した。

当遺跡でこれまで確認してきた竪穴住居の基本的な構成要素は、方形プランに4本の主柱穴を伴い、中央に炉、いずれかの1側辺中央付近に貯蔵穴、というものである。第8次調査区の竪穴住居も、この構成要素を基本としている。また、拡張以外の重複が無いのも、これまで確認された状況に一致する。

この一方、当調査区ではじめて確認されたのが、排水溝を持つ竪穴住居3棟と、ベッド状遺構を持つ竪穴住居である。ベッド状遺構を持つ竪穴住居は、県内でも初めての例である。主柱穴などの構成要素は同じなので、壁や屋根の構造が異なるものではなかろう。

排水溝を持つ竪穴住居のうち、S H 454・461は丘陵崖間に排水するものであり、とくに問題は無いが、S H 475は土坑状の掘り込みを設けてそこに排水するという変則的なものである。排水の方向が確保されなかったからに他ならないのであろうが、そうすると、排水溝を持つ竪穴住居との違いは何であろうか。あるいは、何らかの重要な意味を持った竪穴住居であるのかも知れない。周囲に見られる竪穴住居の中でも相対的に規模が大きいので、何かそういう意味を有していることも考えられよう。

出土遺物 当調査区から出土した遺物は、これまでの調査区に比べれば比較的多い。土器は、尾張地域との併行関係で言えば、八王子古宮式から山中式にかけて、ということになろう。

注目できる遺物もいくつか見られる。S H 475から出土した67の壺には、同心円スタンプが押印されている。当該時期のスタンプ文は、当遺跡に隣接する天王寺北瀬古遺跡で方形のものが確認されている<sup>6</sup>に過ぎず、極めて珍しいものといえる。また、S H 485出土の74のように、外面に「J・W」字形の櫛描文を施すものや、S H 469出土の高杯(64)のように、脚柱部に格子目文を施すものも類例が見られないものである。このような特殊施文は、突発的に出現して後続性の無いものであるが、こういった施文を成立させる背景については充分な検討が必要と考えられる。

また、風倒木痕 S K 540から出土した鏡形土製品も注目できる。当該期の鏡形土製品は、県内では極めて類例の少ないものであり<sup>7</sup>、「マツリ」的な意味合いがあると考えられるにしても、このような品が製作される背景を、例えば銅鋳形土製品が成立する背景とも絡めて考えていく必要があろう。（伊藤）

### 3 古墳時代の状況

古墳の時期 小谷28号墳の築造時期を判断する要素としては、埋葬施設から出土した鉄製品と墳丘から出土した須恵器の模片がある。須恵器の模に関しては、先述したように T K 208型式段階に併行する時期と考えられ、出土している片刃の長頸鎌も当概期のものと考えられ、矛盾はない。

一方、29号墳は、周溝より埴輪と少量の土師器しか出土しておらず、時期決定の材料は多くはないが、円筒埴輪の口縁部の屈曲が消失しており、T K 216型式段階に位置付けられる小谷13号墳の埴輪よりも新しい要素をもつことから、T K 23型式段階併行期頃と考える。

以上のことから小谷古墳群においては13号墳( T K 216型式段階)→28号墳( T K 208型式段階)→29号墳( T K 23型式段階)という新旧関係が考えられる。  
古墳時代の状況 今回の調査では、丘陵の北斜面に

おいて新発見の古墳2基を確認した。第6・7次調査では丘陵南側の平坦部においても東支群の6基の古墳が調査され多くの成果を得たが、時期的に重複する古墳も存在する。

28号墳とほぼ同様の時期とされる丘陵東側の平坦部に所在した小谷13号墳は、墳形は円墳で、木棺直葬である。副葬品は短甲や鉄鏃など豊富な鉄製品をもち、埴輪も樹立されており、古墳群中でも突出した要素をもつ。一方、28号墳は、築造時期の差も少なく、同じ木棺直葬という埋葬施設でありながら墳形は方墳で埴輪をもたず、盗掘の影響もあるうが、短甲や蛇行剣といいたいわゆる「初期群集墳」によくみられる鉄製品を保持していない。また、古墳の立地に関しても平坦地に築造された13号墳とは異なり、北斜面の尾根上に位置する。この要素の差をどのように解釈すべきかが問題となる。

天花寺丘陵には小谷古墳群以外にも西野・清水谷・赤坂といった数多くの古墳群が存在し、その築造は古墳時代前期から連続と続いている。この地域に継続して勢力を有した集団が存在したと考えられる。筆者は、首長墳クラスの古墳の築造が途絶える中期後葉以降については、小地域首長、ないしは家父長層クラスの勢力が分立した状況で、南勢地域の支配構造の変容により各勢力の優位性もその都度変動するような状況であったと想定している<sup>13)</sup>。これらの古墳の立地や埋葬施設・副葬品の差は地域首長といったような上部権力との結びつきの差によるものと考えたい。しかしながら、このような勢力が基盤とした居住域などについては明らかになっておらず、今後は古墳のみならず、この時期の具体的な地域社会の様相について明らかにしていく必要があろう。

(豊田)

#### 4 古代の状況

遺構 古代の遺構は、あまり明確ではない。竪穴住居の可能性があるものがあるが、それ以外はピットのみであり、明確な集落が形成されていたわけではない。奈良時代集落は、第1・5次調査区付近に竪穴住居・掘立柱建物が確認されている。丘陵東部にあたる第6~8次調査区については、集落が営まれ

た場所ではないといえる。

遺物 この一方、出土遺物は当調査区からもかなり認められた。なかには、仏鉢形の須恵器(161)や川原寺系の軒丸瓦(170)をはじめとした瓦類も見られる。これは、丘陵東麓に存在していた天花寺廃寺との関係で考えられるものである。

遺物のなかでとくに注目されるのが、土馬(141)である。鞍・手綱などの装飾を伴うが、すんぐりした非常に愛嬌のある製品である。共伴する須恵器からは、都城編年<sup>14)</sup>の平城III~IV併行と考えられ、奈良時代後半頃のものであろう。

この土馬は、弥生時代の環濠S D 497の上層から出土している。奈良時代まで痕跡が認められた環濠を利用して、何らかの「境界祭祀」的な意味合いによって用いられたものと推測する。

土馬は、近隣では天花寺丘陵北麓に広がる堀田遺跡で2点出土している<sup>15)</sup>。形態的には異なるものの、一連の意味を持つ可能性もある。堀田遺跡は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけての一志郡衙そのものか、あるいはそれと密接に関係した遺跡と推測されている。また、天花寺丘陵南部には一志郡衙連の遺跡と考えられる「筒野砦跡」や中谷廃寺といった遺跡群が展開している<sup>16)</sup>。さらに、小谷赤坂遺跡でも、第1次発掘調査で銅製帶金具が出土している<sup>17)</sup>。場所的には天花寺廃寺との関係も考慮する必要があろうが、周辺環境を考慮すれば、当該期の小谷赤坂遺跡は一志郡衙連の遺跡としても考えておく必要がある。

#### 5 中世（天花寺城跡）の状況

当調査区は、天花寺城跡の曲輪2~4にかけての範囲が対象である。当初認識していた遺構としては、曲輪2・3間の土壘(S Z 450)と堀(S D 452)、曲輪3・4間の土壘(S Z 498)と堀(S D 511)で、曲輪内の平坦地には建物跡などが存在するものとして調査に臨んだ。しかし、調査報告でも述べたように、曲輪2の北側を画する小規模土壘(S Z 455)を新たに確認したものの、平坦地部分の遺構は皆無といってよい状態であった。

曲輪2の防衛施設 曲輪2は、土壘S Z 450によつて西側が遮断されていることが調査前の段階から確

認されていたが、発掘調査の結果、曲輪の北側に小規模な土壘 S Z 455 の存在することが確認された。S Z 455 は S Z 450 と直交関係にあるが、両者は接続されていない。したがってこの間は、小規模ながら虎口に相当するものと把握できる。虎口は北側に開口するものである。曲輪 2 側から見た虎口以北の通路は、S Z 455 の北面沿いに東に折れ、小谷 28・29 号墳が築かれていた尾根上へと至るものと考えられる。なお、天王寺城の外部に聞く虎口は、中心となる曲輪 1 のものに次いで 2 例目となる。

堀の開削 当調査区で確認された 2 条の堀は、いずれも弥生時代後期の環濠と同じ位置に認められる。すなわち、堀 S D 452（曲輪 2・3 間）は環濠 S D 456 と、堀 S D 511（曲輪 3・4 間）は環濠 S D 497 と重複している。前述したように、弥生時代後期の環濠は、永らくオープンな状態にあったと考えられるものであり、それは中世でも完全に埋没することなく遺存していたと見られる。中世に至り、天王寺城の造成にあたって、弥生時代後期の環濠が影響を与えたとも考えられる。

この前提に立つと、曲輪 1・2 間に設定された堀の位置にも、弥生時代の環濠が存在する可能性も考えられる。今のところ推測の域を出ないが、もしもこの場所に調査が及ぶことがあれば、注意しておく必要はあるう。

曲輪内の状況 第 8 次調査では、中世の遺構が存在することを想定して、表土直下付近で最初の遺構検出を試みている。しかし、土壘や堀といった構造物を除き、曲輪内からは当該時期の遺構・遺物は皆無であった。なお、これは調査時の「掘り過ぎ」によるものではなく、もともと建物跡などの遺構を伴わないような区域であったことを示している。

今回の調査を含む一連の天王寺城跡にかかる発掘調査では、堀・土壘といった構造物以外の遺構は確認できず、また出土遺物も皆無に近い状態である。これは、天王寺城跡の性格を考える上で、極めて重要な要素と思われる。

## おわりに

以上、第 8 次調査区の調査成果をもとに、まとめと課題を示してきた。天王寺丘陵と周辺の遺跡群に

関しては、調査事例も増加したことにより、極めて豊富な資料が揃っている。第 8 次調査の成果も踏まえた、より総合的な検討を行い、開発によって失われた文化財の持つ意義を少しでも還元していただきたい。

(伊藤)

## 〔註〕

- ①三重県埋蔵文化財センター 金剛坂遺跡（第 4 次）、辰ノ口古墳群（第 2 次）発掘調査報告（1999 年）、同 コドノ古道跡（第 2 次・第 3 次）発掘調査報告（2000 年）
- ②鈴木克彦「墓流について」（山中遺跡（財）愛知県埋蔵文化財センター 1992 年）
- ③三重県教育委員会 中ノ庄遺跡発掘調査報告（1972 年）
- ④鈴木克彦「墓流速賀川式土器」再考（Miehistory vol.2 1990 年）
- ⑤例えば、雲出川下流域に位置する雲出島貴遺跡でも同様な傾向が見られる（三重県埋蔵文化財センター 脇坂 III 2001 年）。当該時期の遺跡分布と立地の観点からの考察については、奥義次「三重県における凸帯式土器と土道跡の分布相」（Miehistory vol.1 三重歴史文化研究会 1990 年）を参照。
- ⑥小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡で見られる「環濠」は、厳密にいえば「circle」となっているかどうか分からぬ。というよりも、「circle」ではない可能性の方が高い。したがって、厳密には「環濠」というべきではないかも知れないが、弥生時代に見られる当該遺構を呼称する慣例にしたがって、ここでは「環濠」としておく。
- ⑦三重県埋蔵文化財センター 天王寺丘陵内遺跡群発掘調査報告 IV（2006 年）
- ⑧註 5 文献に同じ
- ⑨鈴木克彦「天王寺遺跡（第 5 次）発掘調査報告（2002 年）および、林和範「天王寺遺跡の成立と展開」（第 3 回考古学研究会東海例会発表、2004 年 8 月）による。
- ⑩尾張の土器編年に関しては、赤塚次郎「瀧尾平野における弥生時代後期の土器編年」（八王子遺跡 愛知県埋蔵文化財センター 2001 年）ほかを参照した。
- ⑪三重県埋蔵文化財センター 天王寺北瀬古遺跡・薬師寺北裏遺跡発掘調査報告（1999 年）
- ⑫県出土の鏡形土器製品は、清水政宏氏によって検討されており、それを踏まえれば、小谷赤坂遺跡の事例は山奥遺跡に次いで 2 例目ということになる（清水「考察とまとめ」山奥遺跡 II 四日市市教育委員会 2004 年）
- ⑬豈田祥三「中南勢地域における初期群集墳の検討－小谷古墳群の評議をめぐって－」（天王寺丘陵内遺跡群発掘調査報告 VI 三重県埋蔵文化財センター 2005 年）
- ⑭未調査墳のなかにも、初期群集墳に相当する古墳が存在することが予想される。
- ⑮都城編年と分類について、古代の土器研究会編「古代の土器 1 都城の土器集成」（1992 年）を参照した。
- ⑯三重県埋蔵文化財センター 堀田第 3・5 次調査（2002 年）、同 堀田第 6 次調査（2005 年）
- ⑰伊藤裕典「ふたつの「こりいいち」－古代一志都家に関する覺書－」（高宮歴史博物館研究紀要 11 2002 年）
- ⑱三重県埋蔵文化財センター 天王寺丘陵内遺跡群発掘調査報告（1996 年）

# 写 真 図 版

図版 1

南地区（上部平坦面）遺構(1)



調査区南部（南から）



調査区中央付近（北から）



S H475付近（北から）



S H454付近（西から）

図版 3

南地区（上部平坦面）遺構(3)



S X 492 (南から)



S X 492・土器内の大石 (南から)



S H453 (西から)



S H454 (北から)

図版 5

南地区（上部平坦面）遺構(5)



S H 461 (南から)



S H 461 (東から)

図版 6

南地岡  
上部平坦面（遺構(6)



S H466 (ベッド状遺構のみ掘削済 南から)



S H466 (南から)

図版 7

南地区（上部平坦面）遺構(7)



S H 469 (東から)



S H 469 (南から)



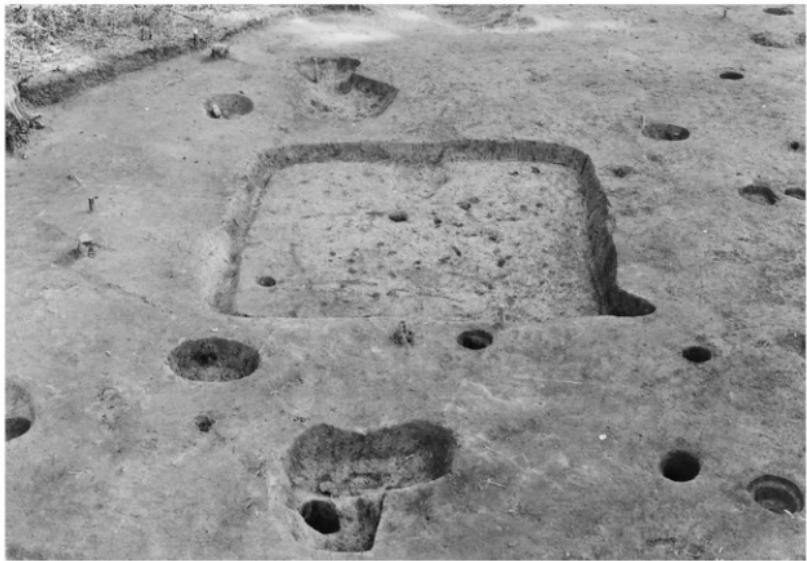
S H467 (北から)



S H475 (北から)

図版 9

南地区（上部平坦面）遺構（9）



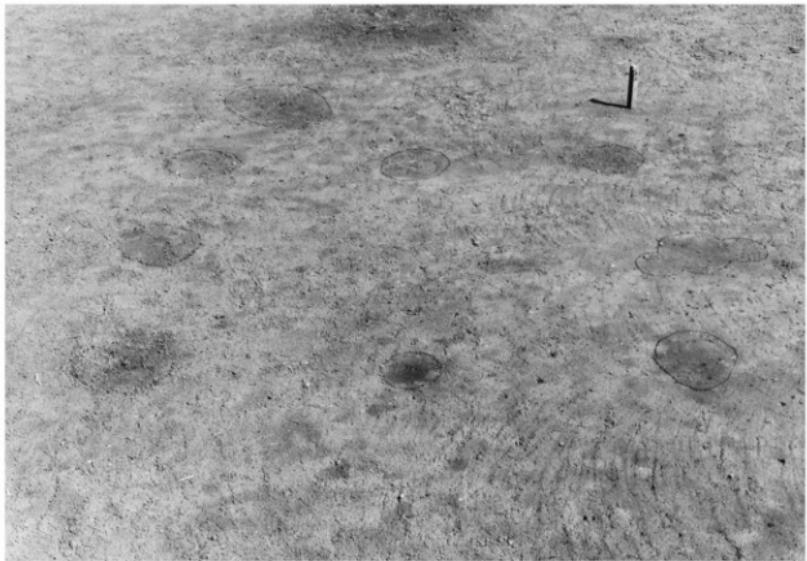
SH 485（北から）



SH 485（西から）



S H 531 (北から)



S B 519 検出状況 (南西から)

図版11

南地区（上部平坦面）遺構(11)



S D 456 (南から)



S D 497 (東から)



作業風景 (SH454)



土壘 S Z 498付近 (南から)

図版13

南地区（上部平坦面）遺構(13)



土壘 S Z 450・455（西から）



土壘 S Z 458土層（北から）



調査前風景（北東から）



調査前風景（小谷29号墳 南から）

図版15

北地区（丘陵斜面）遺構（2）



調査後調査区南部（北東から）



小谷28号墳全景（北西から）



小谷28号墳全景（北東から）



小谷28号墳埋葬施設（西から）

図版17



小谷28号埴埋葬施設（東から）



小谷28号埴埋葬施設 鉄刀出土状況（北から）



小谷28号填埋葬施設 鉄鎧出土状況（北から）



小谷28号填埋葬施設 鉄製品出土状況（北から）

図版19



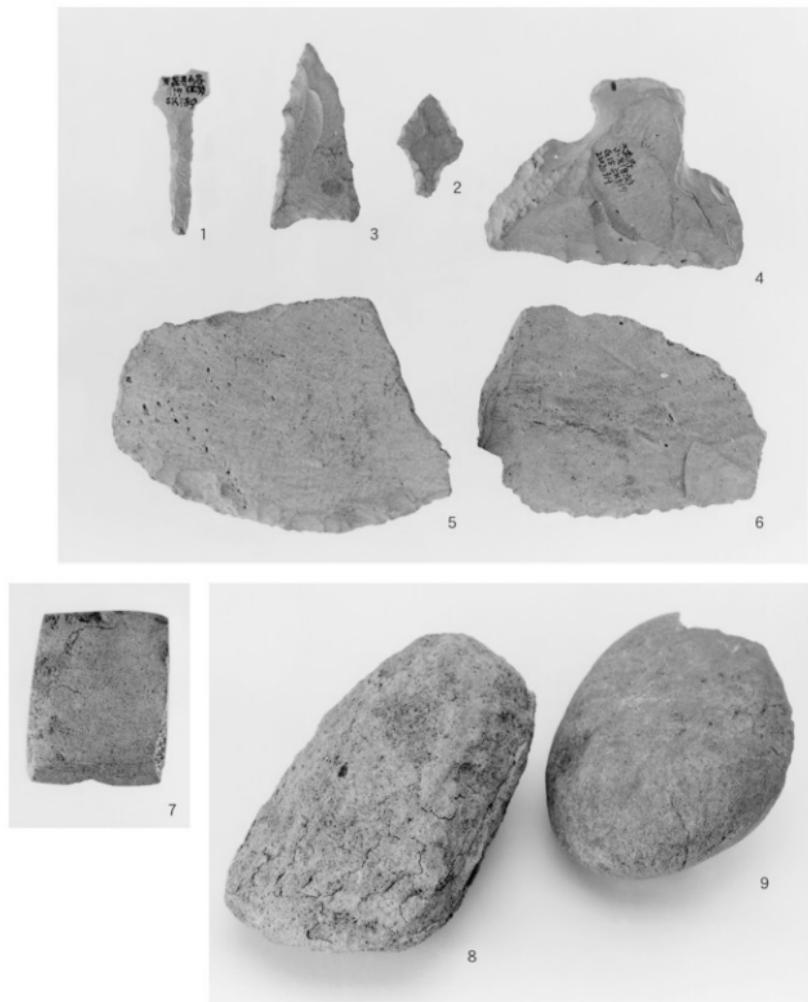
小谷29号墳調査後全景（南から）



小谷29号墳周溝土層断面（南から）

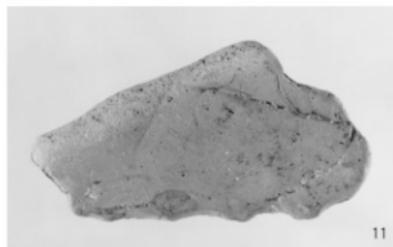
図版20

南地岡(上部平坦面)遺物(1)



图版21

南地区（上部平坦面）遗物(2)



11



16



13



35



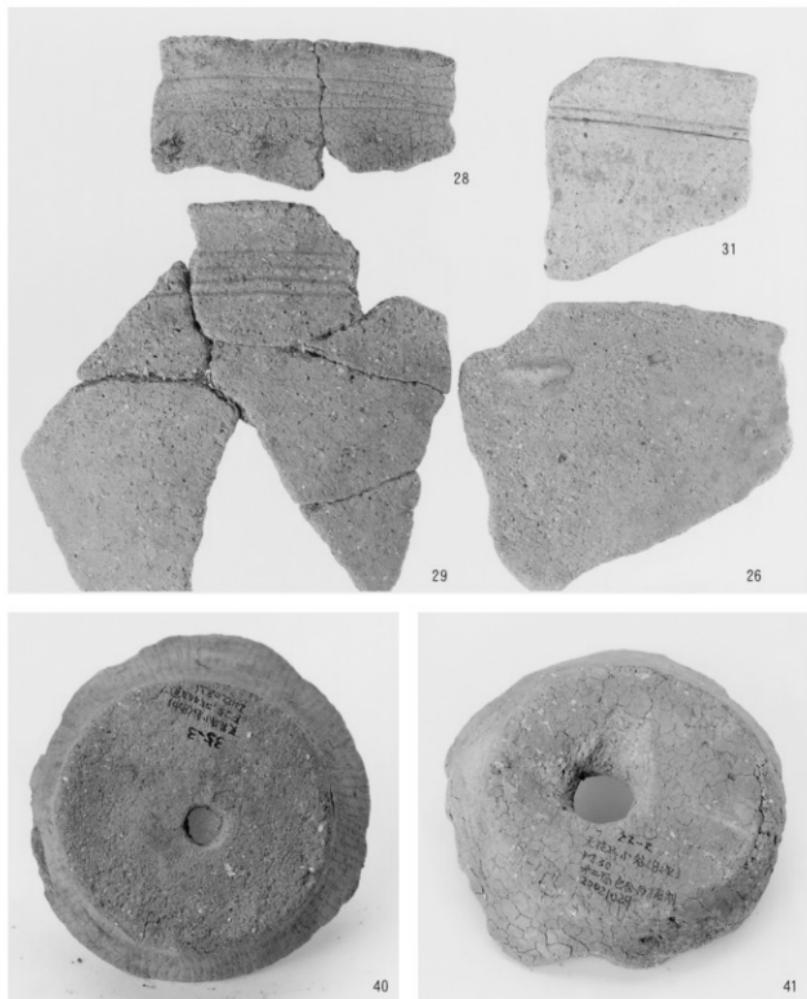
25



37

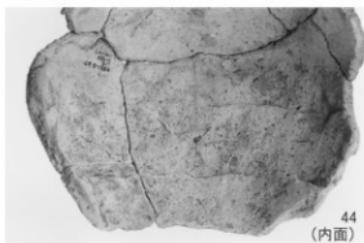
図版22

南地区  
上部平坦面  
遺物(3)



图版23

南地区（上部平坦面）遗物(4)



44  
(内面)



67



45



73



58



75

南地岡(上部平坦面)遺物(5)



图版25

南地区（上部平坦面）遺物(6)



鏡形土製品 (1 : 2)



鏡形土製品 (1 : 2)



スタンプ文 (6.7. ほぼ原寸)



「J」字・「W」字・刺突文 (7.4. ほぼ原寸)

图版27

南地区（上部平坦面）遗物(8)



141(右侧面)



141(正面)

1 : 2

1 : 2



157



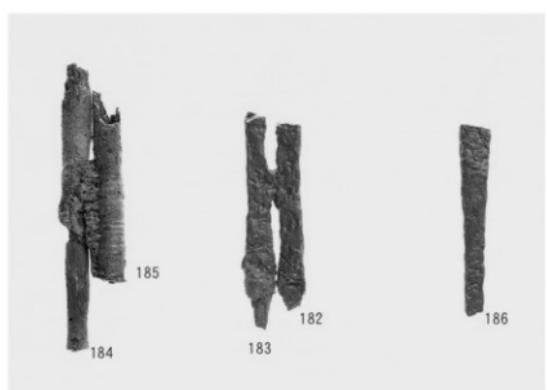
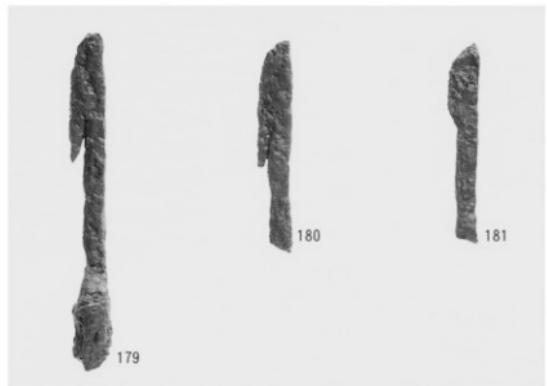
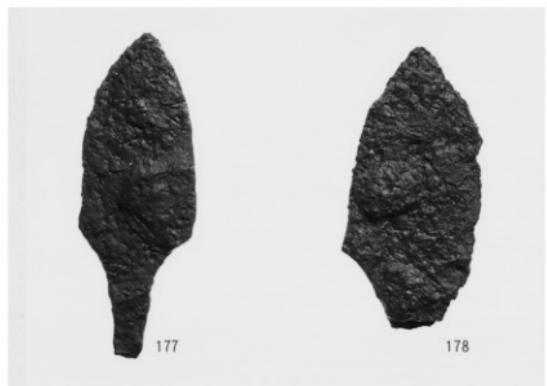
158



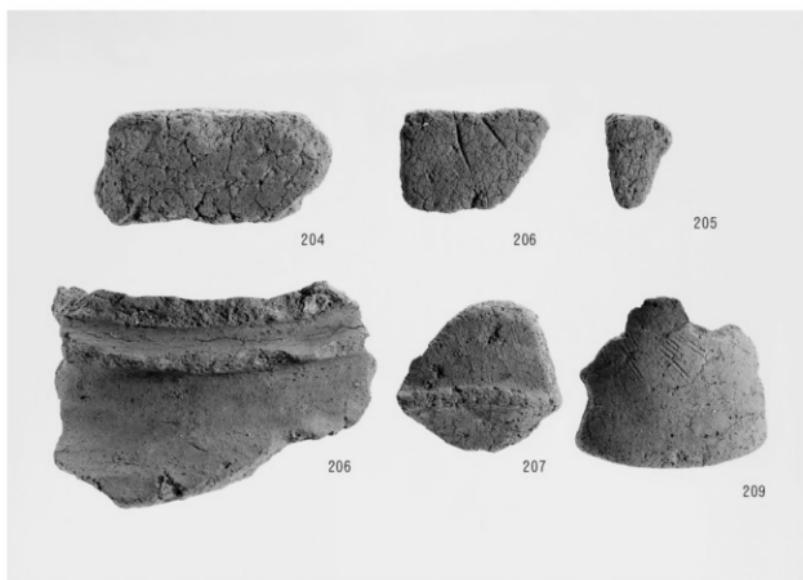
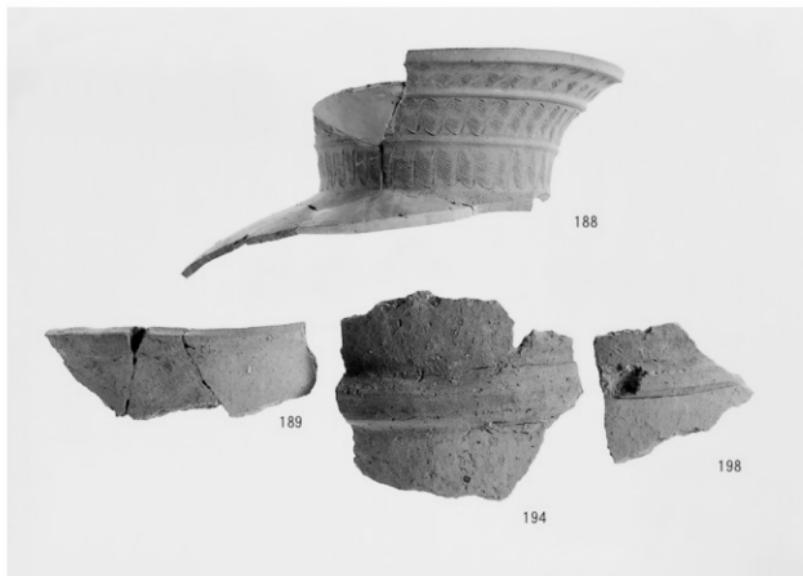
170



172



图版29



## 総括～天花寺丘陵発掘調査～

# I 発掘調査報告書における総括の位置づけ

## 1 天花寺丘陵東部の開発と発掘調査

三重県一志郡嬉野町天花寺地内に相当する天花寺丘陵東部の調査は、一般地方道天花寺一志嬉野インター線緊急地方道路整備（A）改良事業ならびに主要地方道松阪一志線緊急地方道路整備事業を契機に、その事前調査（記録保存）として実施されたものである。調査は、平成7(1995)年度の天花寺城跡・小谷赤坂遺跡第1次調査を皮切りに、平成14(2002)年度の同遺跡第8次調査まで、都合8年をかけて行われた。

この該当地内には、小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡・小谷古墳群・天花寺城跡の4遺跡があった。このうち、小谷赤坂遺跡の一部については、調査結果に基づき、「天花寺中世墓群」、「天華寺旧境内遺跡」として分離させた。また、上記事業としては一連の調査として、天花寺北瀬古遺跡・薬師寺北裏遺跡（以上、丘陵の南部）、堀田遺跡（丘陵の北部）がある。

すなわち、この一連の開発工事に伴う発掘調査は、天花寺丘陵から平地部にかけて、T字形の大トレンチを設定したことになる。この道路工事に伴う調査の面積は、丘陵部と平野部とを併せれば32,000m<sup>2</sup>

にも及ぶ（第16表）。同一地内の遺跡を長期にわたって継続的に調査した事例は、当県では日本道路公团による高速道路建設工事にかかる調査の場合には多く見られるものの、県道改良事業ではこれまでにもあまり認められない。

当該事業にかかる発掘調査は、個々の調査区毎でも大きな成果を得ている。しかし、この「大トレンチ」を全体として見るならば、その成果・価値は個々の調査区単位の成果を単に足し算しただけでは収まらない豊かなものといえる。

## 2 発掘調査と報告書の相関

行政による発掘調査は、予算・決算の関係から、基本的に単年度事業である。そのため、それぞれの調査は個別にまとめられ、報告書が作成される場合が多い。少なくとも三重県ではその方法がこれまでの中心であった。数年間にわたる調査成果を一冊にまとめるのは大変な労力を伴う。個々の年度単位でまとめていく方法は、それに比べれば容易いし、調査の成果を可能な限り速やかに報告・公開するという行政の責務にも合致するものである。したがって、

調査年度	調査遺跡	調査面積	報告書		
			発行所	発行年	書名
1995	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第1次）	1590	県	1996	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告
	堀田遺跡（第3次）	1500	県	1996	堀田遺跡（第3次）発掘調査概報
1996	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第2次）	390	町教委	2003	小谷赤坂遺跡2次、3次調査発掘調査報告書
	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第3次）	700	県	1997	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅱ
1997	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第4次）	1750	県	2002	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-2
	天華寺旧境内遺跡	5800	県	2005	天華寺旧境内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-1
1998	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第1次）	500	県	1999	天花寺北瀬古遺跡（第1次）・薬師寺北裏遺跡
	清水谷遺跡（第3次）	4800	県	2000	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告IV
1999	天花寺北瀬古遺跡（第2次）	705	県	2001	天花寺北瀬古遺跡（第2次）発掘調査報告
	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第6次）	1500	県	2005	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VI
2000	堀田遺跡（第4次）	600	県	2000	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告V
	堀田遺跡（第5次）	850	県	2002	堀田第3-5次調査
2001	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第7次）	1900	県	2005	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VI
	堀田遺跡（第6次）	600	県	2002	堀田第3-5次調査
2002	小谷A遺跡	3000	県	2005	堀田第6次調査
	小谷赤坂遺跡	16	町教委	2002	平成13年度嬉野町文化財調査概要
	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第8次）	5228	県	2005	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VII

※「小谷赤坂遺跡」には、小谷古墳群を含める。

第16表 天花寺丘陵界隈の発掘調査経過一覧

この方法そのものは否定されるべきものではない。しかしその結果、個別断片的な資料の提示となることは避けられない。そのため、遺跡の意義付けは行いにくい。個々の調査単位のみでは、また、昨今のように情報が氾濫している状況下では、こういった断片的な資料では、一般的な理解もさることながら、専門的な見地からも利活用の困難なことが多い。

調査の迅速な公表と、遺跡の全体像を把握する作業。両者は、いわば「車の両輪」に相当するものであり、その結果として、行政発掘による調査資料の有効な利活用が生まれる。しかし現実には、発掘調査によって明らかとなった遺跡の全体像を考えるための作業は後回しにされ、そのまま忘れ去られることが多い。これを両立させるための措置が、行政調査の重要項目として考えられる必要がある。

### 3 総括の意味

平成16年10月29日付で、文化庁は 行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）を刊行した。これは、文化庁が開催する「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会」での検討を受けて提示されたものである。ここでは、発掘調査報告書の意義についても大きく取り上げられている。そのなかで報告書は、「現状で保存できなかったものに代わって後世に残る記録の中でも最も中心となるものであり、埋蔵文化財に代わる公的性格をもった重要な存在」として位置づけられている（p17）。

そして、今回の文化庁報告では、とくに「総括」に関する意義が強調されている。それは、「遺跡全体の構造や性格、時期的変遷などの客観的事実の整理及びその遺跡が地域の歴史の中でもっている意味、位置付け」が記載される場とされ、「事実記載だけでは発掘調査の成果全体を的確に理解することができない」ことを補完する意味を持つものとされている（p18）。

ここで指摘されている「総括」の意義については、何ら問題は無く、そういった方向性で「総括」の編

まれることが保護行政の一環として推進されるべきであると思う。しかし、実際の発掘調査には、様々な状況下のものがある。浄化槽を設置する程度の極めて小規模な発掘調査もあれば、単位年度あたりの調査面積はそこそこ大きても、巨視的には断片的な調査を継続している今回の天王寺丘陵のような遺跡もある。

これら様々の調査状況のものを、同じ方法に則つて「総括」していくことは難しい。したがって、調査の状況に応じた「総括」の方法を、それぞれの状況によって臨機応変に考えていくことが何よりも大切であると考える。

### 4 総括の方法

以上のことから、天王寺丘陵における発掘調査の「総括」を次のように位置づける。まず本書に総括編を置くのは、本書が同一事業にかかる天王寺丘陵地内発掘調査の最終次に相当するためである。先述のように、基本的に年度単位で提示される断片的な発掘調査成果をまとめる目的を第一とする。

本編には、「総論」と、「各論」に相当するものを作成することとした。「総論」は、全時代を通じた調査区の全体像を見ていくという作業である。「各論」は、当該調査の中心となる時期に焦点を当て、基礎的な検討を行う作業である。

「各論」では、弥生時代後期・古墳時代末期～古代、中世の3時期に関する問題を扱った。この3時期は、今回の事業地内に万遍なく見られるものであり、この場での総括が妥当と考えたものである。なお小谷古墳群の総括は、最も良好な部分が見られた第6・7次調査区の報告書（天王寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VI 三重県埋蔵文化財センター 2005年）に記載することとした。併せて参照されたい。

本編は、行政発掘調査報告書における「総括」のあり方に関する、ひとつの方法的模索である。総括の方法については今後も検討を加えていく予定である。

（伊藤）

## II 天花寺丘陵における遺跡の変遷

### 1 天花寺丘陵とその周辺の遺跡変遷

今回の道路改良工事に伴う発掘調査で対象となつたのは、天花寺丘陵部の遺跡では、清水谷遺跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群・天花寺中世墓群・天花寺城跡・天草寺旧境内遺跡がある。前述のように、同事業による発掘調査は丘陵南北の低地部の調査でも実施しており、また、別事業による天花寺丘陵内外の調査もある。

まず、天花寺丘陵とその周辺で実施された発掘調査で明らかとなっている遺跡の時代別変遷を概観しよう（第17表）。もちろんこれには、発掘調査の実施された箇所の偏在性も幾分含まれているが、おおまかに傾向は把握できると思われる。

まず、旧石器～縄文時代にかけての遺跡は、丘陵部を中心に展開し、縄文後期から弥生前期にかけて低地部の遺跡が急増していることが指摘できる。つぎに弥生時代は、主に低地部を中心に遺跡が広がるもの、弥生後期頃には再度丘陵部に生活の場が求められていると考えられる。しかし、それは比較的短い期間で終息し、古墳時代前期には再度低地部での活動が活発化すると見られる。古墳時代前期以降、生活の場は低地部に集中するようになっている。

以上の傾向は、これまでにも多くの地域で見られる傾向であるが、天花寺丘陵を考察するに当たっての基本的認識事項として確認しておく。

### 2 天花寺丘陵東部の遺跡変遷

天花寺丘陵周辺部における以上のような状況を念頭に置き、つぎに天花寺丘陵東部の遺跡変遷を、時代を追って見ておこう。

#### a 縄文時代

草創期 今回の事業による一連の発掘調査で確認された最も古い遺物に、有茎尖頭器がある（小谷赤坂第6次）。その他の状況は不明である。

早期 早期末頃の土器がいくつか確認されており、最も良好なのは高山寺式の深鉢である（小谷赤坂第4次）。これらは、いずれも遺構には伴わず、散在している。なお、1987年に調査された馬ノ瀬遺跡で

は、早期神宮寺式土器を伴う陥穴が確認されている<sup>④</sup>。当該時期の天花寺丘陵は、概ね「狩猟の場」として把握できよう。

前期 前期の状況も明確ではない。ただ、当該時期に相当する可能性がある块状耳飾が1点出土している（小谷赤坂第1次）。

中期～後期 中期は、前半の状況は不明。中期後半から後期前半にかけては、若干の土器が確認されている（小谷赤坂第6～8次）。遺物の散布範囲は丘陵東部に偏っているように見える。

晩期 晩期末半は不明。最末期である馬見塚式期の土器棺墓が1基確認されている（小谷赤坂第8次）。これは、続く弥生時代前期との関連で考えられる。

#### b 弥生時代

前期 前期古段階は不明。中段階～新段階にかけて、住居跡（小谷赤坂第8次）・土坑（小谷赤坂6・7次）があり、生活痕が確認される。丘陵南部では当該時期の遺構・遺物は全く確認されていないため、当該時期の生活域は丘陵東部に限定されていたと考えられる。

中期 中期前葉から中葉にかけての状況は不明。この時期の天花寺丘陵内は、生活域としては利用されていなかったものと考えられる。なお、天花寺丘陵の北麓にあたる片野遺跡では当該時期の遺構が確認されている。

中期後葉になると、前出の馬ノ瀬遺跡で竪穴住居が確認されているため、天花寺丘陵内は再び居住域として用いられていると考えられるが、その規模は小さい。

後期 後期前半は、大規模な集落遺跡が形成される時期である。集落を画する環濠が西部で2条（清水谷第3次）、北部で2条（小谷赤坂第8次）確認されている。その内部では竪穴住居43棟と掘立柱建物4棟が確認された。建物は、北群（小谷赤坂第8次）・東群（小谷赤坂第6・7次）・西群（小谷赤坂第1・4・5次、清水谷第3次）に大きく区分でき、西群はさらに2～3の小群に区分できる可能性がある。なお、4棟の掘立柱建物は、（小谷赤坂第5次、

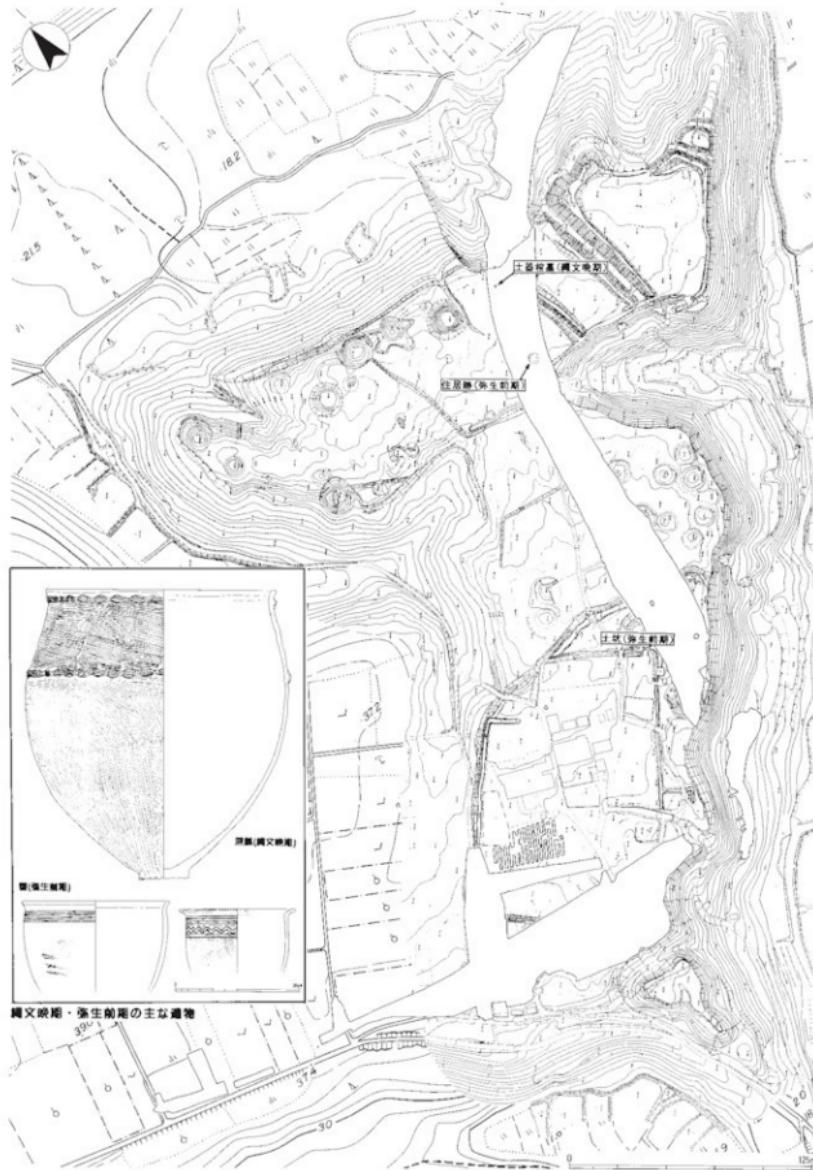
時代	石器	縄文時代					弥生時代			古墳時代			古代			中世			近世	文献	
		草創	早	前	中	後	晚	前	中	後	前	中	後	飛鳥	奈良	平安	前	中	後		
丘陵部 東南麓	薬師寺北裏遺跡													△			○			24	
	天花寺北瀬古遺跡						○	○	○	○	○	○	○	△	○	△	○	○	○	24-25	
	天花寺魔寺 (参考)													●	○	○				10-11	
	清水谷古墳群													●						6	
	清水谷遺跡	△						○						○						9	
	小谷赤坂遺跡	△	○	○	?	○	○	○	●	●				△	●	○	○			7-8+ 16-23	
	小谷古墳群													●	●	△				16-23	
丘陵部 中部	天花寺中世墓群																○	●	○	○	19
	天花寺城跡																	○		16-23	
	天草寺旧境内遺跡																	●		18	
	小谷A遺跡						△													28	
	馬ノ瀬古跡 (参考)		○				△		●											9	
	馬ノ瀬古墳群 (参考)													○	●					9	
	西野遺跡 (参考)								○					○	○	○				9	
丘陵部 西北麓	蛭田遺跡						△	△	△	△	○	○	○	●	●	△	△	○		12+ 26-28	
	片野遺跡 (参考)						○	○	○	●	●			○	●	●	○	○		2+3+ 4-13	
	平生遺跡 (参考)													●	●	○	●	○		5-29	
	鳥居本遺跡 (参考)						●	●	●	●				●	●	○	○	○		1-14+ 15	

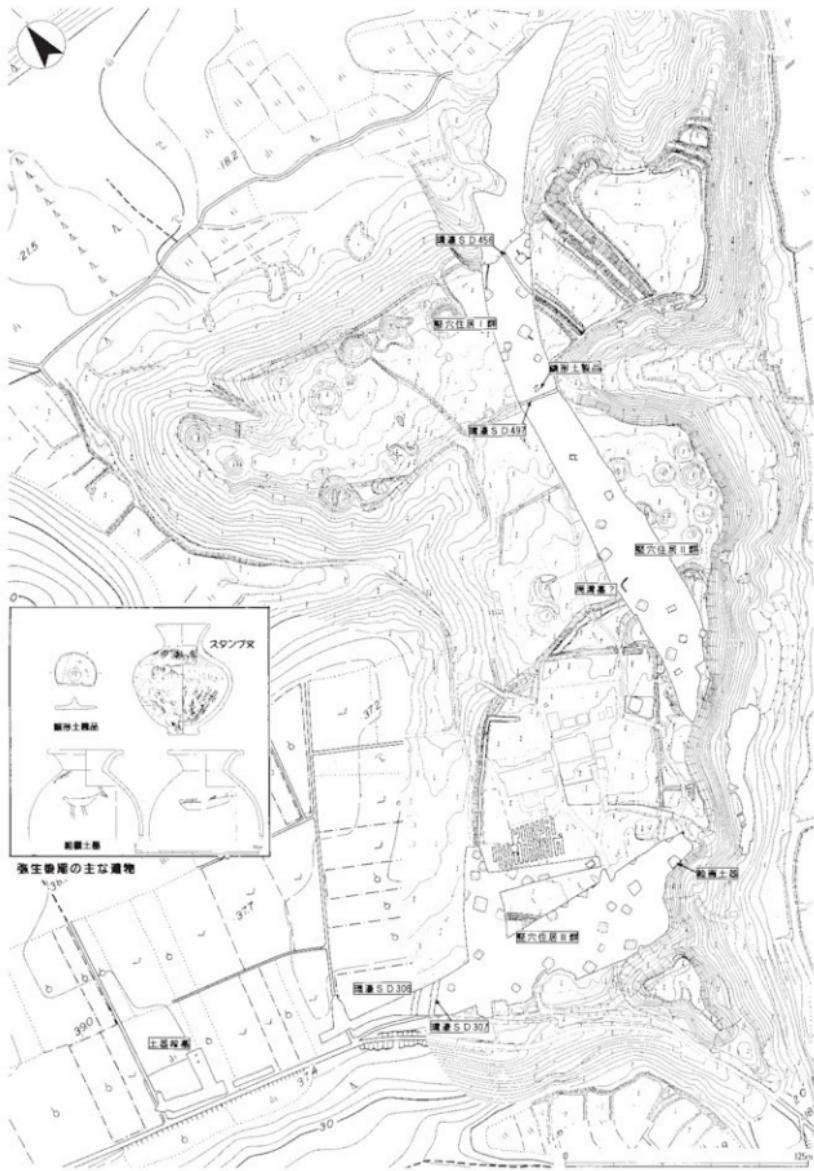
第17表 天花寺丘陵界隈の遺跡変遷

◎…多い ○…あり △…少しあり 空欄…なし

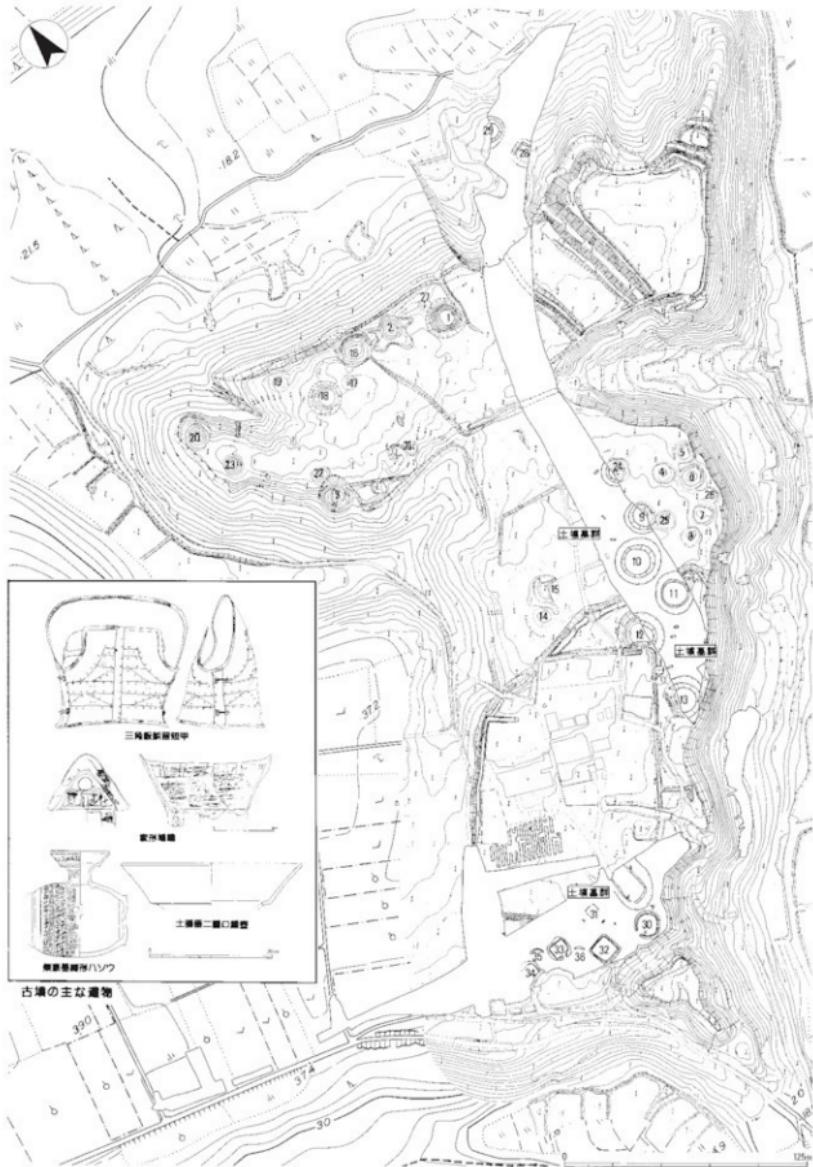
## 【文献一覧】

- 1 一志町教育委員会 馬屋本遺跡発掘調査報告 (1975年)
- 2 一志町教育委員会 片野遺跡発掘調査報告 (1986年)
- 3 一志町教育委員会 片野遺跡第三次発掘調査報告 (1989年)
- 4 一志町教育委員会 片野遺跡IV (2002年)
- 5 平生遺跡調査団 平生遺跡発掘調査報告 (1976年)
- 6 姫野町教育委員会 清水谷遺跡発掘調査報告 (1999年)
- 7 姫野町教育委員会 小谷赤坂遺跡2次、3次調査発掘調査報告書 (2003年)
- 8 姫野町教育委員会 平成13年度姫野町文化財調査概要 (2002年)
- 9 一志町・姫野町・遭跡調査会 天花寺山 (1991年)
- 10 三重県教育委員会 昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 (1980年)
- 11 三重県教育委員会 昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 (1981年)
- 12 三重県教育委員会 昭和56年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 (1982年)
- 13 三重県教育委員会 片野遺跡発掘調査報告 (1985年)
- 14 三重県埋蔵文化財センター 近畿自動車道(久居-勢和) 埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊5 (1991年)
- 15 三重県埋蔵文化財センター 近畿自動車道(久居-勢和) 埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊10 (1991年)
- 16 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告 (1996年)
- 17 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告II (1997年)
- 18 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告III-1 (2005年)
- 19 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告III-2 (2002年)
- 20 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告IV (2000年)
- 21 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告V (2000年)
- 22 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告VI (2005年)
- 23 三重県埋蔵文化財センター 天花寺丘陵内遭跡群発掘調査報告VII (2005年)
- 24 三重県埋蔵文化財センター 天花寺北瀬古遺跡 (第1次)・薬師寺北裏遭跡発掘調査報告 (1999年)
- 25 三重県埋蔵文化財センター 天花寺北瀬古遺跡 (第2次) 発掘調査報告 (2001年)
- 26 三重県埋蔵文化財センター 堀田遺跡 (第3次) 発掘調査報告 (1996年)
- 27 三重県埋蔵文化財センター 堀田第3-5次調査 (2003年)
- 28 三重県埋蔵文化財センター 堀田第6次調査 (2005年)
- 29 三重県埋蔵文化財センター 平生遺跡発掘調査報告 (1994年)





第46図 主要遺構配置図（弥生時代後期）（1：2,500）



第47図 主要遺構配置図 (古墳時代) (1 : 2,500)

6～7次、8次)。棟持柱が明確ではないものも含まれている。

墓は、西部環濠の西側(集落の外側にあたる)で、土器棺墓が1基検出されている(清水谷第4次)。また、竪穴住居東群付近には方形周溝墓の可能性がある溝が見られる(小谷赤坂第6・7次)。確認された墓はこの2基のみである。この2箇所、つまり、環濠内部の中央付近と、環濠外部西側に、この時期の葬地が存在していた可能性がある。

出土遺物にも、船と鹿の線刻がある壺(小谷赤坂第4次)、スタンプ文のある壺(小谷赤坂第8次)、鏡形土製品(小谷赤坂第8次)など、興味深いものがある。

しかし、この大規模集落も、後期後半に至ると突然廃絶している。後期後半の遺構・遺物は、近隣ではほとんど確認されていないが、片野遺跡付近か、天花寺北瀬古遺跡付近に存在する可能性がある。

#### c 古墳時代

前期 古墳時代前期の遺構・遺物は明確ではなく、集落は形成されていないと考えられる。前期前半の集落は、丘陵東麓の天花寺北瀬古遺跡(第2次調査区)付近に想定される。また、前期後半は、丘陵北麓の堀田遺跡が「マツリ」の場として機能していた可能性がある。

なお、墳墓群については丘陵内に設けられた可能性がある(小谷赤坂第1次)が、出土遺物が少なく、明確ではない。また当該期には、丘陵西部に西野古墳群や、南部に筒野1号墳が形成されている。

中期 前期と同じく、集落跡は明確ではない。丘陵東麓の天花寺北瀬古遺跡、北麓の堀田遺跡では、当該期の土器類が出土しており<sup>6</sup>、近隣に集落の存在する可能性がある。

墳墓は、小谷赤坂古墳群と小谷古墳群が中期末頃から形成されはじめめる。当初は方墳(小谷赤坂2号墳;小谷赤坂第1次)と埴輪列を伴う円墳(小谷13号墳;小谷赤坂第6次)がある。とくに、小谷13号墳は三角板紙留短甲をはじめとする豪華な副葬品を伴う古墳で、被葬者は当該期のかなりの有力者と想定される。

なお、中期前半の古墳は、丘陵西部の片野池古墳群がある。

後期 小谷古墳群が引き続き形成される(第6～8次)。当古墳群は木棺直葬を主体としたものである。また、古墳の形成は6世紀後半頃までと考えられるが、7世紀前半頃までは単独あるいは簡易な周溝を伴った木棺墓が形成され続けている(小谷赤坂第1・5次)。なお、当該期の横穴式石室を主体とする古墳が、丘陵西部の西野古墳群付近に見られ、西野5号墳からは豪華な馬具が出土している<sup>7</sup>。

丘陵東麓の天花寺北瀬古遺跡では当該期の土器や焼土坑が確認されており、この付近に集落域があつたものと思われる。

#### d 古代

飛鳥期 7世紀代を飛鳥期とする。当該期の前半は、丘陵部に墳墓が形成されている(小谷赤坂第1・5次)。後半では、丘陵部の遺構・遺物は明確ではないが、丘陵北麓の堀田遺跡で多量の土器類が確認できる。

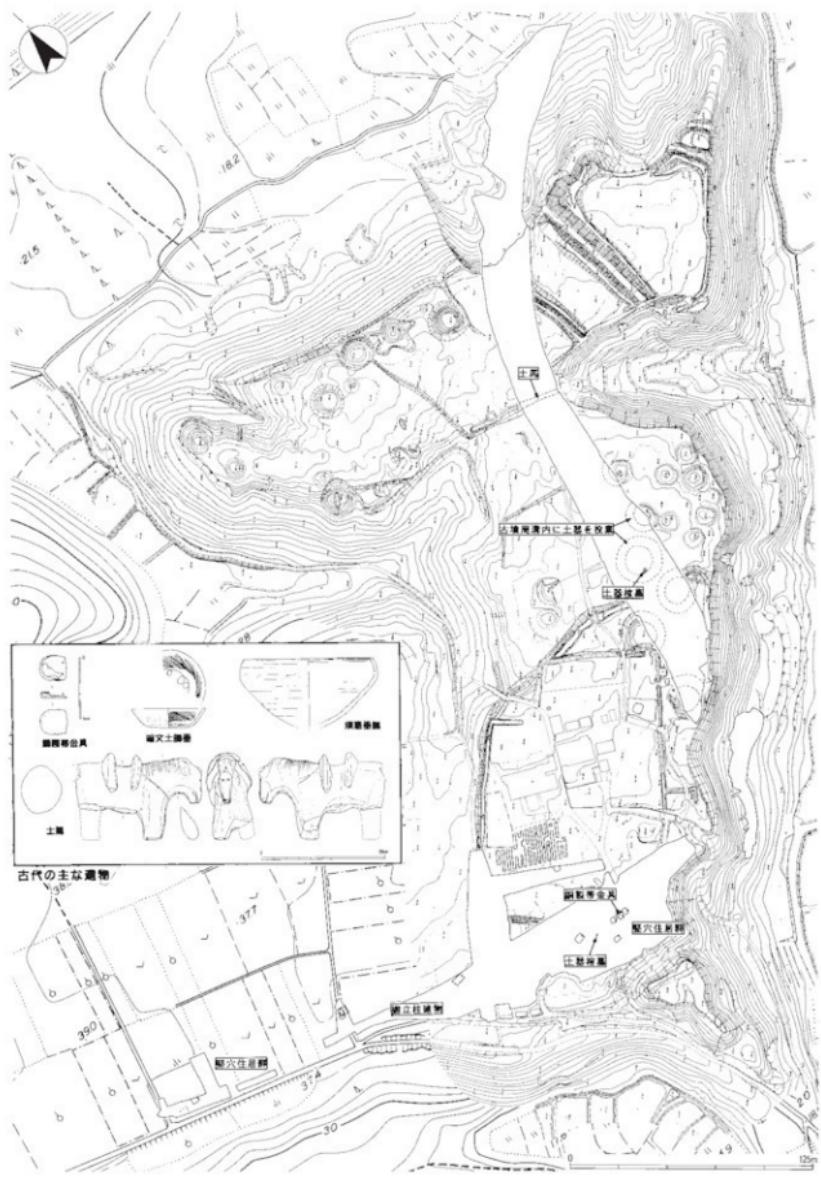
奈良期 丘陵部に三たび集落が形成される(小谷赤坂第1・5次、清水谷第3・4次)。集落域は、丘陵南部を中心とし、竪穴住居・掘立柱建物が確認できる。また、土器棺墓もある(小谷赤坂第1次)。北部では、集落は明確ではないが、古墳の周溝に土器類を投棄したり(小谷赤坂第6・7次)、土馬の出土もある(小谷赤坂第8次)ことから、集落の見られない場所も何か意味のある場所であったと考えられる。

飛鳥期から奈良期にかけては、丘陵東麓に寺院(天花寺魔寺)が<sup>8</sup>、南部の丘陵や堀田遺跡には都衙閑連施設の存在が考えられるので、丘陵部で確認されたこれらの集落は、寺院や都衙との関係でも見ていく必要がある。

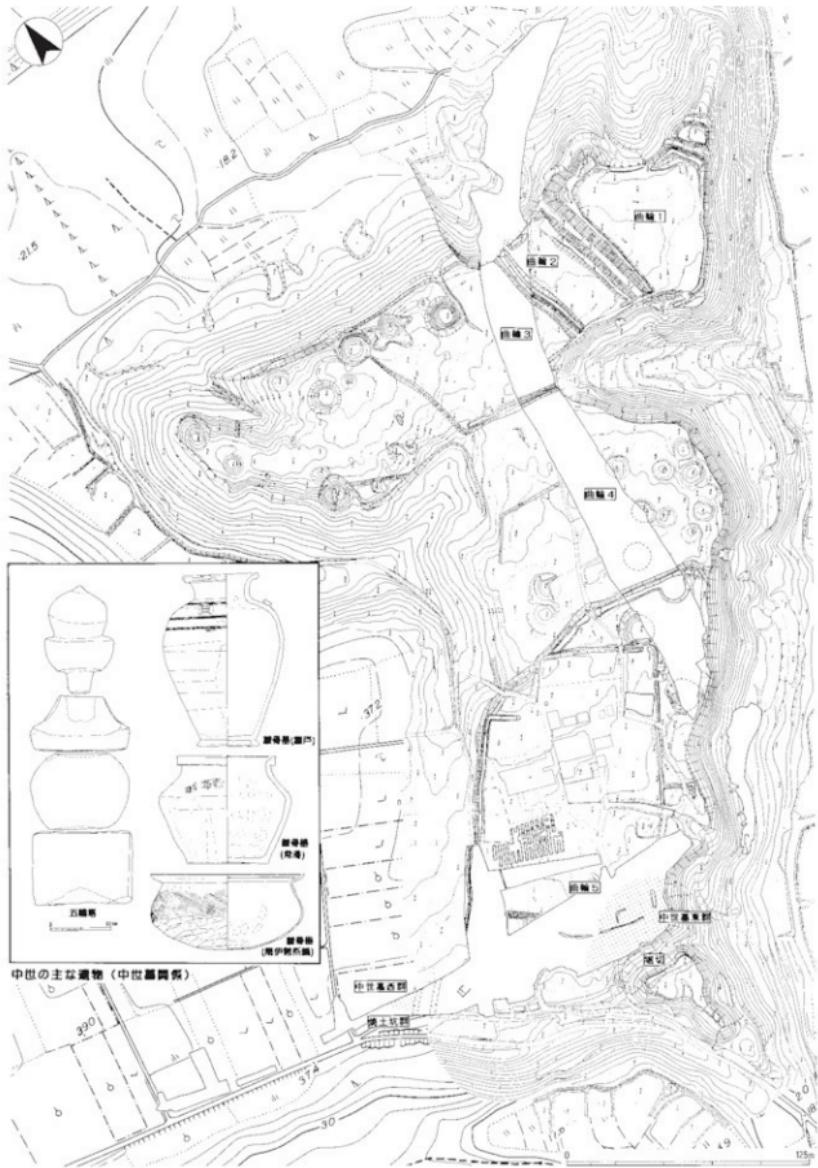
平安期 平安期の遺構としては、古墳の墳丘上に作られた土器棺墓(小谷赤坂第6・7次)がある程度である。ただし、綠釉陶器や土器類の出土は見られる(小谷赤坂第6・7次)ので、何らかの施設があつた可能性もある。

#### e 中世

前期 12世紀代の状況はよく分からず。13世紀中葉頃に、天花寺中世墓群内には土壙墓が形成されるが、この段階ではまだ単独墓に近い状況である(小谷赤坂第4次)。また、斜面部からも少量の土器が



第48図 主要遺構配置図（古代）（1 : 2,500）



第49図 主要遺構配置図（中世）（1：2,500）

出土しているが、その意味は不明である（小谷赤坂第8次）。

13世紀後半頃から、天花寺中世墓群に蔵骨器を伴う中世墓が形成されはじめ、次第に群をなすようになっている。

中期 天花寺中世墓群が引き続き形成され続けてい（小谷赤坂第1・4次）。14世紀代のものは瀬戸産・常滑産の陶器類を中心としており、14世紀中葉以降は土師器鍋がそれに加わる。また、外部施設として、15世紀中葉頃から五輪塔と石組が見られる。

後期 天花寺中世墓群の形成は、16世紀前半頃まで継続すると考えられる（小谷赤坂第1・4次）。それと併行して、15世紀末頃から天花寺城跡の造成がはじまると考えられる（天花寺城第1～8次）が、曲輪内からの出土遺物は極めて少ない。城の南部に当たる曲輪5は、やや歪な楕円形を呈したもので、天花寺城の当初曲輪と考えられる。曲輪2では、調査前の踏査・測量時には認識できなかった北へ開口する虎口が確認された（天花寺城第8次）。

天花寺城は、前述の中世墓群と一時期重複していると考えられる。

#### f 近世

17世紀後半頃に、天草寺が当地に創建される。当初は東西約100m、南北約140mの、小規模な土塁を伴った方形の境内を呈していた（小谷赤坂第1・4・5次）。なお、境内の北西部は、天花寺城跡曲輪5の土塁・堀の影響で、やや歪んだものとなっている。18世紀頃には、境内南東部付近に礎石絆を埋納した道が確認できる（小谷赤坂第4次）。

### 3 天花寺丘陵の遺構変遷

以上の状況を、遺構が確認されている主な時代について、変遷を見たのが第45～49図である。天花寺丘陵東部遺跡群の中心となる時期は、①縄文時代晩期から弥生時代前期、②弥生時代後期、③古墳時代中期～後期、④奈良時代、⑤中世後期、⑥近世、の6時期があるといえる。このなかでも、②弥生時代後期、③古墳時代中期～後期、⑤中世後期、の3時期がとくに目立っている。

弥生時代後期の状況は、周辺の遺跡と比較すると、とくに特徴的である。近隣の天草寺北瀬古遺跡・片野遺跡など、天花寺丘陵東部の遺跡が盛行する時期に衰退しているようである。遺跡は、その場単独の存在ではなく、ヒトの移動・移住を伴うものであることを端的に示していると考えられる。

（伊藤）

#### 〔註〕

- (1)一志町・猪野町遺跡調査会 天花寺山（1991年）
- (2)一志町教育委員会 片野遺跡発掘調査報告（1986年）・ 片野遺跡第三次発掘調査報告（1989年）・ 片野遺跡IV（2002年）・ 三重県教育委員会 片野遺跡発掘調査報告（1985年）
- (3)三重県埋蔵文化財センター 堀田第6次調査（2005年）
- (4)三重県埋蔵文化財センター 堀田第3～5次調査（2003年）・ 天花寺北瀬古遺跡（第2次）発掘調査報告（2001年）
- (5)前掲註1文献
- (6)前掲註1文献
- (7)三重県教育委員会 昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告（1981年）
- (8)伊藤裕偉「ふたつの「こおりいち」－古代一志都家に関する覚書－」（ 南宮歴史博物館研究紀要 11 2002年）

### III 天花寺丘陵の後期弥生土器

#### 1 土器の様相～概観～

小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡における後期弥生土器は、大きくは尾張山中式併行期およびその直前期に相当する土器群である。尾張との併行関係を概略的に示せば、近年設定された八王子古宮式から山中Ⅱ式2段階（山中式後期前半）までに併行する。また天花寺丘陵では、いわゆる欠山式系の深手で内彎する高杯が全く見られない。欠山期、すなわち尾張編年の巡間I式<sup>6</sup>に至るまでの間で終息していることは明らかである。

天花寺丘陵の後期弥生土器は、大きくは東海地域の一様相と見ることのできる一群である。しかし、言うまでもないことであるが、形態やその変遷が尾張の状況と完全に一致することはない。ここでは、天花寺丘陵の土器群が持つ特長を積極的に評価し、当該期の地域様相として「天花寺式」を提示しておきたい。

#### 2 形式

まずは、小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡から出土した後期弥生土器の主なものについて、形式分類を簡単に行っておく（第50図）。

高杯 3つの形態がある。

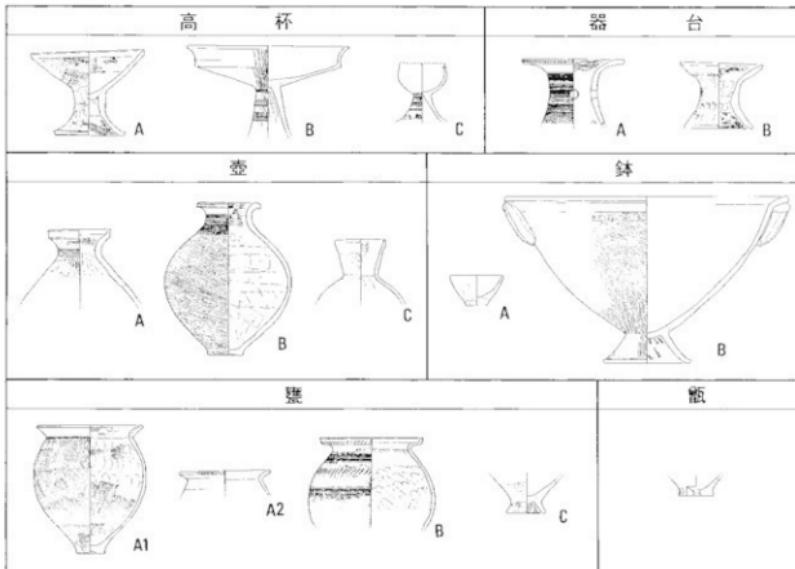
高杯Aは楕円形の杯部を持つもの。大形のものと小形のものが存在する。新しい段階で出現する「楕円形高杯」は、高杯Aの系統か、あるいは高杯Aと高杯Cの融合形態と考えられる。

高杯Bは、杯部が屈曲して開くもの。脚柱部には櫛描横線文が施される。「山中式」の最大の特徴といえるものである。

高杯Cは口縁端部が内彎するもので、「ワイングラス形」や「ブランデーグラス形」と称されるものに相当する。

壺 大きく3つの形態に分ける。

壺Aは受口（内彎）口縁のもの。基本的には弥生



第50図 天花寺丘陵における後期弥生土器分類 (1 : 8)

時代中期後葉の伝統を引き継いでいるものと把握する。

壺Bは口縁部が外反して開くもの。いわゆる広口壺である。なお、口縁端部を垂下・拡張するものについても、ひとまずこの範疇で把握する。

壺Cは頸部の長い、いわゆる長頸壺。近畿地方で見られる長頸壺に類したものもあるが、出土は稀である。

器台 柳描文や浮文などによる施文が見られるものを器台A、無文のものを器台Bとする。いずれも量的には少ない。

鉢 小形のものを鉢A、大形のものを鉢Bとする。いずれも出土例は少ない。鉢Bは把手付で脚台が付くもので、1点のみ出土している。

甕 大きく3つの形態に分ける。

甕Aは短く外反する口縁部のもので、無文のものを甕A1、口縁端部に刻目文のあるものを甕A2とする。两者を「甕A」としてまとめたのは、器形や調整手法の点で、相互の関連が密であると判断したことによる。

甕Bは受口状口縁となるもので、いわゆる「近江系」のもの。素地や調整・施文の状況から、いわゆる「近江系」純粹のものと、当地でのアレンジが加わっているものとに区分できるようであるが、ひとまず同じ範疇で把握する。

甕Cは脚台部の付くものとするが、全体形を知りうるものは、当遺跡では確認できなかった。

瓶 底部に焼成前穿孔を施すものを瓶とする。全体形をうかがい知るものは出土していないが、おそらくは鉢形ないしは甕形を呈するものと考えられる。

### 3 変遷

つぎに、天王寺丘陵の後期弥生土器を考える際のポイントについて触れておく。

まず、伊勢における「山中式の様相」の認定基準である。これは、赤塚次郎氏の指摘の通り、脚部外面に柳描横線文<sup>1</sup>を多用する高杯Bの成立によって設定するのが妥当のようである。高杯Bの構成要素は、続く欠山期（尾張廻間I式）まで継続する。山中式の成立とは、地域や時空を越え、三次元的に様相を規定したと言う点で、極めて画期的な意味を持

たせる必要があると考える。言うまでもなく、伊勢もこの様相に含まれる。

これと表裏をなす事柄として、弥生中期の様相と認識できる事項が、どの程度遺存するかも注目できる。高杯Bの出現は、様式上は画期として認定できるとしても、実際の調査事例としては漸移的な成立である。その中で様式的画期を見いだすのは困難であるが、何らかの兆候を把握しておきたいと思う。

さらに、受口状口縁を呈する、いわゆる「近江系」甕（甕B）がどの段階で安定的に「参入」しているのかにも注目したい。甕Bは、伊勢中部では弥生時代後期に一定量存在することが、当遺跡や六大阪遺跡などの調査から指摘されている<sup>2</sup>。この特徴が、弥生時代後期のどの段階で確認できるのかは、非常に重要な意味を持つと考えられる。

以上を主な注目点として、天王寺丘陵の後期弥生土器を第51図のように変遷するものと把握した。時期区分は、次のように見ておく。

#### 天王寺I式

中期弥生土器の様相を色濃く残す段階を、天王寺I式土器とする。2段階に細分が可能で、I-1にはS K 362・S X 386（6・7次）が相当し、I-2には、S H 11（1次）、S H 284（5次）、S H 388（6・7次）などが相当する。

#### 天王寺II式

広義には、尾張の山中式に併行する土器群である。1~4の4段階に細分する。

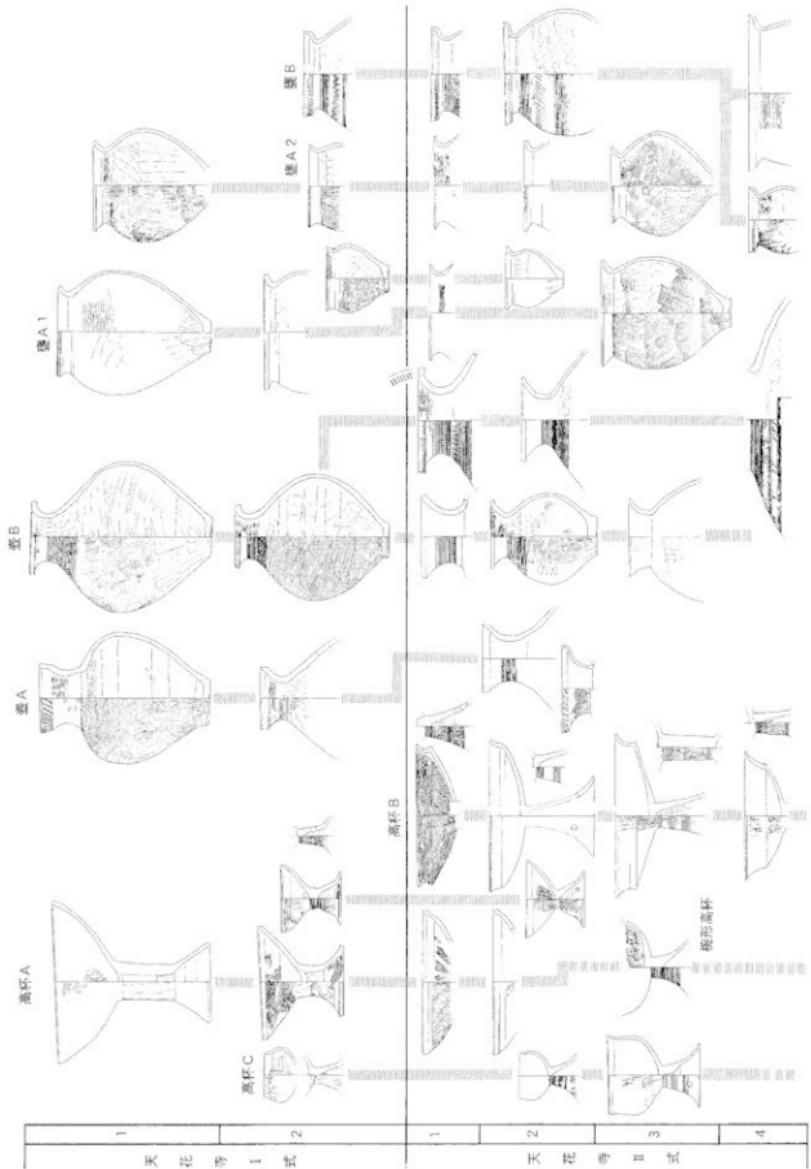
I-1には、竪穴住居ではS H 114（4次）、S H 353（6・7次）、S H 454・469（8次）が、土坑ではS K 27（1次）がある。

I-2には、竪穴住居ではS H 36（1次）、S H 63（1・4次）、S H 269（4次）、S H 273・274・288（5次）、S H 344・390（6・7次）、S H 485・531（8次）、環濠ではS D 307（5次）がある。

I-3には、竪穴住居ではS H 14・59（1次）、S H 223（4次）、S H 279・282・283・311（5次）、S H 466・475（8次）、環濠ではS D 456・497（8次）がある。

I-4に相当するものは少ない。竪穴住居S H 22（1次）が相当する。

以上の状況を見ると、竪穴住居はI-2段階から



第51図 天花寺丘陵における後期弥生土器編年 (1 : 8)

はじめり、環濠はII- 3段階には概ね廃絶する、という状況と考えられる。つまり、天花寺II- 1- 3段階が集落の最盛期、ということになる。

つぎに、主な器種毎の変遷を、第51図に即して見ていく。

壺 变遷図として示したのは、壺Aと、壺Bのうち、頸部に櫛描横線文を施す一群である。このうち壺Bが、比較的系統立てて追える。大きな流れとして、頸部断面形が緩やかな弧状を呈するものから、「く」の字形に屈曲するものへと変化していることが指摘できる。壺Bでは、口縁端部付近から短く外側へ屈曲していたものが、次第に口縁部全体が外反して聞くものとなっている。頸部形態の変遷は漸移的だが、II- 1段階あたりを変換期と考えることができる。

高杯 高杯は、高杯Aが当初から見られ、高杯Bの発生する段階をII- 1段階とした。高杯Aは、I- 2段階で口縁端部に面をなし、その傾向がII- 2段階まで継続するものと考えられる。その後の展開については、断定はできないものの、欠山期以降に見られる椀形高杯へとつながっている可能性も考えられる。

高杯Cは、I- 2段階から見られる。II- 3段階以降は、あるいは高杯Aと融合し、椀形高杯となっている可能性もある。

脚柱外面の櫛描横線文は、I- 2段階から出現し、II- 4段階以降も継続して存在するものと見なされる。この櫛描文の成立については、頸部に同様の櫛描文を物壺Bの存在とも絡めて考える必要があるかも知れない。

甕 全時期を通じて平底甕を中心とする。脚台がある甕Cは、II- 1段階以降に散見される。変遷図に示したものは、いずれも平底甕である。

甕のなかで量的に中心となるのは甕Aで、とくに口縁部に文様を施さない甕A 1が主体である。大きな流れとしては、頸部が「く」の字状に明確に屈曲するものから、次第になだらかな屈曲のものへと変わっているようである。

甕A 1は、I- 1段階から見られる。I- 2段階からII- 2段階にかけては、小形のものも存在している。甕A 2はI- 2段階からII- 4段階まで確認できる。甕A 2に類似したものは弥生時代中期でも

見られるため、今回の調査で確認できなかったが、実際にはI- 1段階から存在すると考えられる。

受口状口縁をなす甕Bは、I- 2段階から見られる。I- 2段階からII- 2段階までのものは、いわゆる「近江系」とされているものに極めて近い。しかし、II- 4段階の甕Bは、やや厚手で地域的なアレンジが顕著なものである。これが時期的な変遷を示すのか、あるいは両者が併存しているのかは今のところ明確にはできないが、時間的な差異と認識してよいように思われる。

#### 4 天花寺I・II式の併行関係

天花寺I・II式における主要器種の変遷は、概ね以上のような状況である。これを、先述の赤塚次郎氏による尾張地域の編年観との併行関係を示すと、おおよそ次のようになる。

天花寺I- 1 …… 八王子古宮式

天花寺I- 2 …… 八王子古宮式- 山中I式- 1

天花寺II- 1 …… 山中I式- 1

天花寺II- 2 …… 山中I式- 2

天花寺II- 3 …… 山中I式- 3

天花寺II- 4 …… 山中II式- 1・2

また、伊勢地域の土器を総覧した上村安生氏の編年観<sup>3</sup>との併行関係は、おおよそ次のようになる。

天花寺I- 1・2 …… 伊勢V- 1

天花寺II- 1 …… 伊勢V- 2

天花寺II- 2・3 …… 伊勢V- 3

天花寺II- 4 …… 伊勢V- 4

さらに、第5次調査で示された時期区分<sup>4</sup>と対応させると、次のようになる。

天花寺I- 2 …… 第5次調査「天花寺1期」

天花寺II- 2・3 …… 第5次調査「天花寺2期」

天花寺II- 4 …… 第5次調査「天花寺3期」

#### 5 天花寺式の特徴

最後に、今回提示した「天花寺式」について、その特徴を述べる。

天花寺I式は、尾張八王子古宮式と比べて、高杯と壺に中期的様相を色濃く残しているのが最大の特徴といえる。とくに、頸部の屈曲が弱いこと（壺A・B）、内彌する口縁部を持つこと（壺A）、頸部に櫛

描横線文を施していることなどが注目できる。とくに、口縁部が大きく開かない壺Bの一群は、「当遺跡近隣の鳥居本遺跡」で良好なものが出土している。したがって、壺Bの特徴は、当地域近隣の特徴といえる。

裏では、天王寺I・II式を通じ、明らかに平底が主体である。この状況は、台付裏が主体である尾張とは対照的である。伊勢で平底裏から台付裏へと志向が転換するのは、後続する欠山式併行期（巡回I式併行期）であろうか。なお、当遺跡を含む雲出川流域は、S字状口縁台付裏の出現に大きく関わった地として注目されている「このような地域で、尾張山中式併行期に平底裏が主体であるという状況は、極めて興味深い状況といえる。

以上のような特徴は、尾張地域の八王子古宮式・山中式の様相と大局では一致するものの、微妙な違いも見受けられる。また、ほぼ同じ時期と把握できる伊勢南部の草山遺跡（松阪市）や大藪遺跡（伊勢市）の様相とも若干の異なりを持っている。したがって天王寺式とは、大きくは伊勢の地域的様相であり、さらにその小地域である雲出川流域の様相として把握できると考える。ただし、天王寺式が雲出川流域全体をカバーできる様相かどうかは今のところ不明である。したがって、現状では雲出川流域における部分域を示す土器相として把握しておく。

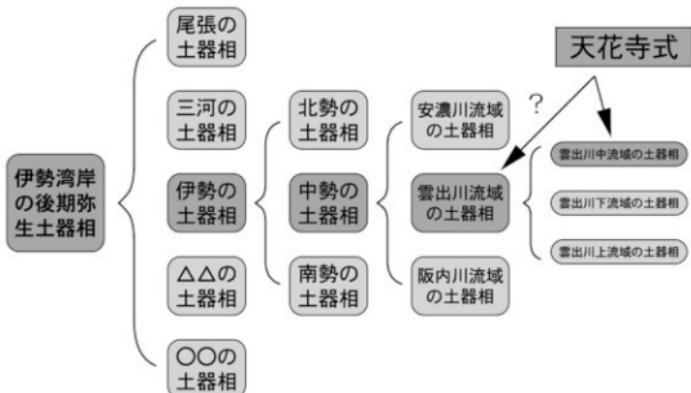
以上の関係を模式的に表せば、第52図のような関

係と認識している。

（伊藤）

〔註〕

- ①当該期における尾張の土器編年については、赤塚次郎「山中式土器について」（『山中遺跡（財）愛知県埋蔵文化財センター1992年』）および、同『瀬尾平野における弥生時代後期の土器編年』（『八王子遺跡 考察編 愛知県埋蔵文化財センター2001年』）にある。
- ②赤塚次郎「巡回式土器」（『巡回遺跡（財）愛知県埋蔵文化財センター1990年』）
- ③通常では横位に施文するものを「櫛描直線文」と呼称されている。しかし、縦位に施文するものも存在しており、これも通常では「櫛描直線文」と表現さざるを得ない。厳密に言えば、通常「櫛描直線文」と言われているものは側面形すなわち図示した状況からの表現であるが、工程的に見ればこの施文が「circle」であることは言うまでもない。その意味からは、縦位施文の方が「直線文」に相応しいともいえる。扇状文といった、幾分「マイナー」な施文にも名が付けられていることを踏まえれば、縦位に施す櫛描文にもそれ相応の名称が必要であると考える。そのため、ここでは側面観で横方向に施される。通常言われる「櫛描直線文」を、あえて「櫛描横線文」と呼称する。
- ④三重県埋蔵文化財センター「六太A遺跡発掘調査報告（2002年）」
- ⑤上村安生「伊勢・伊賀地域」（『（弥生土器の様式と編年- 東海編- ）木耳社 2002年』）
- ⑥川崎志乃「IV調査のまとめと検討 1 弥生時代」（『天王寺丘陵内遺跡群発掘調査報告IV 三重県埋蔵文化財センター 2000年』）
- ⑦志町教育委員会「鳥居本遺跡発掘調査報告（1975年）」
- ⑧赤塚次郎「土器様式の偏差と古墳文化」（『考古資料大観2 弥生・古墳時代土器Ⅱ 小学館 2002年』）
- ⑨松阪市教育委員会「草山遺跡発掘調査月報 No.1~11(1982~1985年)」
- ⑩三重県教育委員会「南勢バイパス埋蔵文化財発掘調査報告（1973年）」



第52図 後期弥生土器における天王寺式の位置

## IV 天花寺丘陵の後期弥生集落と住居

### 1 竪穴住居の単位群

推測される竪穴住居数 前述のように、小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡からは、弥生時代後期の竪穴住居が43棟、掘立柱建物が4棟確認されている。発掘調査成果から推測できる当該期の集落範囲は約57,000m<sup>2</sup>、そのうちの発掘調査面積は約14,000m<sup>2</sup>(清水谷遺跡の環濠以西を除く)なので、単純計算でも180棟ほど竪穴住居が形成されていた可能性がある。

竪穴住居の集中箇所 これらの竪穴住居は、調査区内で万遍なく認められたわけではなく、集中する箇所とそうでない箇所が見られる。竪穴住居の集中する箇所は、大きく見てI群～III群の3箇所がある(第46図)。

I群とII群との間では、当該期と考えられるピットは存在するものの、竪穴住居は空白域となっている。これは、ちょうどこの中央を環濠S D 497が横切っていることと無関係ではなかろう。おそらくは、環濠S D 497を境に、集落域が区画されているものと考えられる。

I群は、環濠S D 456の存在によって、大きく2つの小群に区分できるものと思われる。

II群では、竪穴住居は東向きの円弧状に並び、集落の中央部に「広場」を形成しているようになっている。なお、「広場」部分には、後に古墳群が形成されている。言うまでもなく、古墳と竪穴住居は全く時期的なつながりが無いが、竪穴住居跡を避けるように古墳が形成されているのは興味深い。おそらく、竪穴住居跡地の「窪み」を避けて古墳群が形成されたのであろう。

II群に見られた「広場」的スペースは、III群でも3～4箇所確認できるが、II群に比べれば小規模である(第46図)。この「広場」的スペースによって、III群は4小群ほどに区分できるものと思われる。

以上のことから、天花寺丘陵の後期弥生集落は、環濠という区画施設のなかに、大きく見て3つの単位群があり、それぞれの単位群は、さらに2～3の小単位群で構成されていると考えられる。1つの小単位群が血縁者などで構成されているとすれば、天

花寺丘陵の後期弥生集落は、複数の単位集団によって構成されている集落と考えられる。

### 2 竪穴住居群と環濠の関係

環濠の区画 当地では、環濠は4条確認されている。西端の2条(S D 306・307)と北部の2条(S D 456・497)である。これらは、いずれもつながりが不明なので、どのような状態で後期弥生集落が囲まれていたのかは推測の域を出ない。しかし、一応の認識は示しておくこととする。

まず、竪穴住居I群とII群との間にめぐるS D 497は、竪穴住居I群に近い位置に見られることから、I群を囲むための環濠と考えられる。S D 456は、I群がS D 497以北の少し狭い丘陵部に相当することからみても、I群をさらに細分するための環濠と考えるべきであろう。つまりI群は、二重の環濠が巡らされたエリアで、その最も内側の区域がI a群、外側がI b群と考えられる。

環濠S D 306・307は、どこまで続く環濠なのか分からない。調査時の想定では、S D 497に続くと想定された。実際、発掘調査によってS D 497が確認され、この想定が間違いではないことが証明されたが、この位置の環濠は1条のみである。

想定でしかないが、これら4条の環濠は、いずれも丘陵部を切断するのが目的で設定されたものではないだろうか。その意味では、丘陵部を二重環濠で区切るS D 306・307の持つ意味が最も大きいと思われる。S D 497は集落内部の竪穴住居I群とII群とを分けるもので、S D 306・307に比べれば弱いものと思われる。

調査区外の環濠？ なお、S D 306・307は、近代の開墾時まではその形状を保っていた。同じことはS D 497についても言える。小谷古墳群の付近には、現地形に溝状の落ちが見られる箇所がいくつかある(第46図)。これらが、弥生時代後期にまで遡る未発見の環濠を示している可能性もある。今後調査されることがあれば、注意が必要である。

### 3 竪穴住居の平面形態

天花寺丘陵における竪穴住居に見られる特長を、以下のように区分し、それぞれの組み合わせによって考えてみる。

平面形態 概ね正方形に近いものと、明らかに長方形を意識したものがある。

柱 4本柱（I）が主体である。他には、2本のもの（II）、無いもの（III）がある。

I類には、SH343のように、棟持柱があると考えられるものや、貯蔵穴付近の柱穴が片棟持となる可能性のあるSH282・344・454・475などもある。

これらは別類型にすることもできるが、ひとまずここに含め置く。

柱位置 竪穴住居の中程に据えられるもの（1）が多いが、コーナー付近のもの（2）もある。

付属施設 付属施設としては、とくに目立つものが無いもの（a）、ベッド状造構があるもの（b）、テラス状造構があるもの（c）がある。

貯蔵穴 貯蔵穴は、辺の中央に設けるもの（①）、辺の脇に寄るもの（②）、貯蔵穴が無いもの（③）に区分できる。

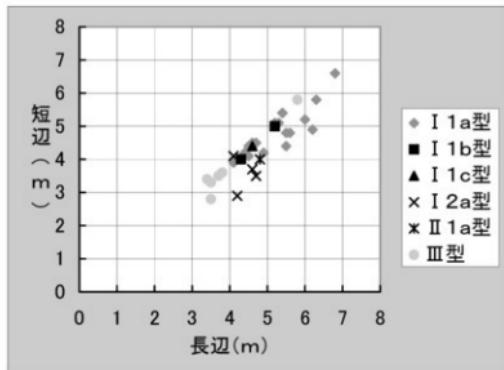
以上の個別分類を組み合わせることによって、つきのような建物類型を考えた（第54・55図参照）。

I 1 a 型 最も多いのがこの形態の平面正方形のものである。うち、貯蔵穴①は20棟で最も多く、貯蔵穴②はSH11など3棟である。基本的に全ての造構で壁周溝が認められる。また、なかにはSH475のように、住居外に続く排水溝を伴うものもある。

平面長方形のものはSH344・454の2棟がある。SH454では、住居外に続く排水溝がある。

この類型の炉は概ね建物の中心にあるが、詳細に観察すると、中央よりややずれた位置であることが認識できる。最も多いのはSH282・284のように、貯蔵穴とは反対側にずれるものである。火処位置の傾向として、注意しておきたい。

なお、全てのI 1 a型住居に見られるわけではないが、貯蔵穴の中や手前にピットのあるものが見ら



第53図 竪穴住居の規模

れる（SH282・344・454・475など）。このピットは、主柱穴間のちょうど中央に来ることから、このピットを含めて主柱は5本であった可能性が考えられる。5本柱の事例は、古くは绳文時代後期にもあるので、一応意識しておく必要があろう。

I 1 b 型 正方形のものとしてSH466、長方形のものではSH45がある。

I 1 c 型 唯一この類型に属するSH343は、住居の内面に板貼りを伴うものと考えられ、造構塙形と床面との間は板張り用の埋土が入るものと考えられる。棟持柱が明確なものこの造構のみであり、板張りと棟持柱とは連動していることも考えられる。

II 1 a 型 正方形のものはSH353が、長方形のものはSH385とSH356の2棟がある。

II 1 b 型 主柱穴が2本の竪穴住居は、SH63の1棟のみである。

III型 正方形の代表的なものとしてSH14やSH485がある。壁周溝は、SH14では見られず、SH485にはある。長方形のものにはSH40がある。

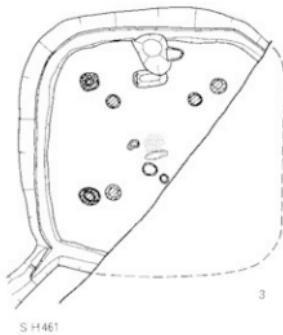
規模の比較 平面規模を比較したのが第53図である。ある程度類推できるものも含め、規模の比較ができるものは34棟である。

全体的な傾向として、一辺7mを越えるものは無く、一辺4～5.5m前後のものが主体となっている。最小のもので、一辺3m前後である。最も類型の多いI 1 a型（正方形+4本柱+辺中央の貯蔵穴+中

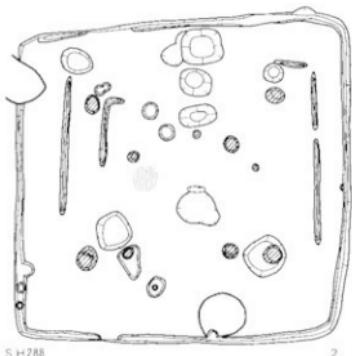
I 1 a型①(正方形)(1~5)



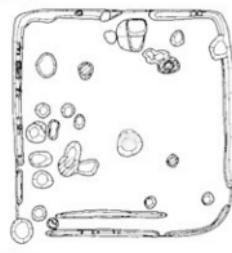
S H475



S H461



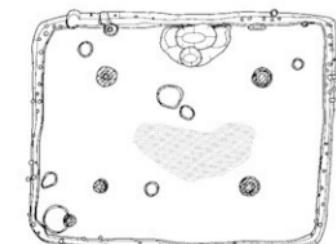
S H288



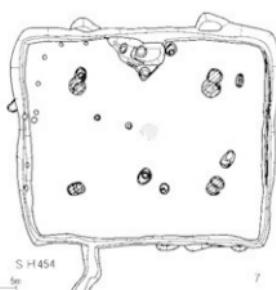
S H284



I 1 a型①(長方形)(6・7)

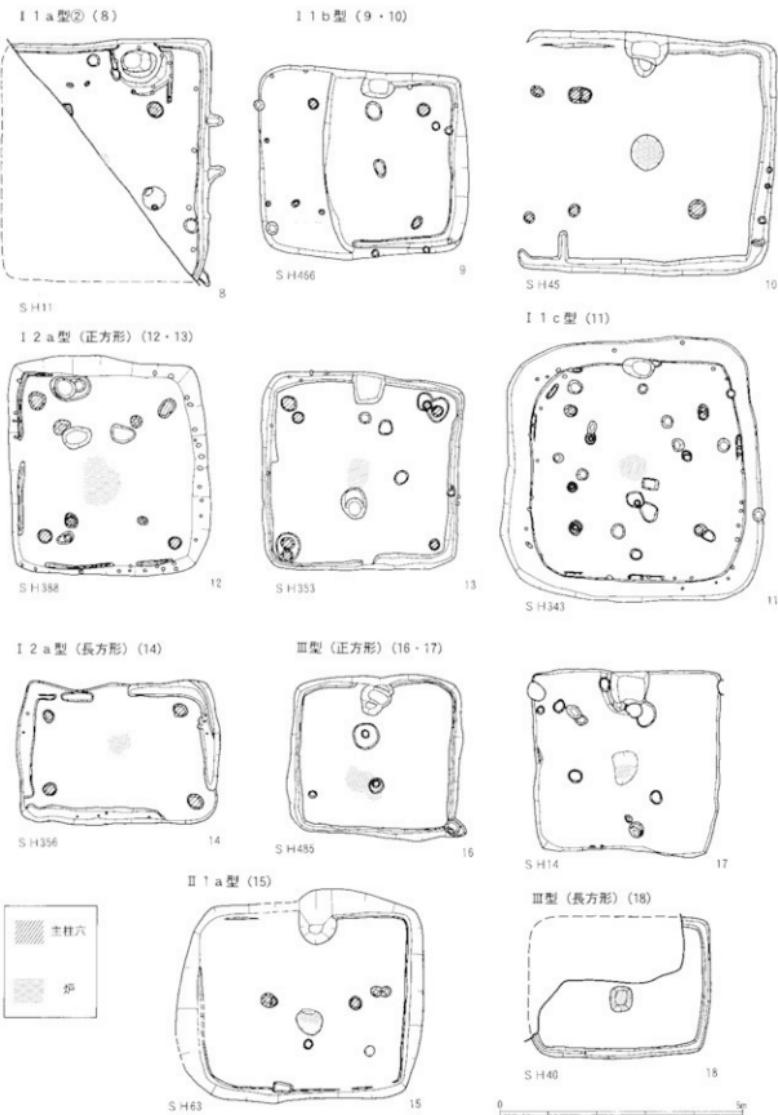


S H344



S H454

第54図 縱穴住居の形態分類 (1) (1 : 100)



第55図 墓穴住居の形態分類 (2) (1 : 100)

火炉)に大形住居が含まれている。この型は最小で4m四方であり、それほど小さいものが無いことも特徴といえる。

また、小さい規模のものはⅢ型、つまり主柱穴を持つないものに多いことが読み取れる。

面積で見ると、最も大形の住居はSH288で、約45m<sup>2</sup>、最小のものはSH40で、10m<sup>2</sup>である。面積は、26~30m<sup>2</sup>前後、17~21m<sup>2</sup>前後、12m<sup>2</sup>前後の大きく3者に分かれるようである。ただし、素数が少ないのにバラつきが大きいため、正確な傾向とまでは言えない。

**主柱穴数と上部構造の関係** 主柱穴が2本のSH63は、検出面からの深さが40cmとかなり深い。場所によって削平の度合いが違うであろうから一概には言えないが、SH63付近で確認した他の竪穴住居の深さがせいぜい120cm程度であるから、比較的深く掘らるべき必要があったと考えることができる。

想定されるのは、他の4本柱の竪穴住居と比べて、土壁部分が高いスタイルである。もしもそうだとすれば、この竪穴住居が築造された際には、一風変わった住居として天花寺丘陵の「ムラ人」に認識されていたものと思われる。

**特長ある竪穴住居とその意味** 天花寺丘陵では、I 1 b型とII 1 a型、すなわち、ベッド状遺構を伴う住居と2本柱の住居が、とくに注目できる竪穴住居である。

石野博信氏によると、2本柱の住居やベッド状遺構を伴う住居は、北部九州の弥生時代後期から古墳前期にかけての遺跡で多く確認される形態であるといふ<sup>①</sup>。天花寺丘陵では、いずれの形態も確認されている。

のことから、天花寺丘陵の後期弥生集落は北部九州と密接に関わっていた可能性を想定できるかも知れないが、出土遺物などにはそれを補強できる要素は確認できない。ここでは、北部九州との関係も考慮に入れつつ、資料の蓄積が必要なことを指摘するに止めておきたい。

#### 4 天花寺丘陵後期弥生集落の特長

天花寺丘陵における後期弥生集落について、いくつか検討してきた。最後に、当該時期の特長をまとめておく。

**成立・廃絶期** 成立は、弥生時代後期初頭で、廃絶は後期中葉頃。具体的には、欠山期(尾張の巡回Ⅰ式併行)直前に終焉している集落である。

天花寺丘陵の北麓にあたる片野遺跡(一志町片野)は、地形的に見て、当遺跡の前身集落である可能性が高い。しかし、天花寺丘陵を去った後、どこへと向かったのかはよく分からぬ。あるいは、片野遺跡へと再度戻っていた可能性があるかも知れない。大形住居と小形住居の複合による集落検出された竪穴住居は、規模や築造手法に違いが見られる。単一な景観ではなく、各種の上部構造が見られる弥生集落であったと想定される。

**複数集団のまとまり** 西部と北部では環濠が確認され、その内部は一定の完結した集落であるといえる。しかし、内部は3~4単位の竪穴住居群のまとまりがある。有機的に結びつきながらも、複数集団を内包した集落であったと考えられる。

**異系統竪穴住居の存在** 竪穴住居には、2本柱(II 1 a型)やベッド状遺構を伴うもの(I 1 b型)などがある。これらは、可能性として北部九州との関係が想定される。それをも念頭に置いた検討が必要である。

**鏡形土製品・絵画土器** SH223からは、鹿と船の絵を描いた土器が確認されている。また、北部の第8次調査区からは、鏡形土製品も出土している。絵画土器は丘陵崖際の位置にあり、平野部の眺望が良好な位置にある。鏡形土製品の類例も多くなく、三重県内では山奥遺跡(四日市市)に見られる程度である<sup>②</sup>。これらは、弥生集落における何らかの「マツリ」の要素を有したものとして評価できる。

(伊藤)

#### [註]

① 石野博信「古代住居のはなし」(吉川弘文館 1995年)

② 清水政宏「考察とまとめ」(山奥遺跡Ⅱ 四日市市教育委員会 2004年)

## V 古墳時代から古代への転換

### 1 古墳群と天花寺丘陵

天花寺丘陵は、古墳群が密集することで知られる。造営は古墳時代前期にはじまり、後期にまで継続して営まれている。古墳時代の当地はまさに「葬地」と呼べる場であったと考えられる。発掘調査の結果も、小谷古墳群第13号墳を筆頭に、極めて優秀な副葬品を持つものが多い。

天花寺丘陵における古墳群の変遷と意義については、別冊の「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告 VI」に詳しい。ここでは、7・8世紀を中心とした問題について触れておく。

### 2 古墳群の終焉とその後

小谷古墳群は、5世紀中葉頃の小谷31号墳が造営されることによって開始されていた。その後、7世紀前葉頃の小谷31号墳の造営を最後に、古墳群の造営自体は終焉を迎えていると思われる。

しかし、小谷赤坂遺跡第1・4・5次調査では、7世紀前半頃、田辺昭三氏による陶邑編年（以下、「田辺編年」）でいうT K 217型式併行期の土壙墓や土器棺墓が見られる。確認されたこの時期の土壙墓は、小谷31号墳を含め、10基である。これらは、小谷31号墳を除き、明確な区画施設を有しないもので、長方形の土坑に1・2個程度の須恵器と、稀に刀子を伴う程度の簡易なものである。

これらは、いうまでもなく古墳ではないものの、時期的には小谷古墳群と接続するものであり、当該地における墓域形成の観点からは一連のものとして位置づけることができる。つまり、天花寺丘陵における墳墓は、田辺編年のT K 217型式併行期を境として、古墳から土壙墓へと変わっている、と考えられるのである。

なお、当該時期の土壙墓と考えられる遺構は、清水谷古墳の周溝内などからも確認されている<sup>5)</sup>。当該期に古墳から土壙墓へと変換するのは、天花寺丘陵全体のこととして認識できるものと思われる。

ただし、当該時期の古墳は、近隣では五輪山古墳群（松阪市伊勢町）の例もあり、一般化するまで

には至らない。ひとつ想定できるのは、古墳から土壙墓への転換、あるいは古墳が消えた後も土壙墓のみが継続するという現象が、遺跡毎、あるいは地域毎で異なるのではないかということである。その場合、天花寺丘陵北麓に位置する堀田遺跡の状況が如実に示すように、極めて畿内色の強い当地の地域的特性が大きく影響していることも考えられる。

さて、田辺編年のT K 217型式墳に古墳から土壙墓への変換が見られることに関しては、清野陽一氏が検討を行っている<sup>6)</sup>。7世紀前半頃を前後する時期に相当するこの墳の時期的な特性については、ここで深く踏み込むための準備ができていない。しかし、天花寺丘陵で確認できた土壙墓とその他の遺構から、つぎのようなことが指摘できる。

①土壙墓の発生は、古墳群の形成と併行した時期に開始され、須恵器では田辺編年のT K 10型式併行期頃、現在の実年代観では6世紀前半頃から発生している。

②土壙墓は、古墳群の形成が終了する田辺編年T K 209型式併行期以後も継続して存在し、T K 217型式併行期にまでは確實に存在する。つまり、6世紀末か7世紀初め頃に古墳の造営が停止した後も、土壙墓は7世紀後半頃までは造成され続けていたと考えられる。

③土器棺墓は、S X 28は8世紀代、小谷9号墳の墳丘上で確認されたS X 363は8世紀末～9世紀前半代と考えられるものである。これらの遺構の存在から、土壙墓の造成が終了した後も、平安時代前半頃まで当地一帯は葬地として認識され続けたと考えられる。

### 3 奈良時代集落の意味

以上のように、天花寺丘陵部が長期にわたって葬地として認識されていたと考えた場合、8世紀後半代を中心とした竪穴住居・掘立柱建物による集落の存在は、逆に異様である。8世紀代の住居跡は、丘陵南部を中心に確認されているが、東部でも遺物はまとまって出土していることから、丘陵全体が8世

紀代に入々の生活の場であったことは間違いない。

この古代集落を考える際に重要なであろう遺物は、銅製帶金具・土馬・瓦類であろう。銅製帶金具は豎穴住居S H33（第1次）の埋土から出土したもので、官人の存在を想起させるものである。

土馬は、完全に埋没しきっていない状態であった弥生時代の環濠S D497内から出土している（第8次）。古代の段階でおも埋まりきっていない環濠に何らかの「境界」的な意味を見出し、ここでそういう「マツリ」を行ったことも考えられるのではないかだろうか。

瓦類は、少ないながらも調査区全体から万遍なく出土しており、軒丸瓦の形態からは、丘陵東麓の天花寺廃寺に関係するものと考えられる。

さて、天花寺廃寺については、発掘調査の成果から、7世紀後半から8世紀前半頃に造成されたものと考えられ、平安時代前半頃までは機能を維持していたものと考えられている<sup>①</sup>。したがって、天花寺丘陵の古代集落は、天花寺廃寺造営に伴うものとは考えにくい。

一方、天花寺丘陵の南部丘陵には、重圓文軒丸瓦を伴う中谷廃寺のほか、官衙遺跡の可能性が高い「筒野東皆跡」がある。この両遺跡は、一志郡衙に関係したものと考えられている<sup>②</sup>。時期的にこれらは、重圓文軒丸瓦の存在から、8世紀中葉以降のものと考えられる。

天花寺丘陵の古代集落の周辺には、以上のように多様な施設が存在している。天花寺丘陵の古代集落は、これらとの有機的な関連を有していると考えられる。特定の施設と結びついた集落とは断定できないが、とくに一志郡衙との関係には注意すべきかと思われる。

ただし、天花寺丘陵の古代集落を官衙関連と考えるにしても、時期的には8世紀後半を中心とした時期に限定されるものであり、その形成期間は短い。また、集落もまとまった広がりを示すわけではなく、散在的である。このような一過性の集落を、比較的盛行する当該時期の当地のなかでどのように位置付けるのか、課題は多い。

(伊藤)

#### [註]

- ① 田辺昭三 『須恵器大成』（角川書店 1980年）
- ② 一志町・嬉野町遺跡調査会 『天花寺山』（1991年）
- ③ 松阪市教育委員会「五輪山古墳群」（ 球道丹生寺一志塚及び県道合ヶ野松阪線道路改良工事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1980年）
- ④ 清野陽一「伊勢における古墳文化の終末－律令制成立期における伊勢国内の地域性理解にむけて－」（ かにかくに 八賀晋先生古稀記念論文集刊行会 2004）
- ⑤ S X363の土師器長胴瓶は、高宮編年の第Ⅱ期1～2段階に相当し、実年代較は当該編年による。高宮歴史博物館 高宮跡発掘調査報告 I（ 高宮歴史博物館 2001年）
- ⑥ 三重県教育委員会 昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告（ 1981年）
- ⑦ 伊藤祐偉「ふたつの「こおりいち」－古代一志郡家に関する覚書－」（ 高宮歴史博物館研究紀要 11 2002年）

## VI 天花寺城跡と中世の天花寺丘陵

今回の道路改良工事計画が提示された際に、可視的に確認された遺跡が小谷古墳群と天花寺城跡である。このうち、工事による破壊という代償を伴いながらも新たな知見を得ることができた天花寺城跡について触れておく。

### 1 事前測量調査とその成果

事前測量調査の意味 1995年度には、発掘調査の開始前に、事業地内も含めた天花寺丘陵東部の事前測量調査を実施した。調査は、㈱イビソクと委託契約を結び、担当職員と委託先担当者が現地確認を重ねながら図化作業を行った。これは、小谷古墳群および天花寺城跡の範囲確認も兼ね、発掘調査を行う範囲が、周辺部のなかでどのような位置にあるのかを認識しておく必要があると判断したためである。測量調査の成果 測量調査の結果、天花寺城跡については、次のようなことが指摘できるに至った。測量図の詳細については、天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告（三重県埋蔵文化財センター 1996年）を参照されたい（第49図も参照のこと）。

- ①丘陵南部にある「天花寺南砦跡」をも含めた範囲全体を天花寺城跡として把握できること。
  - ②その結果、天花寺城跡は東西約500m、南北約150mの規模となること。
  - ③これまでに指摘されていた2箇所の曲輪を含め、「天花寺南砦跡」の間に5箇所の曲輪があると考えられること。このうち、近世に建立された天華寺（現在も続く）は、曲輪5と重複していること。
  - ④曲輪5は楕円形を呈し、全体を土塁・堀で囲んだものであり、他の曲輪と比べて異質であること。
  - ⑤城跡は、丘陵内の古墳を破壊することなく造作されているらしいこと。
  - ⑥主郭となる曲輪1の虎口形態とその進入路が明確に判明したこと。
- ここでは、以上の測量成果を基に、発掘調査成果をつきあわせて考えて見る。

### 2 発掘調査による天花寺城跡の状況

発掘調査の対象となったのは、曲輪2～5である。それぞれ部分的な調査ではあるが、確認された遺構を個々に見ておく。

曲輪2 曲輪2では、曲輪3との境となっている土塁（S Z 450）と堀（S D 452）および曲輪2内の一部が該当した。堀S D 452は旧地形から幅約5m、深さ約1.5mの断面逆台形状を呈する掘削である。土塁S Z 450は堀S D 452の掘削土を積み上げることで造作していると考えられる。

土塁の断面を観察した状況からは、土塁と並行した方向については北側から南側へ、土塁と直交する方向については堀に近いところから遠くなる方へ、順次土を積み上げているものと考えられた。版築など、とくに丁寧な造作は行っていない。

土塁S Z 450の東側には、それと直交する低土塁S Z 455が確認された。土塁S Z 455は、測量調査では確認できなかったものである。2つの土塁間は小規模な虎口を形成しており（北虎口）、そこから北側斜面部へと至るものと考えられる。これまでに確認された虎口は曲輪1の1箇所（南虎口）のみであり、しかも丘陵北側斜面部へと至る虎口はこれが初めて確認されたものである。規模は小さいことから、北虎口は副次的なものと考えられる。

曲輪3 曲輪2の西側にあたる曲輪3は、南部に土塁S Z 498と堀S D 511を持つことで区画されたエリアである。しかし、調査の結果、堀S D 511は弥生時代の環濠S D 497を再利用したものであることが確認された。しかも、環濠S D 497をそれほど大きく掘削することなく土塁を作っている。このことから曲輪3は、曲輪として造作されたとはいえ、極めて簡便で弱い意味しか有していないかたるものと推察される。

曲輪内は、第8次調査では中世遺構の存在を想定した精査が綿密に実施されたにもかかわらず、城館に関連すると認められる遺構は全く確認されなかつた。このことから曲輪3は、区画を伴いながらも広いオープンスペースであったと考えられる。

曲輪4 曲輪3の南にあたる曲輪4は、北には曲輪

3の堀、南には曲輪5の堀がある。つまり、曲輪4に伴う土壘は存在しないことになる。実際、曲輪4の東部には小谷古墳群10基がひしめいており、居住空間としての利用は考えにくい。

発掘調査でも、城館に関連する遺構は確認されていない。ただし、小谷10号墳の斜面からは、後述の天花寺中世墓群の時期と考えられる、15世紀前半頃の土器類がまとまって出土している。この付近に中世墓は形成されていないが、中世墓を造営した集団が、古墳に対して何らかの「祖先祭祀」的なことを行った痕跡であることも考えられる。いずれにしても、天花寺城とは直接関係の無いものと見るべきであろう。

曲輪5 城の南端部に位置する曲輪5は、先述のように、北部の曲輪1～3とは違った様相を呈している。曲輪5は、土壘と堀を伴う楕円形の曲輪である。S D 366が北部の堀、S D 23・41・271が南部の堀にあたると考えられる。S D 23とS D 41間は4.8mあり、そこに2基のビットがあることから、虎口に相当すると考えられる。堀から出土した土器類から、15世紀後半頃の遺構と考えられる。

曲輪5の北東端は、調査前から小谷11号墳填丘と重複していたが、発掘調査の結果も一体で整形されていると判断できる。

曲輪5の内部からは、掘立柱建物などの生活を示す遺構が確認されていない。また、堀から出土した少量の遺物を除けば、曲輪内の出土遺物も皆無に近い。小谷13号墳の斜面からは15世紀後半～16世紀初頭頃の土器類が出土しているが（第6・7次）、これも先に見た天花寺中世墓群の「祖先祭祀」に関わる可能性の方が高い。

### 3 天花寺城跡の構成

以上の発掘調査成果を、測量調査と絡め、天花寺城跡の構成等について見ておく。

曲輪2の評価 曲輪2では、北に開口する虎口が新たに確認されるという大きな成果があった。測量調査時点の認識と同様、曲輪1に直接付随する曲輪として認識でき、その一体性は虎口の確認により、より一層明確になったといえる。

ただし、曲輪内では遺構・遺物は全く確認されな

かった。曲輪内に相当する調査範囲は狭いが、遺構・遺物が皆無である点は無視できない状況である。

曲輪3の評価 曲輪3に伴う土壘・堀と考えられるのは、発掘調査の対象となったS Z 498と堀S D 511（いずれも第8次）である。この遺構は、先述のように弥生時代の環濠を利用したものであるが、掘削深度は極めて浅く、大きな改変をほとんど行っていない。

曲輪内の発掘調査結果は、建物遺構はおろか、出土遺物も皆無に近い状況である。つまり、恒常的な居住があったと判断することはできないのである。曲輪4の評価 曲輪3で見られた問題は、曲輪4ではより明確となっている。この曲輪でも遺構・遺物は皆無の状態である。この曲輪を主体的に囲む堀・土壘も無い。

丘陵東部の斜面を「切岸」と見れば、曲輪4も広義には「城内」である。しかし、以上の状況からは、曲輪4は曲輪としての機能も構成もなしていないと考えざるを得ない。曲輪4は曲輪3・5間の未使用地と見るべきであろう。

曲輪5の評価 曲輪5では、南側に開口する虎口が確認されたものの、曲輪2～4と同様、それ以外の遺構・遺物は皆無に近い。また、曲輪4の南側にあたる堀切（南部堀切）との連動が見られない。

曲輪5の形態が他の曲輪とは異なることからも、天花寺城跡で最も先行して造作された曲輪と考えられ、南部堀切が削除された際に手を加えられないまま用いられたものと考えられる。

城の構成と時期 以上のことから、天花寺城跡の構成は、旧曲輪4を境に北部と南部とに分けて考える必要があるといえる。また、曲輪の造作からは、大きく2期に区分できると考えられる（第56図）。

（第1期）曲輪5が造成される。北部は手つかずのままで考えられる。

（第2期）曲輪1～3の造成と、南部堀切が設置される。曲輪5はそのまま用いられている。

第1期は、曲輪5の堀（S D 41）出土土器から15世紀後半頃と考えられる。第2期は、明確な時期を示す遺物が無いので厳密には分からぬが、史料上確認できる16世紀中葉頃には形成されていたものと考えられる。



第56図 天花寺城の変遷 (1 : 5,000)

天花寺城の特徴 今回の調査で確認された天花寺城跡最大の特徴は、居住性を示すと考えられる遺構・遺物がほとんど確認できなかつたことである。天花寺城の城域は広い。伊坂城跡（四日市市）<sup>10</sup>や菊永氏館跡（阿山郡阿山町）<sup>11</sup>のように、比較的大規模な館で、多くの遺構や出土遺物が見られ、恒常的な居住が想定できるものとは対照的である。発掘調査の結果からは、天花寺城は恒常的な居住地では無いと判断される。

では、天花寺城跡の機能とはいかなるものであつたのだろうか。発掘調査結果からでは知り得ないが、重要なのは城跡南端に設置された堀切の存在である。これは「遠構」<sup>12</sup>と見ることができ、城の中心である曲輪1と遠構の堀切との間に、極めて大きな空間を持つ城であるということができる。

城郭研究では、このような空間は軍事的臨時性の高い「駐屯部」として評価されている<sup>13</sup>。天花寺城跡は、この「駐屯部」が極めて広い範囲に認められる城郭なのではないだろうか。

天花寺城は、永禄12(1569)年の織田氏による北畠氏攻略戦における北畠氏側の重要城郭として文献史料にも登場している<sup>14</sup>。織田vs北畠の主要な攻防があった場所として、「駐屯部」という説明は、調査成果からも支持できるものである。

#### 4 天花寺城跡と天花寺中世墓群の関係

さて、天花寺城第1期は、天花寺中世墓群と一部重複している。中世墓群は、曲輪5の南東隅にあたる部分（東群）と、弥生時代の環濠S D 306が存在していた付近（西群）の2箇所で見られる。

**中世墓東群** 発掘調査の結果からは、東群の造墓は13世紀中頃からはじまり、15世紀後半頃に終息していると見られる。蔵骨器には、古瀬戸や常滑焼の壺・瓶・甕類、南伊勢系土師器鍋などが用いられている。墓壙の上部には石積みが見られ、上部には五輪塔・宝篋印塔などの塔婆が建てられていることから、比較的裕福な階層の墓地と考えられる。

なお、東群の周辺では、近世初期に再度墓地とし

て利用された痕跡が確認されている。天花寺城の造成という中断期を挟むものの、この一角は長期にわたって墓域として認識されていたと考えられる。

中世墓西群 西群では、礫を伴った焼土坑群が確認されている。土坑内からは、火葬人骨片は出土するものの、副葬品に相当するものは伴っていない。

西群が形成された時期の特定は難しく、中世～近世にかけての遺構群とせざるを得ない。ただし、遺構の状況から見て、東群の火葬が実施された場所 = 茅罿の場か、あるいは、蔵骨器や塔婆を持ち得ない階層の墓地と考えられる。

天花寺城跡と中世墓群の関係 天花寺城跡曲輪5の堀と考えられる溝S D 41の上層からは、破片ながら五輪塔の一部が出土している。つまり、曲輪5の堀が埋没する段階に、周辺の中世墓群からの遺物が入り込む状況下にあったことになる。

また、L字形に屈曲する溝S D 61は、SD 23・41と直交関係にあるので、その間連で把握することができる。SD 61の埋没後にも小規模な中世墓がその上面に形成されている。

以上のことから、曲輪5の堀は中世墓群の形成中に開削され、中世墓群が荒れ始めた時期～おそらくは16世紀代～に廃絶したものと考えられる。ただし、これを示す出土資料があまりにも少ないので、可能性の提示に止めざるを得ないのが現状である。

## 5 天花寺丘陵の中世

以上、天花寺丘陵における中世の状況をいくつか検討してきた。最後に、当該時期の特長をまとめておく。

天花寺城以前 天花寺城が造成される以前、当地には中世墓群が形成されていた。調査成果としては東群・西群の2箇所に分かれるが、西群の形成時期は

不明である。東群は13世紀中頃から造営されはじめ、15世紀前半頃までは継続している。15世紀後半から16世紀前半頃の墓域の状況は明確ではない。東群では、蔵骨器と石塔を伴っており、副葬品が皆無な西群と対称的である。

天花寺城築造期 曲輪5にはじまると考えられる天花寺城の造成は、15世紀後半頃と考えられる。これにより、中世墓東群の一角が破壊されている。

丘陵東麓の天花寺北瀬古遺跡からは多数の五輪塔などが出土している。これらは、曲輪5の南にあたる南部堀切の開削によって破壊された中世墓に伴う石塔類である可能性が高い。天花寺北瀬古遺跡で出土した石塔類には多数の一石五輪塔が含まれており、中には16世紀初頭頃のものも含んでいる。このことからも、南部堀切を含む天花寺城第2期の造成時期は16世紀中葉頃と考えられる。

天花寺城廃絶後 中世墓東群の付近は再度墓地として利用されはじめる。これは、曲輪5に重複するようなかたちで造成された近世天華寺にも関係するのであろう。

この付近は、近世を通じて天華寺の境内地として利用され続ける。天華寺には礫石絆群が多数埋納されている。近世以降の当地は、靈地として存在し続けることになったのである。

(伊藤)

### 【註】

- ①三重県埋蔵文化財センター 伊坂城跡発掘調査報告 (2002年)
- ②阿山町教育委員会 菊永氏城跡発掘調査報告 (1987年)
- ③西脇紹生「城の外にひろがるもの」( 中世城郭研究 第17号 2003年)
- ④松岡進 戦国期城館群の景観 (校倉書房 2002年)
- ⑤伊藤裕偉「中世後期の地域情勢と大名権力 - 北畠氏による領域支配の実態 - 」( Michistory vol.8 1996年)、竹田憲治「北畠氏と中世城館」( 伊勢国南北畠氏の研究 吉川弘文館 2004年)

報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告260

## 天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告VII

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群(第8次)  
総括～天花寺丘陵発掘調査～

2005(平成17)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 ㈲第一プリント社